

# 大町遺跡

—府営久米田第二住宅建て替えに伴う発掘調査—

2007年3月

大阪府教育委員会

# 大町遺跡

—府営久米田第二住宅建て替えに伴う発掘調査—

2007年3月

大阪府教育委員会

## 序 文

本書で報告いたします大町遺跡は、岸和田市の北端近くに位置しています。岸和田市は江戸時代の始めより城下町として栄え、現在も多くの人々が居住する府内有数のベッドタウンです。遺跡周辺もまた、所々で田畠は残ってはいますが、市街化の波を受けて近代以前の姿を見出すことは難しくなっています。こうしたなか、府営久米田第二住宅の建て替えに伴って発掘調査を実施し、古墳時代初頭の工房跡や自然河道、江戸時代末頃の耕作痕跡などを発見し、遺跡周辺の土地利用やその変遷があきらかになりました。

そもそも今回の発掘調査は、平成 13 年度の試掘調査の成果にもとづき拡大した遺跡範囲の一部で実施したものです。本課では分布調査や試掘調査を重ね、遺跡という先人達の残した生活の痕跡の追求に努めていますが、こうした作業の積み重ねが今回の貴重な調査成果に結びついたといえます。

調査にあたりましては、関係各位から多大なご指導・ご助力をいただき、厚く感謝いたします。また今後とも文化財行政に対しまして、いっそうのご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 19 年 3 月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 丹上 務

## 例　言

1. 本書は大阪府教育委員会が大阪府建築都市部（現住宅まちづくり部）より依頼を受け、平成15～16年度に実施した岸和田市大町所在、大町遺跡の府営久米田第二住宅の建て替えに伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成15年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師人楽康宏（調査番号：03013）、平成16年度を同技師三木弘（調査番号：04013）を担当として実施した。これらに伴う遺物整理事業については、平成16年度に調査管理グループ技師竹原伸次・林日佐子・藤田道子、平成17年度に同技師林日佐子・西川寿勝・藤田道子を担当として実施した。
3. 本調査の写真測量は、平成15年度に株式会社日測、平成16年度に株式会社航空撮影センターに委託した。写真撮影フィルムについては、各受託会社において保管している。
4. 本書で掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 花粉分析等については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を本書IV章に掲載した。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書の編集・執筆は、三木が行なった。
8. 府営住宅建て替えに伴う発掘調査・遺物整理および本書の作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部が負担した。
9. 現地での発掘調査、遺物整理事業および本書作成にあたっては、下記の方々、機関から助言および協力を得た。記して感謝いたします。（敬称略）  
竹内直文、安藤寛、池峰龍彦、近藤利由、磐田市教育委員会、岸和田市教育委員会、（財）大阪府文化財センター
10. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は3,014円である。

# 本文目次

序文

大阪府教育委員会文化財保護課長 丹上 務

例言

I 大町遺跡の立地環境と歴史	三木
1 大町遺跡の立地環境	1
2 大町遺跡周辺の歴史	3
II 調査の経緯と経過	三木
1 調査に至る経緯	9
2 調査経過	11
3 調査方法	12
III 発掘調査の成果	三木
1 基本層序	13
2 試掘調査の成果	13
3 平成 15 年度の発掘調査	17
(1) 調査概要	
(2) 03-1 区の調査	
(3) 03-2 区の調査	
4 平成 16 年度の発掘調査	65
(1) 調査概要	
(2) 04-1 区の調査	
(3) 04-2 区の調査	
5 繩文土器・石器	137
IV 自然科学分析の成果	パリノ・サーヴェイ株式会社
1 04-1・2 区の自然河道における花粉分析	140
2 出土木材の年代測定	149
V 総括	三木
1 大規模地形改変の時期	156
2 近代・近世の土地利用—長方形土坑群と不定形土坑の性格について—	157
3 弥生時代後期～古墳時代前葉にかけての集落動向	159
4 調査区周辺の土地利用の変遷	161
実測遺物観察表	163
拓影遺物観察表	190

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 大町遺跡周辺の地質  
第 2 図 大町遺跡周辺の遺跡分布  
第 3 図 調査地点の位置  
第 4 図 平成 13(2001)年以前の大町遺跡範囲  
第 5 図 調査区の位置  
第 6 図 調査区の地区割り  
第 7 図 試掘調査の位置と上層  
第 8 図 調査区の位置と検出遺構  
第 9 図 SD006・SX008 出土遺物  
第 10 図 03-1 区の主要検出遺構  
第 11 図 03-2 区の主要検出遺構  
第 12 図 03-1・2 区検出の不定形土坑  
第 13 図 03-1・2 区土層観察ベルトの位置  
第 14 図 03-1・2 区の土層  
第 15 図 NR001 出土遺物(1)  
第 16 図 NR001 出土遺物(2)  
第 17 図 NR001 出土遺物(3)  
第 18 図 NR001 出土遺物(4)  
第 19 図 NR001 出土遺物(5)  
第 20 図 NR001 出土遺物(6)  
第 21 図 NR001 出土遺物(7)  
第 22 図 NR001 出土遺物(8)  
第 23 図 NR001 出土遺物(9)  
第 24 図 NR001 出土遺物(10)  
第 25 図 NR001 出土遺物(11)  
第 26 図 NR001 出土遺物(12)  
第 27 図 NR001 出土遺物(13)  
第 28 図 NR001 出土遺物(14)  
第 29 図 NR001 出土遺物(15)  
第 30 図 NR001 出土遺物(16)  
第 31 図 NR001 出土遺物(17)  
第 32 図 NR001 出土遺物(18)  
第 33 図 NR001 東岸上整地土出土遺物  
第 34 図 遺構外出土遺物(1)  
第 35 図 遺構外出土遺物(2)  
第 36 図 遺構外出土遺物(3)  
第 37 図 遺構外出土遺物(4)  
第 38 図 03-1・2 区出土遺物拓影(1)  
第 39 図 03-1・2 区出土遺物拓影(2)  
第 40 図 03-1・2 区出土遺物拓影(3)  
第 41 図 03-1・2 区出土遺物拓影(4)  
第 42 図 03-1・2 区出土遺物拓影(5)  
第 43 図 03-1・2 区出土遺物拓影(6)  
第 44 図 04-1 区の主要検出遺構  
第 45 図 04-1 区上層観察ベルトの位置  
第 46 図 04-1 区の上層  
第 47 図 河道 2・3 の第 V 区画グリッド  
第 48 図 河道 2 出土遺物(1)  
第 49 図 河道 2 出土遺物(2)  
第 50 図 河道 2 出土遺物(3)  
第 51 図 河道 2 出土遺物(4)  
第 52 図 河道 2 出土遺物(5)  
第 53 図 河道 2 出土遺物(6)  
第 54 図 河道 2 出土遺物(7)  
第 55 図 河道 2 出土遺物(8)  
第 56 図 河道 2 出土遺物(9)  
第 57 図 河道 2 出土遺物(10)  
第 58 図 河道 2 出土遺物(11)  
第 59 図 木杭検出の範囲  
第 60 図 木杭検出の状況  
第 61 図 河道 2・3 と溝状落込み  
第 62 図 河道 3 検出木杭  
第 63 図 河道 3 出土遺物(1)  
第 64 図 河道 3 出土遺物(2)  
第 65 図 075 竪穴状遺構  
第 66 図 075 竪穴状遺構の遺物出土状況  
第 67 図 075 竪穴状遺構出土遺物  
第 68 図 030 土坑

第 69 図	080・076・079 溝	第 83 図	04-1・2 区トレーナー内土層概念
第 70 図	080 溝出土遺物	第 84 図	04-2 区の主要検出遺構
第 71 図	長方形土坑の体積	第 85 図	04-2 区土層観察ベルトの位置
第 72 図	長方形土坑出土遺物	第 86 図	04-2 区の上層
第 73 図	004・016 土坑	第 87 図	04-1・2 区出土遺物拓影(1)
第 74 図	04-1 区検出の不定形土坑	第 88 図	04-1・2 区出土遺物拓影(2)
第 75 図	025 土坑	第 89 図	04-1・2 区出土遺物拓影(3)
第 76 図	045 土坑	第 90 図	03・04 区出土の縄文土器
第 77 図	049 土坑	第 91 図	03・04 区出土の石器
第 78 図	073 土坑	第 92 図	河道 2 における主要花粉化石群集の層位分布
第 79 図	04-1 区検出遺構出土遺物	第 93 図	河道 3 における主要花粉化石群集の層位分布
第 80 図	04-1 区の遺構外出土遺物	第 94 図	花粉化石
第 81 図	04-1 区トレーナー位置		
第 82 図	04-1 区トレーナー内上層		

## 表 目 次

第 1 表	河道 2 出土遺物組成
第 2 表	河道 2 出土遺物の器種別組成
第 3 表	河道 3 出土遺物組成
第 4 表	075 堅穴状遺構の出土遺物組成
第 5 表	080 溝出土遺物組成
第 6 表	04-1 区長方形土坑一覧
第 7 表	長方形土坑出土遺物組成
第 8 表	04-1 区検出遺構出土遺物組成
第 9 表	04-1・2 区の遺構外出土遺物組成

第 10 表	トレーナー出土遺物組成
第 11 表	河道 1 出土遺物組成
第 12 表	04-2 区長方形土坑一覧
第 13 表	分析試料一覧
第 14 表	花粉分析結果(1)
第 15 表	花粉分析結果(2)
第 16 表	放射性炭素年代測定値
第 17 表	暦年較正結果
付表	04-1・2 区河道 1・2 出土遺物組成

## 図 版 目 次

図版 1	大町遺跡遠景
大町遺跡遠景	(東から)
大町遺跡遠景	(西から)
図版 2	03-1 区
03-1 区全景	(南東から)
03-1 区全景	(北西から)

図版 3	03-2 区
03-2 区全景	(南東から)
03-2 区全景	(東から)
図版 4	03-2 区
SX003 全景	(北西から)
SX002 全景	(北から)

- 図版 5 03-2 区  
NR001 内土器出土状況（南から）  
NR001 土層断面（東から）
- 図版 6 04-1・2 区  
04-1 区全景（垂直）  
04-2 区全景（垂直）
- 図版 7 04-1 区  
04-1 区南西半全景（垂直）  
04-1 区北東半全景（垂直）
- 図版 8 04-1 区  
04-1 区全景（南西から）  
04-1 区全景（北東から）
- 図版 9 04-1 区  
河道 2・3 全景（南東から）  
河道 2・3 全景（北西から）
- 図版 10 04-1 区  
河道 2 土層断面（南東から）  
河道 3 土層断面（南東から）
- 図版 11 04-1 区  
河道 3 内杭検出状況（南から）  
080 溝全景（北から）
- 図版 12 04-1 区  
075 壊穴状遺構全貌（南西から）  
075 壊穴状遺構全景（北西から）
- 図版 13 04-1 区  
075 壊穴状遺構遺物出土状況（北西から）  
小穴 1・2・3 土層断面
- 図版 14 04-1 区  
長方形土坑群全景（南西から）  
04-1 区ベルト 3 土層断面（南西から）
- 図版 15 04-2 区  
04-2 区全景（北西から）  
河道 1 上層断面（南東から）
- 図版 16 NR001 出土遺物
- 図版 17 NR001 出土遺物  
図版 18 NR001 出土遺物  
図版 19 NR001 出土遺物  
図版 20 NR001 出土遺物  
図版 21 NR001 出土遺物  
図版 22 NR001 出土遺物  
図版 23 NR001 出土遺物  
図版 24 NR001 出土遺物  
図版 25 NR001 出土遺物  
図版 26 NR001 出土遺物  
図版 27 NR001 出土遺物  
図版 28 NR001・NR001 東肩整地土出土遺物  
NR001 出土遺物  
NR001 東肩整地土出土遺物
- 図版 29 03-1・2 区遺構外出土遺物  
図版 30 03-2 区遺構外出土遺物  
図版 31 河道 2 出土遺物  
図版 32 河道 2 出土遺物  
図版 33 河道 2 出土遺物  
図版 34 河道 2・3 出土遺物  
図版 35 河道 2 出土遺物  
図版 36 河道 2 出土遺物  
図版 37 河道 2 出土遺物  
図版 38 河道 2 出土遺物  
図版 39 河道 3 出土遺物  
図版 40 河道 2・3・075 壊穴状遺構出土遺物  
河道 2・3 出土遺物  
河道 2・3・075 壊穴状遺構出土遺物
- 図版 41 080 溝・075 壊穴状遺構・長方形  
土坑群出土遺物  
080 溝出土遺物  
075 壊穴状遺構・長方形土坑群出土遺物
- 図版 42 03・04 区出土縄文土器  
図版 43 03・04 区出土石器

# I 大町遺跡の立地環境と歴史

## 1 大町遺跡の立地環境

大町遺跡が位置する和泉地域は、和歌山県との障壁をなす和泉山脈、そこから北西方向に広がる丘陵地帯、丘陵の前線に広がる洪積丘陵、そして海岸線までの沖積平野に大きく分かれる。

和泉山脈は標高800m前後とあまり高くはない。また山部は削合に緩やかである。この山脈は領家花崗岩類、泉南酸性火碎岩類を基盤層として、それを覆って凝固の不充分な礫岩・砂岩・泥岩が互層をなして堆積している。和泉山脈は、大阪湾方向には緩やかに、これに対して和歌山県側には比較的急峻に傾斜している。

さらに大阪湾側には山脈の基盤層が張り出し、神於山を始めとする前衛山地が4~5kmほどにわたって形成されている。

前衛山地の北には丘陵地帯が広がっている。丘陵地帯は大阪層群と呼ばれる、充分に凝固していない礫岩・砂岩・泥岩およびこれらの互層からなる地層によって形成されている。そして和泉山脈に源をもつ中・小河川がこの丘陵地帯を深く切り込み、南北方向を幾つも分断している。

丘陵地帯の縁辺には、中・小河川に沿った河岸丘陵、あるいは海岸段丘が広がる。段丘は比高30~50mほどの高位段丘、10~30mの中位段丘、10m以下の低位段丘に分かれ、和泉地域では主として中位段丘面が発達している。高位段丘面は、和泉市信太山付近、大町遺跡の西方にあたる久米田池の西辺から北にかけて、そして泉佐野市見出川西岸に認められる程度である。

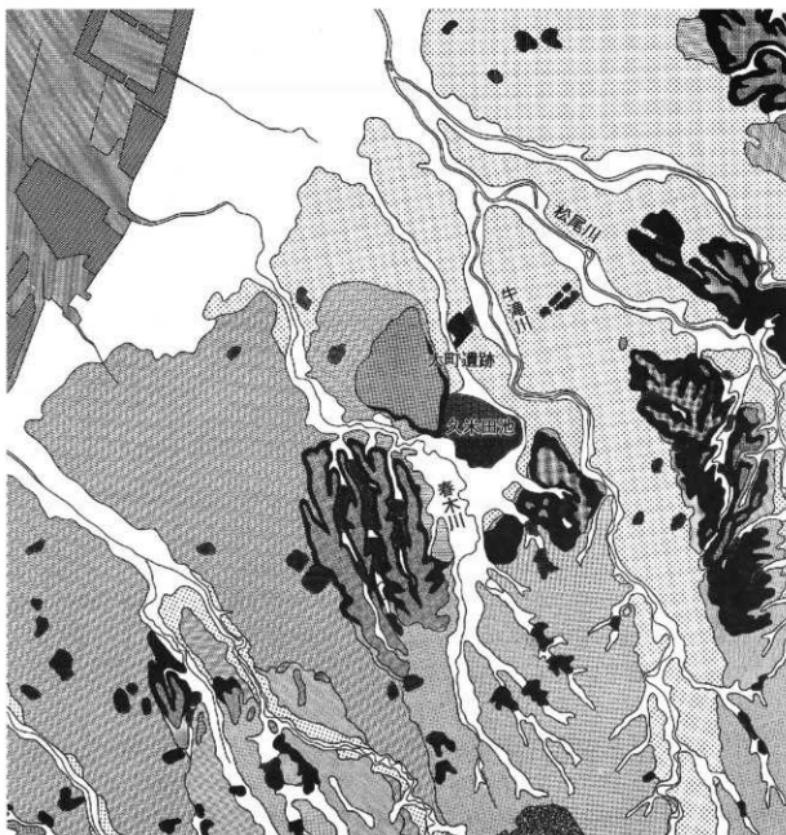
低位段丘面は、和泉山脈から大阪湾に注ぐ河川の縁辺に広がりをみせるが、横尾川・松尾川・牛滝川およびそれらが合流した大津川の流域を除くとあまり発達してはいない。

また河岸段丘は、河川の東岸が西岸よりも発達している。すなわち、河谷の西に寄って河川が現状では流れているのである。河川は河谷の東から西へ移動する傾向がある。

沖積平野は大阪湾の沿岸に広がるとともに、各河川に沿って認められる。河川沿いの沖積平野はあまり発達していない。和泉地域における沖積平野は概して狭小であり、ことに南ほど面積は狭くなっている。

こうした和泉地域の地形にあって大町遺跡は、東を流れる牛滝川と西を流れる天の川に挟まれた中位段丘上に位置している。したがって地質図をみると限り、比較的安定した地形の上に所在しているように看取されるかもしれない。

しかし遺跡周辺は久米田池から久米田古墳群にかけて延びる比高差10mほどの微高地の縁辺にあたり、また東に隣接する金池と呼ばれる溜池の存在を考慮すると、遺跡周辺は冠水しやすい地形であったと考えられる。このことは、調査地域内に設定したトレンチの地形を観察することでも肯定される。



- |          |          |
|----------|----------|
| □ 沖積地    | ■ 大阪層群下部 |
| ▨ 低位段丘   | ■ 溜池     |
| ▨ 中位段丘   | ▨ 領家花崗類  |
| ▨ 高位段丘   | ▨ 海      |
| ■ 大阪層群上部 | ▨ 埋立地    |

0 2km

第1図 大町遺跡周辺の地質

(岸和田市1979年より転載・一部改変)

## 2 大町遺跡周辺の歴史

大町遺跡は岸和田市大町地内に所在するが、約1.4m北東に進むと和泉市域に入る。したがって、ここでは岸和田市と和泉市の両域に目をやりつつ、遺跡周辺の歴史的状況を通観したい。

(旧石器時代～縄文時代草創期)

和泉地域における旧石器時代の生活痕跡は明瞭ではなく、岸和田市・和泉市においても幾つかの遺跡で石器が出土し、あるいは採取されている程度である。

岸和田市域においては、国府型ナイフ形石器が岡山遺跡、葛城山頂遺跡、琴山遺跡、上フジ遺跡、西山遺跡、山ノ内遺跡で出土している。葛城山頂遺跡は、標高850m付近に位置する。大阪府およびその周辺地域における旧石器時代の遺跡の中でも、最も高所である。また山ノ内遺跡では、船底形石器や横長剥片の出土も認められる。

三田遺跡、下池田遺跡、黒石遺跡、栄の池遺跡では有舌尖頭器が出土している。

和泉市域をみると、父鬼町の標高400mの山腹に位置する大床遺跡から国府型ナイフ形石器、翼状剥片が出土しており、葛城山頂遺跡ほどではないが、高所にある旧石器時代の遺跡である。さらに伯太北遺跡、信太山遺跡、觀音寺山遺跡で国府型ナイフ形石器が、和氣遺跡で翼状剥片が出土している。

万町北遺跡、伯太北遺跡では有舌尖頭器の出土が認められている。

以上の遺跡は、葛城山頂遺跡や大床遺跡などを例外として、丘陵地帯およびその裾部寄りの洪積台地上にあり、和泉山脈と平行するように分布している。そして和泉市域より北になると、山脈と大阪湾との間に広がりが生じるため、遺跡分布は散在的になる。

(縄文時代早期～晩期)

岸和田・和泉市域における縄文時代の遺跡の在り方も、旧石器時代に統いて散在的である。両市域において最も遡るのは、和泉市の仏並遺跡で出土した早期末とみられる織維土器である。仏並遺跡は山地と丘陵に挟まれた狭い谷間の、標高100mほどの中位段丘上に位置し、早期の土器のほか、前期の土器、中・後期の竪穴住居や土器棺墓が発見されている。

前期の土器は和泉市小田遺跡、池田寺遺跡で出土しているが、早期と同様に遺跡の分布は極めて散漫である。

中期になると、遺跡数は増加する。岸和田市域では箕上路遺跡、葛城山頂遺跡で土器が、和泉市域では先の仏並遺跡を始め、小田遺跡、万町北遺跡でやはり土器が出土している。このうち箕上路遺跡は低位段丘上に位置しており、低域に生活圏が拡大する。

後期になると、遺跡数はさらに増加する。岸和田市域では、山ノ内遺跡を始め、沖積地上に位置する春木八幡山遺跡や春木天の川遺跡、低位段丘上の府中遺跡や軽部池西遺跡、箕上路遺跡で土器が出土している。さらに葛城山頂遺跡や高位段丘面上の山直中遺跡でも土器が出土している。また和泉市域では、先述したように仏並遺跡では竪穴住居や土器棺墓が検出されている。また中



第2図 大町遺跡周辺の遺跡分布

位段丘面の池田寺遺跡や万町遺跡、低位段丘の伯太北遺跡、府中遺跡、池上曾根遺跡で土器の出土が認められる。遺跡数の増加とともに、立地のバリエーションが広まり、高位段丘面以下の範囲に普遍化する。また本報告書の大町遺跡からも後期の土器が出土している。

晚期になると、後期から継続しない遺跡があるため、後期より遺跡数が若干減少する。後期から続く遺跡としては、岸和田市域では春木八幡山遺跡、春木天の川遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡、和泉市域では府中遺跡、万町北遺跡、仏並遺跡、池上曾根遺跡が挙がる。このうち山ノ内遺跡ではサヌカイトの石核などが出土し、石器製作の可能性が推測されている。また小田遺跡でも、後期にいったん断続するが、晚期の土器が出土している。晚期の遺跡は高位段丘面から沖積地まで認められるが、概して中位段丘面に多く集まっている。さらに大町遺跡からも、晚期の土器が出土している。

なお、詳細な時期比定は難しいが、岸和田市域では加守三昧山遺跡、二俣池北遺跡、土生遺跡で石匙、琴山遺跡、尾崎遺跡、三本松下遺跡で石錐の出土が認められ、その他に石器の出土が知られる遺跡として狐塚遺跡、荒子遺跡、畠遺跡、土生淹遺跡、大澤遺跡などがある。また栄の池遺跡では緑色結晶片岩製の石棒が出土している。

#### (弥生時代)

縄文後・晚期に遺跡数が増加する岸和田・和泉市域であるが、弥生前期になると遺跡数は減少する。しかもそれらは春木八幡山遺跡以外、弥生時代になって出現する遺跡であり、春木八幡山遺跡にあっても、前期でも後半の土器であるので、縄文時代からは一時断続している。

弥生前期の遺跡としては、岸和田市域では先述の春木八幡山遺跡のほか、田治米宮内遺跡、加守三昧山遺跡、和泉市域では池浦遺跡と池上曾根遺跡が挙がる。岸和田市域の3遺跡は土器が出土しているのみで、明瞭な遺構の存在は知られていない。池浦遺跡では前期中葉の幅2m、深さ1m以上の「V」字状溝が発見され、集落を囲む環濠であるとの考えも示されている。この集落は短期間で廃絶したようで、前期後葉には続かないが、入れ替わるように前期後葉から池上曾根遺

1:板原遺跡	2:豈中遺跡	3:和泉国府跡	4:泉井上神社	5:国府城跡	6:府中遺跡	7:和泉寺跡
8:櫛上遺跡	9:吉井遺跡	10:吉井上品寺跡	11:夜庭鹿神社	12:萬月寺跡	13:愛土寺遺跡	14:犬飼堂施寺
15:荒木土壘跡	16:下池田遺跡	17:西人新道跡	18:今木遺跡	19:今木庵寺	20:越都池西遺跡	21:小田遺跡
22:鶴部池遺跡	23:鶴那池	24:和久遺跡	25:般音寺城跡	26:狐塚古墳	27:寺門古墳・古墓	28:寺田遺跡
29:摩湯北遺跡	30:荒子他遺跡	31:小松里庵寺	32:八木城跡	33:大路城跡	34:丸山古墳	35:大町遺跡
36:今木城跡	37:山ノ内遺跡	38:ナリ古墳	39:田舎羽遺跡	40:池尻古墳	41:額原遺跡	42:浮行寺古墳
43:久米田古墳群	44:只吹山古墳	45:風吹山古墳	46:久米田寺跡	47:池尻町遺跡	48:田治米魔寺	49:摩湯山古墳
50:馬子塚古墳	51:山東北遺跡	52:田治米宮内遺跡	53:三田遺跡	54:上フジ遺跡	55:二俣池北遺跡	56:水込遺跡
57:黒石遺跡	58:山東中遺跡	59:東山古墳	60:三田古墳	61:久木田池	62:両山久取遺跡	63:岡山遺跡
64:岡山狐塚古墳	65:岡山御坊跡	66:西山遺跡	67:古鏡山土地	68:西山古墳	69:楠本神社古墳	70:高山古墳
71:三田墓地	72:どぞく遺跡	73:お立場古墳	74:猪谷内須	75:重ノ原古墳群	76:松尾鹿児原輪窓跡	
77:馬塚古墳	78:重ノ原遺跡	79:重ノ原古墳	80:小金塚古墳	81:尾牛遺跡	82:赤山古墳群	83:下松狐塚古墳
84:狐塚遺跡	85:上松三味山遺跡	86:武藏魔寺	87:岡山八川遺跡	88:介池遺跡	89:合池遺跡	90:上松遺跡
91:道ノ池窪跡	92:唐池遺跡	93:笠置遺跡	94:板屋遺跡	95:上松中尾遺跡	96:泉光寺	97:壹山遺跡
98:仏谷尾遺跡	99:尾崎遺跡	100:兒子池東遺跡	101:兒子遺跡	102:上松狐塚古墳	103:琴山遺跡	104:土居城跡

遺跡地名

跡が出現する。池上曾根遺跡は和泉地域の最大級の拠点的集落であり、中期中・後葉に盛行期を迎え、後期末まで継続する。

中期になると、遺跡数は爆発的に増加する。但し、岸和田・和泉市域とともに、中期前半にあっては当該時期の土器の出土が知られる程度であり、本格的に集落形成がなされるのは中期中葉以後である。

中期の遺跡としては、岸和田市域では前期から続く田治米宮内遺跡、春木八幡山遺跡に加え、春木大の川遺跡、箕土路遺跡、下池田遺跡、栄の池遺跡、池尻遺跡、田治米音原神社遺跡、畠遺跡、山ノ内遺跡、児子池東遺跡、岡山矢取遺跡などがあり、さらに中期末から集落の形成が始まるとみられる遺跡にはどぞく遺跡や上松中尾遺跡がある。本報告書の大町遺跡においても中期前半～後葉の土器が出土している。

春木八幡山遺跡は早い時期の集落形成例であるが、その他の遺跡にあっては集落形成が明瞭になるのは中期後半からである。市域最大級の集落と推測される畠遺跡、竪穴住居や墓とみられる台状遺跡が見つかった軽部池西遺跡、竪穴住居が見つかった下池田遺跡を始め、山ノ内遺跡、栄の池遺跡でも集落形成が推定できる。

中期末になると、標高60～70mの丘陵上で、竪穴住居や掘立柱建物が発見されたどぞく遺跡や標高50mの丘陵上に位置する上松中尾遺跡といった高地性集落が出現する。

後期になると遺跡数は若干減少するが、後期後半～庄内式期にかけての時期に竪穴住居8軒が検出された西大路遺跡や土壤墓が見つかった箕土路遺跡が出現する。また軽部池西遺は中期より継続する。これらは大町遺跡の北西、牛滝川の西岸に位置する、連接する遺跡である。さらに下池田遺跡では竪穴住居や円形周溝墓が存在し、大町遺跡を含めた複数の遺跡からなるひとつの集落域(遺跡群)を形成していたと考えられる。

和泉地域における中期以降の遺跡動向についてみると、万町北遺跡で竪穴住居5軒、池田下遺跡で竪穴住居や方形周溝墓が発見されているのを始め、和氣遺跡、虫取遺跡、池田寺遺跡、小田遺跡でも当該時期の遺構あるいは遺物が検出されている。岸和田市域と同様に、和泉市域においてもこの時期には遺跡数が増加し、立地場所も広がる。

後期になると、岸和田市域でも存在が認められた高地性集落が出現する。標高65mに位置する觀音寺山遺跡、標高50～60mの惣の池遺跡があり、前者では100軒以上の竪穴住居が検出された。また万町北遺跡では竪穴住居と方形周溝墓、小田遺跡では溝など、府中遺跡でも後期や後期末～庄内式期の竪穴住居や方形周溝墓が発見されている。これらの遺跡には中期から継続したものもあり、万町北遺跡以外、中期よりもさらに集落が盛行する。岸和田市の畠遺跡、和泉市・泉大津市の池上曾根遺跡など中期に盛行し、後期に衰退傾向を示す遺跡と入れ替わるように集落が形成されているのである。

#### (古墳時代)

岸和田市域の田治米宮内遺跡、春木大の川遺跡、箕土路遺跡、下池田遺跡、栄の池遺跡、土生

遺跡、西大路遺跡は弥生後期に引き続いて庄内式期も集落の形成がなされたようだが、しかし布留式期になるとそれらも消滅、あるいは衰退傾向を示す。

古墳時代前期に明瞭な集落形成をみせるのは、竪穴住居2軒や掘立柱建物2棟などが発見された芝ノ垣外遺跡、布留式土器が多量に発見された磯上遺跡、そして前期後半に比定される100基以上にものぼる土壙墓が発見された三田遺跡がある。三田遺跡は摩湯山古墳の南方向約400mに位置していて、それとの関係が指摘されている。

中期後半から後期にかけては遺跡数が若干増加する。山直北遺跡で中期後半とみられる竪穴住居が、二俣池北遺跡、上フジ遺跡で後期後半の竪穴住居が発見されている。また畑遺跡は中・後期に、水込遺跡は後期後半には集落形成がなされている。

和泉市域では和氣遺跡や府中遺跡、小田遺跡で弥生後期から継続して古墳前期にも集落が形成されている。これらの遺跡は中期以降にも継続する。また後期になると万町北遺跡で再び集落形成が行なわれ、池田寺遺跡も現れる。

古墳については、岸和田市の摩湯山古墳(前方後円墳:200m)、貝吹山古墳(前方後円墳:130m)、和泉市の和泉黄金塚古墳(前方後円墳:94m)が前期後葉に築造される。そのうち貝吹山古墳は風次山古墳、および10基以上の円墳へと系譜を続け、久米田古墳群を形成する。摩湯山古墳の南西には、その陪冢とみられる1辺約35mの方墳である馬子塚古墳が存在する。この摩湯山古墳・馬子塚古墳と久米田古墳群とは系譜が異なるとみられる。

ところで先述したように、摩湯山古墳と三田遺跡の土壙墓とは相互に関係する可能性が指摘されているが、久米田古墳群との関連が考えられる集落城は今のところ詳細を得ない。ひとつ可能なことは、久米田池の構築にともなって破壊されたあるいは水没したとの見方である。いまひとつは、大町遺跡や下池田遺跡、箕土路遺跡などを含めた集落群と関係させて考えるという捉え方である。從来見過ごされがちであったこの点を考慮する必要性は高いといえる。

#### (飛鳥・奈良時代)

7世紀代の集落は、岸和田市域、和泉市域とともに少なく、岸和田市域では二俣池北遺跡と水込遺跡が、和泉市域では池田寺遺跡と万町北遺跡がそれぞれ挙がる程度であり、多くの遺跡では古墳時代後期から一時的に集落形成は断絶する。がしかし、8世紀になると両市域とも再び集落は激増している。

岸和田市域では山直北遺跡、芝ノ垣外遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡、吉井一ノ坪遺跡、宋の池遺跡、西大路遺跡、畑遺跡、黒石遺跡が、和泉市域では觀音寺遺跡、板原遺跡、古池遺跡、府中遺跡、小田遺跡がそれぞれ挙がり、さらに7世紀代に集落を形成した各遺跡も8世紀代に継続していく。

また古代寺院としては、7世紀後半の建立とみられる小松里廃寺や春木廃寺を始め、行基建立の伝承がある久米田寺、7世紀中葉の建立と推定され、寺院に附設されたとみられる掘立柱建物群が発見された池田寺跡、法隆寺式の伽藍配置に近いと推測される坂本寺跡、建物基壇の一部が

検出され、さらに奈良時代の掘立柱建物群も見つかった信太寺跡、承和6(839)年に和泉国分寺に昇格した安楽寺跡、そして和泉寺跡などが和泉市域にそれぞれ建立されたと考えられる。

ところで、和泉は古代の五畿のひとつであるが、当初は河内国に含まれていた。靈龜2(716)年に和泉・日根の2郡を河内国から割いて珍努宮に供したことが始まりとなり、同年には大鳥・和泉・日根の3郡を割いて和泉監が置かれた。珍努宮監をもって3郡を治めたが、天平12(740)年に和泉監が廃され、再び河内国に併合される。その後、天平寶字元(757)年になって、その3郡をもって和泉国が成立したという推移をたどっている。

なお大町遺跡の所在地は、和泉郡八木郷にあたる。八木郷には今木・池尻・大町・西大路・東大路・小松里・下池田・箕上路・中井・吉井の10村が属したといわれている。大町遺跡はそのうちの大町に所在する。

#### (平安時代)

奈良時代以来、平安時代にかけても継続する遺跡が数多くある。掘立柱建物群が検出された山直北遺跡や栄の池遺跡を始め、三田遺跡、上フジ遺跡、芝ノ垣外遺跡、水込遺跡、二俣池北遺跡、吉井遺跡などが挙がる。他方、掘立柱建物群や溝、井戸、土壌幕が見つかった山直中遺跡、掘立柱建物群、井戸、上坑が見つかった黒石遺跡は前時代とは継続性がなく、この時代になって形成が始まった集落である。

和泉市域にあっては、掘立柱建物群の発見された万町北遺跡が奈良時代からの継続的な集落、下池田遺跡や和氣遺跡は断続的な集落といえ、池上曾根遺跡も後者のタイプである。また和氣遺跡では、在地名主層の館との推定のある建物群が検出されている。

#### (鎌倉・室町時代)

鎌倉時代後半になって集落形成が始まる上松宮之遺跡、室町時代になって始まる板屋遺跡などもあるが、当該時代に集落形成の認められる多くの遺跡では、弥生・古墳時代以降、一度は開発の及んだ場所である。

但し、山直中遺跡、二俣池北遺跡、吉井遺跡、水込遺跡、中元社遺跡、黒石遺跡、犬飼堂遺跡のように平安時代から継続する集落と、平安時代には集落形成が認められない、もしくはその痕跡が極めて稀薄な集落とがある。後者の例としては、西大路遺跡、箕土路遺跡、軽部池西遺跡などがあり、西大路遺跡では平安時代においてのみ集落形成が不明確となるが、箕土路遺跡では奈良～平安時代の、軽部池西遺跡では古墳～平安時代の集落痕跡を欠いている。

こうした遺跡のうち、西大路遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物群や区画溝、井戸などが発見され、屋敷地を形成しているとみられる。上松宮之遺跡では数枚の完形の皿を埋納した鎌倉時代後期の祭祀関連上坑が発見されている。また二俣池北遺跡や箕土路遺跡、軽部池西遺跡では水田が検出されている。

和泉市域における鎌倉・室町時代の遺跡には、区画堀が検出された和氣遺跡や福瀬遺跡を始め、池田寺遺跡、万町遺跡などがある。

## II 調査の経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

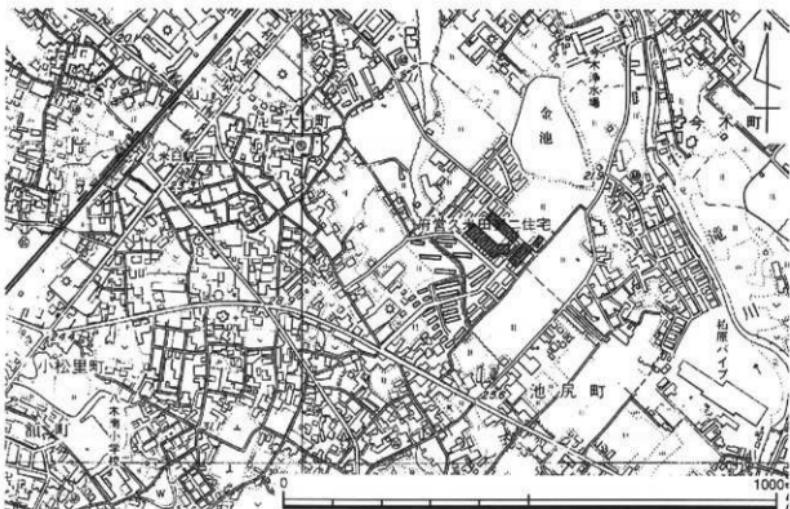
老朽化した府営久米田第二住宅の建て替え・整備にあたって、平成13年5月に大阪府建築都市部より大阪府教育委員会あてに試掘の依頼があった。

この時点における大町遺跡（第4図 122）は、府営住宅の北西の一部を占める直径40～50mほどの範囲であった。しかしこの数年、住宅域の南西で鶴羽遺跡が発見され、久米田古墳群の範囲は北方へ拡大するなど、周辺の開発にともなって遺跡の実態がより明らかになってきた。そして大町遺跡の範囲についても、府営住宅全域への広がりが予測された。

同年7月26日から5日間にわたって住宅地内の5ヶ所に試掘坑を設定して遺構・遺物の存否確認を行なった。その結果、住宅域の南西隅を除いて弥生時代～中世の遺物包含層、あるいはそれに対応する土層の広がりが発見された。

この試掘調査の成果に基づいて、岸和田市教育委員会との協議も踏まえ、遺物の出土がなかつた住宅南西端（01～5地点）と昭和38年に建て替えた終了した西部分を除いた府営住宅域と金池の南に隣接する大町公園に遺跡範囲を拡大した。

その上で文化財保護課と住宅整備課が協議を行ない、第1期工事となる3棟の住宅棟、集会所、および電機室・受水槽の範囲について発掘調査を実施することとした。



第3図 調査地点の位置



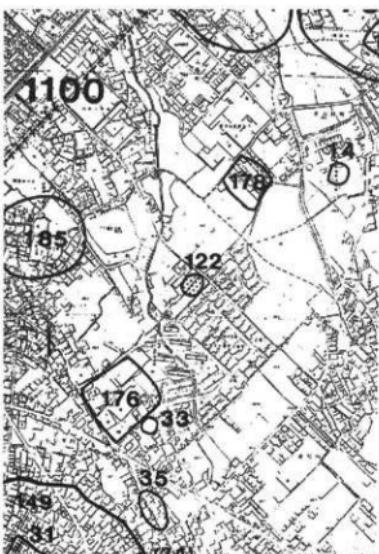
1977年度版



1986年度版



1991年度版



2001年度版

第4図 平成13(2001)年以前の大町遺跡範囲

## 2 調査経過

平成15年度は2棟の住棟部分と集会所部分の発掘調査を行なった。調査面積は、住棟部分がおよそ $1450\text{m}^2$ と $1540\text{m}^2$ 、集会所部分が約 $300\text{m}^2$ であった。ところが、南寄りの住棟部分と集会所部分とが隣接していて、両者を併せて同時に調査を行なう方が効率的であると判断されたので、両建物を取り込むような「く」字状のひとつの調査区に設定し直した。本報告書では北寄りの住棟部分を03-1区、南寄りの住棟部分と集会所部分を合わせて03-2区と呼ぶ。発掘調査は9月上旬より実施して、2月末に終了した。また12月上旬に03-2区の、1月下旬に03-1区の検出遺構の航空測量を実施した。

平成16年度は1棟の住棟部分と電機室・受水槽部分の調査を実施した。調査面積は住棟部分が約 $1270\text{m}^2$ 、電機室・受水槽部分が約 $250\text{m}^2$ であった。本報告書では住棟部分を04-1区、電機室・受水槽部分を04-2区と呼ぶ。発掘調査は6月上旬より実施し、11月中旬に終了した。

また8月下旬に04-2区の、10月上旬に04-1区の航空測量を行なった。



第5図 調査区の位置

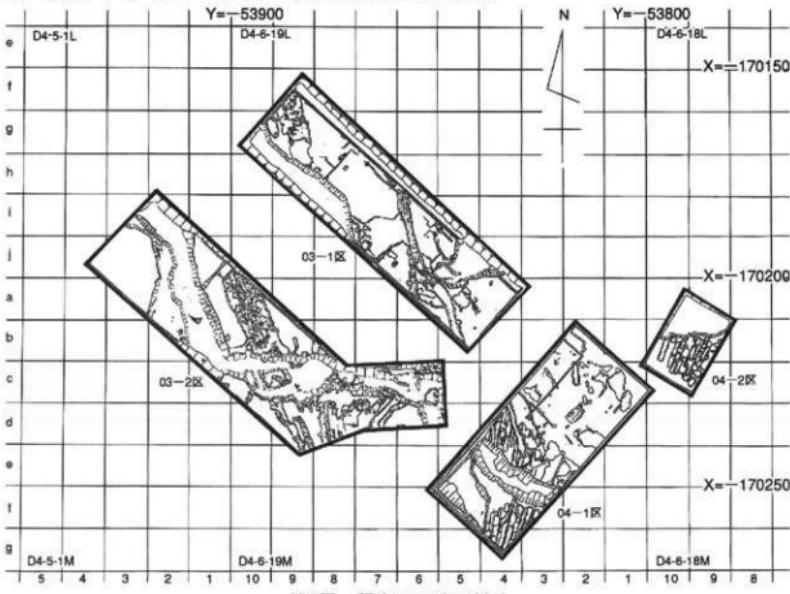
### 3 調査方法

【地区割り】調査区の地割りは、大阪府発行の10,000分の1地形図を基準にして、第Ⅰ～第Ⅳの最少4段階の細分で示している。第Ⅰ区画は、10,000分の1地形図の南西隅を基点にして、南北を15分割(A～O)、東西を9分割(0～8)して、縦(南北)6km、横(東西)8kmに分割した区画である。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北・東西それぞれ4分割した縦(南北)1.5km、横(東西)2.0kmの区画で、南北端区画を1番として順次横方向に施番する。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画の北東隅を基点にして南北を15分割(A～O)、東西を20分割(1～20)した、1辺100mの区画である。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画の北東隅を基点として南北10分割(a～j)、東西10分割(1～10)した1辺10mの区画である。さらに遺物の取り上げにあたっては、第Ⅳ区画を1辺5mの方眼に4分軸し、北東区画をⅠ、北西区画をⅡ、南東区画をⅢ、南西区画をⅣとする第Ⅴ区画を用いる場合もある。

【水準】標高値は東京湾平均海面(T.P.)を用いた。

【座標値】平成15・16年度の調査とともに国際基準に基づく座標値を、方位は座標北を用いた。

【遺構番号】各年度ごとに通し番号を与えた。したがって両年度で番号が重複するが、15年度ではローマ字表記、16年度は漢字表記の遺構種別を付した。また16年度の調査で検出された長方形土坑については、04-1区では「10」を、04-2区では「20」を冠してそれぞれ01番から番号を与えた。したがって、4桁の番号をもつ遺構は長方形土坑である。



第6図 調査区の地区割り

### III 発掘調査の成果

#### 1 基本層序

平成 15 年度および 16 年度の調査区においては、現地表面から遺構検出面に至るまでの層序はともに単純であった。

すなわち、現地表面下に厚さ 60~80 cm の盛土があり、その下に約 20 cm の厚さの旧耕作土が各調査区全体を覆っていた。この旧耕作土を除去すると、遺物を含んだ砂や粘土を基調とした河川堆積土が広がる部分もあるが、基本的には黄褐色~褐色の粘土・粘シルトであり、ほぼ全域にわたって確認された。そして両年度ともに、その上面で遺構の検出作業を行った。

遺構検出面はこの 1 面だけであったが、後述するように、この面は洪積層の上面ではなく河川状堆積層であることが、04-1 区に設けた基盤層の断ち割りトレンチによって判明した。しかもその形成年代は予想外に新しいことも明らかになった。ただし、遺構検出面下の土層中からは、地割れに混入したと思われる僅かな小破片のものを除いて、遺物の出土は基本的にはなかったことから、遺構の検出が可能なのは旧耕作土下の黄褐色系の粘土・粘シルト層上面である。

#### 2 試掘調査の成果

平成 13 年度に 5 カ所、平成 16 年度に 3 カ所のトレンチを府営住宅地内に設定し、遺構の有無や遺物包含層の状況を調査した。

平成 13 年度では、01-1 トレンチと 01-5 トレンチにおいて現地表面下約 1.1~1.3m で地山面が露出したのに対しして、01-2~4 トレンチでは 1.5~2.0m 下でも地山面に達せず、流路の存在などにより旧地形に起伏があったとみられた。

さらに、01-1 トレンチの 1 層からは瓦器や土器、2 層からは土器が、そして 01-3 トレンチの 5・6 層からは弥生土器などが出土して、このトレンチの 1・2・5・6 層は遺物包含層であることが判明した。

01-5 トレンチでは、地山上に近・現代の遺物を含む 1 層が堆積しており、遺物包含層や近代以前の生活面は既に削平されている可能性が考えられた。

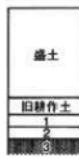
平成 16 年度では、04-1 トレンチで 2.8m、04-2 トレンチで 2.3m 堀り下げて、地山面とみられる粘土層に達する。この 2 カ所のトレンチにおける地山までの深さは、盛上の厚さに起因する。天の川に向って下降する地形を、水平にならしたことによる。

04-2 トレンチの 6 層からは黒色土器、須恵器、土器、石器剥片などが出土し、天の川東岸にまで遺跡が広がっているとみられる。

04-3 トレンチは、盛土の下に粘土層が堆積し、その下は砂・砂質土からなる河川状堆積層で



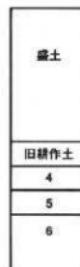
01-1



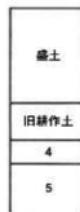
01-2



01-3



01-4



01-5



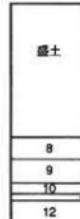
04-1



04-2

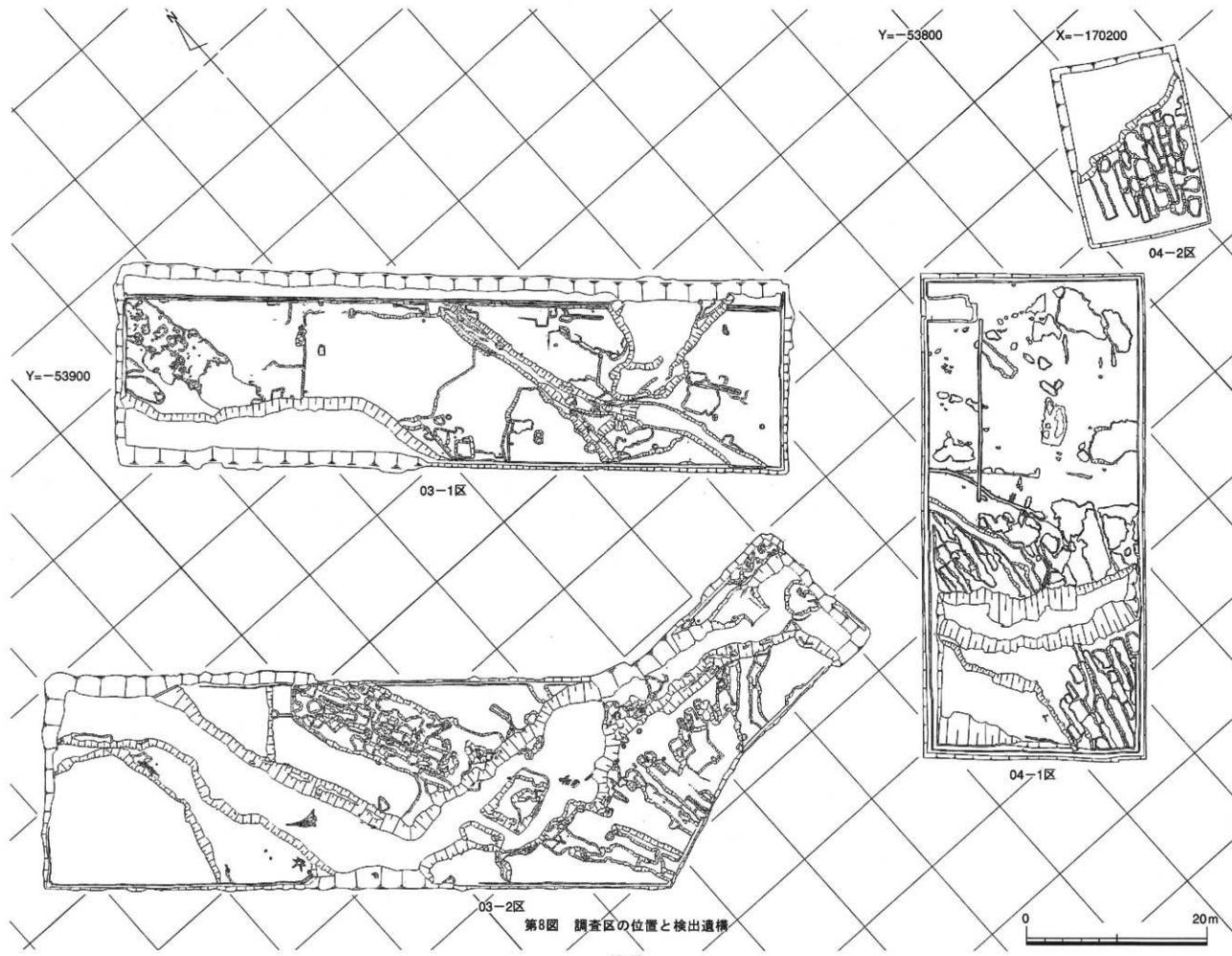


04-3



- 1 混砂褐色粘シルト
- 2 灰黄褐色粘シルト
- 3 明黄褐色粘シルト(地山)
- 4 茶褐色砂質土・砂シルト
- 5 暗褐色砂質土・砂シルト
- 6 黄褐色砂質土・砂シルト
- 7 灰色粘土(地山)
- 8 灰色粘シルト
- 9 緑灰色砂質土(河道堆積土)
- 10 にぶい黄色砂質土(河道堆積土)
- 11 明黃褐色砂質土(河道堆積土)
- 12 灰色粗砂(河道堆積土)

第7図 試掘調査の位置と土層



ある。よって天の川西岸にあっても幾条かの流路が存在しているとみられる。ただし、01-5 トレンチで現地表下 1.3m という、8 カ所のトレンチの中では比較的浅い位置で地山面が検出されたことから、西岸の中位段丘面上を北西方向に流れる河道は、東岸のように幾条も面的に広がっているのではなく、久米田古墳群が所在する高位段丘面からの河道が中位段丘面を横断して天の川に注ぎ込んでいると考えられる。

### 3 平成 15 年度の発掘調査

#### (1) 調査概要

平成 15 年度は住棟部分 2 カ所と集会所部分 1 カ所の調査を実施した。北寄りの住棟部分調査区を 03-1 区、南寄りの住棟と集会所を併せた調査区を 03-2 区とした。

03-1 区では、自然河道 2 条(NR004・005)、不定形土坑 2 基(SX008・009)、溝状遺構 2 条(SD006・007)を検出した。

NR004 および SD006・007 はほぼ南北方向に向きをとっている。NR005 は西方に張り出した形状であるが、北流する河道の西岸の張り出した一部分が検出されていると考えられる。

03-2 区では自然河道 1 条(NR001)と不定形土坑 2 基(SX002・003)を検出した。NR001 は、調査区の形状に沿うように北東から北に向きを変えて「く」字状を呈しているが、他の河道と同じく、大きくは北流したと考えられる。

このように、平成 15 年度は 3 条の自然河道と 4 基の不定形土坑、2 条の溝状遺構を検出した。なお位置的状況からすると、NR004 は NR001 の分流であるようにもみえるが、後述するように両者は時期が異なる可能性が高い。

#### (2) 03-1 区の調査

##### NR004(第 10 図)

03-1 区の南西部に位置する自然河道である。東壁が約 32m にわたって検出されたにすぎないので、全容を捉えることはできない。

その位置からすると、NR001 の分流とみることも可能である。ところが、NR001 からは既述のように多量の遺物が出土し、図示し得たものが多かったのに対し、この NR004 からはコンテナ 5 分の 1 箱分の遺物しか出土せず、しかも図示し得るほどの大きさはいずれもなかった。僅か 36m ほどの距離を隔てて同一河道での遺物状況がこれほど変化するとも考え難い。出土遺物は弥生時代(後期)～古墳時代(前期)の土器とみられるが、点数の少なさや破片化が進んでいることから、混入の可能性が高い。とすれば、この河道は NR001 が形成される以前のものかもしれない。

現状での深さは 1.5m で、北西方向に下降している。底面は割合に平坦である。堆積土は下底に灰色粘土が若干滲む以外、砂である。

##### NR005(第 10 図)

03-1 区の北東部に位置する自然河道である。南西に 12m ほど張り出した状況にあるが、北流

する河道が西に蛇行した部分を検出しているのであろう。深さは現状で1mほどを測り、標高値は21.6~21.8mである。

出土遺物はコンテナ10分の1箱分以下のごく少量であり、しかもいずれも小破片のため図示できなかった。位置的状況からすると、後述する04-1区の河道1とつながる可能性があるが、先のみたNR004とNR001の関係のように、遺物の包含状況が極めて異なっていることから、結び付くとは断言できない。

#### SD006(第9・10図)

03-1区南東半に位置する溝である。幅2~3m、深さは50~90cmを測る。東西に僅かに振れつつ南北に延びていて、約40mにわたって検出した。南端と北端とでは40cmほどの高低差があり、北に緩やかに下降している。

コンテナ約1箱分の遺物が出土した。遺構の大きさからすると、遺物量は多い。いずれも弥生時代(後期)~古墳時代(前期)の土器である。そのうち2点を図示した。1は弥生後期の長頸壺、2は布留式期の鉢である。このように弥生・古墳時代の土器が出土しているが、この溝がその土器に示される時期に形成あるいは埋没したかは不明である。

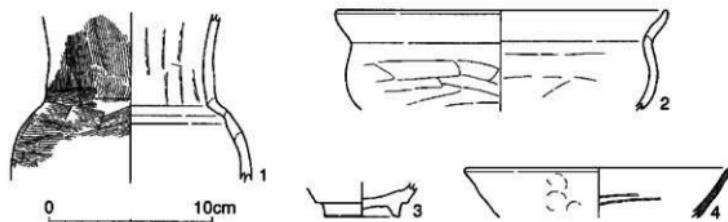
この溝の南端を延長すると、04-1区の080溝にあたる。幅に広狭差はあるが、位置的状況からすると同一の可能性は高い。080溝からはやはり弥生時代~古墳時代前期の土器しか出土しなかつたが、しかし後述するように近世の長方形土坑群の一部を崩して掘削されていることから、近世末~近代前半に形成されたものである。したがって、080溝と同様に、このSD006も近世末以降の溝である可能性が高いといえる。

また堆積土が砂である点も080溝と共通している。

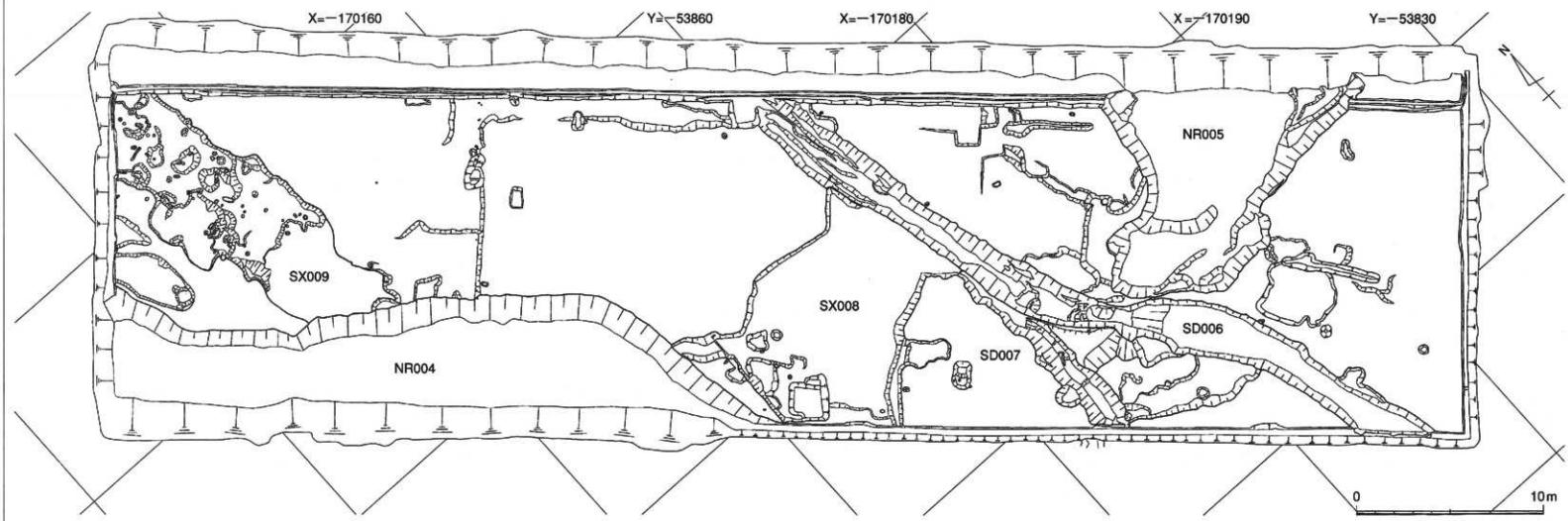
#### SD007(第10図)

03-1区の南東半に位置する南北溝である。南は調査区外に延び、北はSD006やSX008と重複しており、約8mほどの長さを検出したにすぎない。幅は約2m、深さは現状で40cmほどである。堆積土は、粘土や礫を混在する砂である。

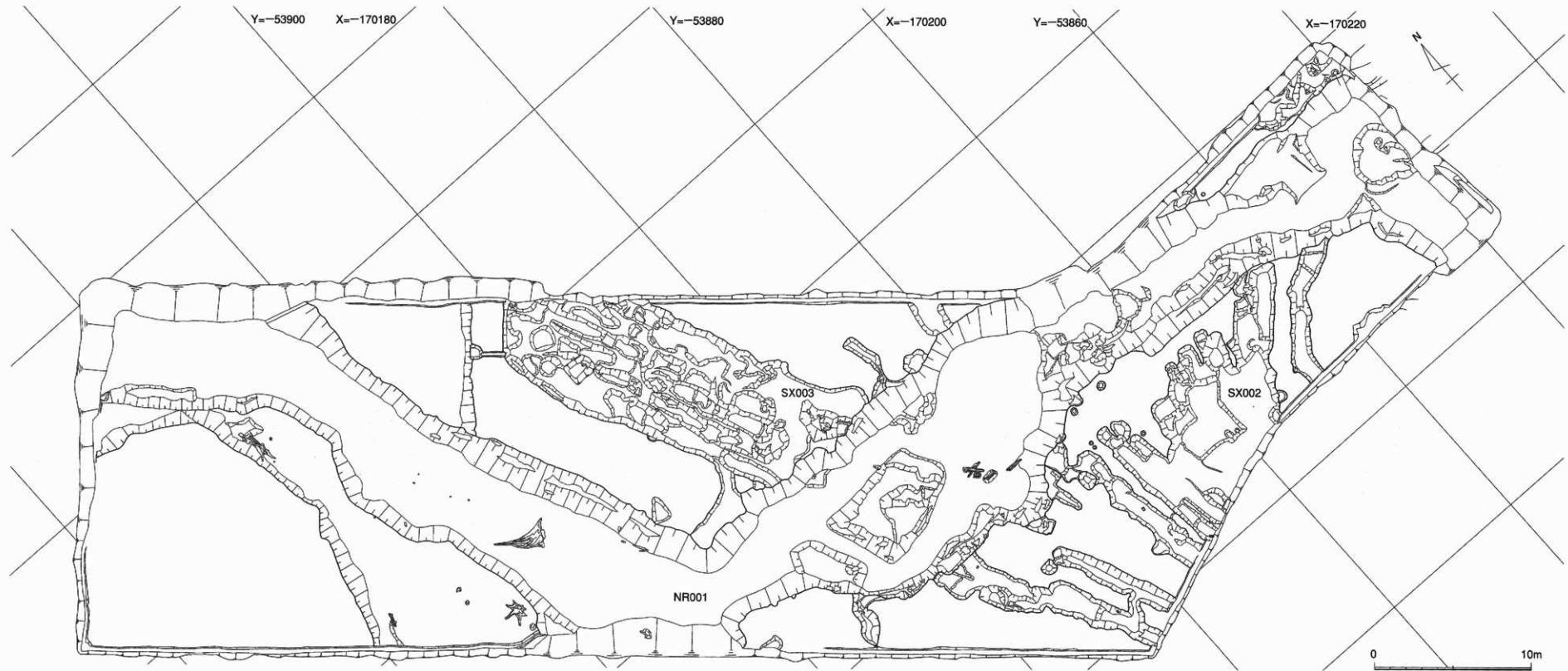
SD006との先後関係は判然としないが、おそらくこのSD007が先行するであろう。山上遺物はなかった。



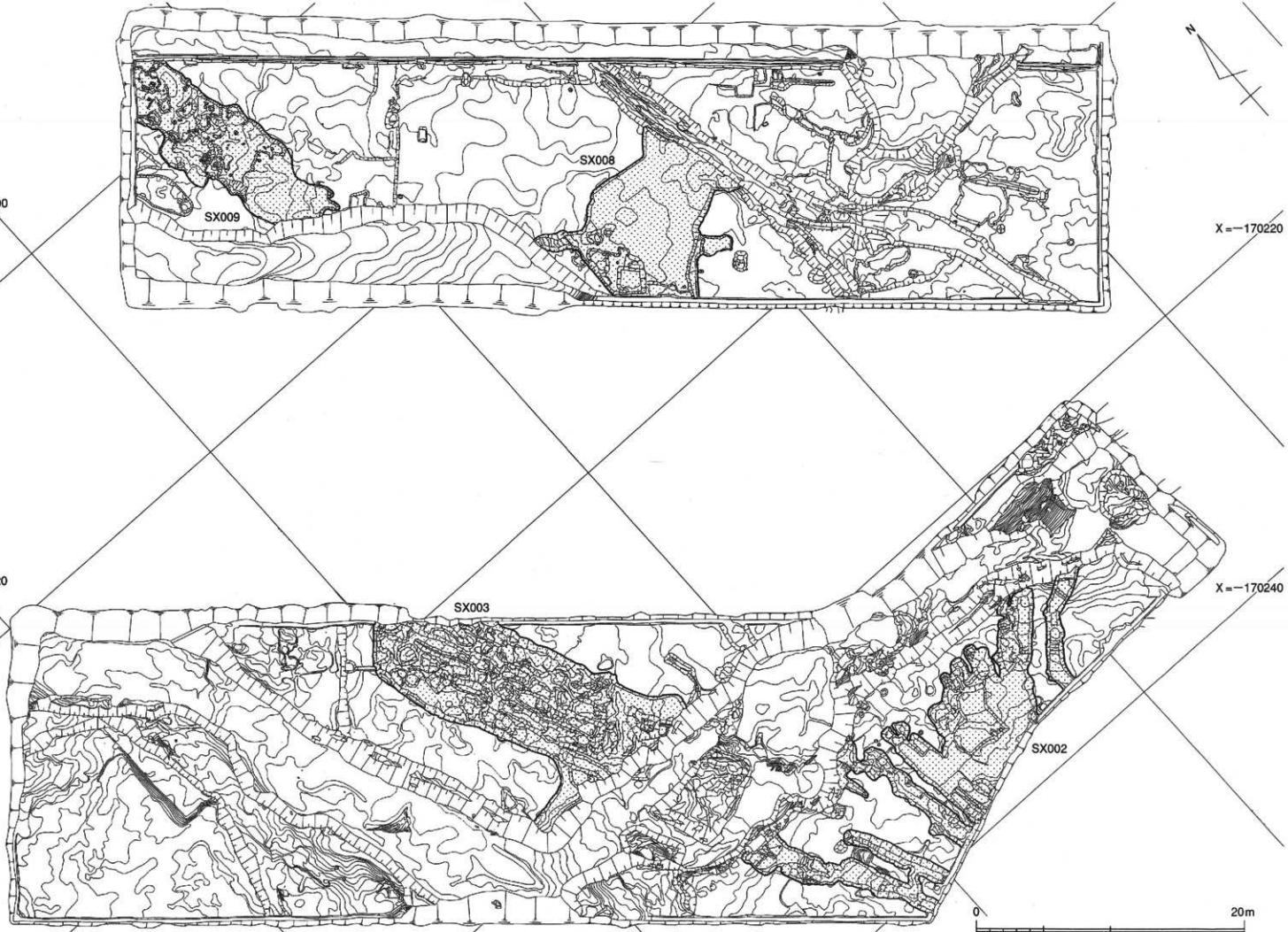
第9図 SD006・SX008出土遺物



第10図 03-01区主要検出遺構



第11図 03-2区の主要検出遺構



第12図 03-1・2区検出の不定形土坑

#### SX008(第9・10・12・14図)

03-1区のはば中央で検出された不定形土坑である。現状の長さ13m、幅7~11m、深さ40cmほどを測る。

東端はSD006と重複しているが、それよりも北へは延びていない。両者の先後関係は不明である。あるいは同時に存在していた可能性もある。西端は、北隅が小穴状に一部張り出しているものの、西辺は直線的に南北に延びている。南・北辺は多少の湾曲があるが、やはり直線的に延びていて、範囲を定めた上で掘削された土坑とみられる。

底面はほぼ平坦である。堆積土は、底面上にシルト・粘土の認められる部分もあるが、大半は砂からなっている。またベルト4をみると、6・8・10・11・12・15・19層と9・13・14・17・18層に大別できるように観察され、複数回の掘削があった可能性も考えられるが、こうした状況は他の不定形土坑では認められない。したがって、一部分の掘り直しであった公算が高い。

出土遺物は、コンテナ1箱分あった。そのうち図示し得たのは、3と4の2点である。4は瓦器の椀で、平安時代末～鎌倉時代初頭に位置付けられよう。3は陶器の碗で、近世代のものとみられる。

#### SX009(第10・12図)

03-1区の北西端で検出した不定形土坑である。長さは現状17m、幅は5~6mほどである。底面には多少の起伏があるが、SX002やSX003のような掘削単位が示されるという状況は認められない。深さは20~30cmほどである。

西辺の一部に張り出しがあるが、両側辺ともほぼ直線的に延びていて、SX008と同様、掘削範囲が定められていたとみられる。

南端はNR004と接しているが、重複していない部分もあり、NR004北東岸と本土坑の掘方端とがほぼ一致していた。

出土遺物はなかった。

#### 遺構外出土物(第34図)

遺構検出面の精査や側溝掘削によって出土した遺物のうち、遺構の帰属が明確でないものを遺構外出土遺物とした。03-1区出土の遺構外出土遺物の中で、図示し得たものは225と226の2点である。ともに楕円形の杯部をもつ高杯である。225は杯部がやや開き気味で、脚裾は大きく広がりそうである。これに対し226の杯部は半円形をなし、深さがある。前者は庄内式期、後者は布留式期とみられる。

#### (3) 03-2区の調査

##### NR001(第11・14・15~32・38・39図)

03-2区で検出した自然河道である。調査区を縦断するように北流しており、約95mにわたって掘られた。

この河道は、調査区南端から約50mの地点で流れを北から北東方向に変え、その変換部分は直

角に近い角度で「く」字状に屈曲している。また調査区南端では南岸がより南に広がっていて、河道が蛇行を繰り返して北流している状況を窺うことができる。

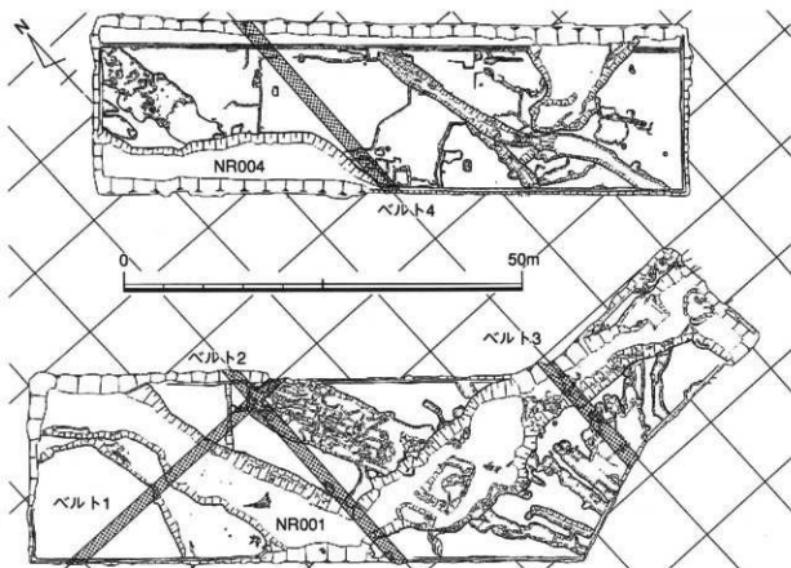
河道の幅は、検出上面で最大16m、狭まった屈曲部分では6mと一定していないが、およそ10m強である。

底面は起伏が激しく、そのため深さも一定していないが、検出面からの深さはおよそ2m、標高値は20.0mほどである。ただし屈曲部分では50cmほど高くなっている。

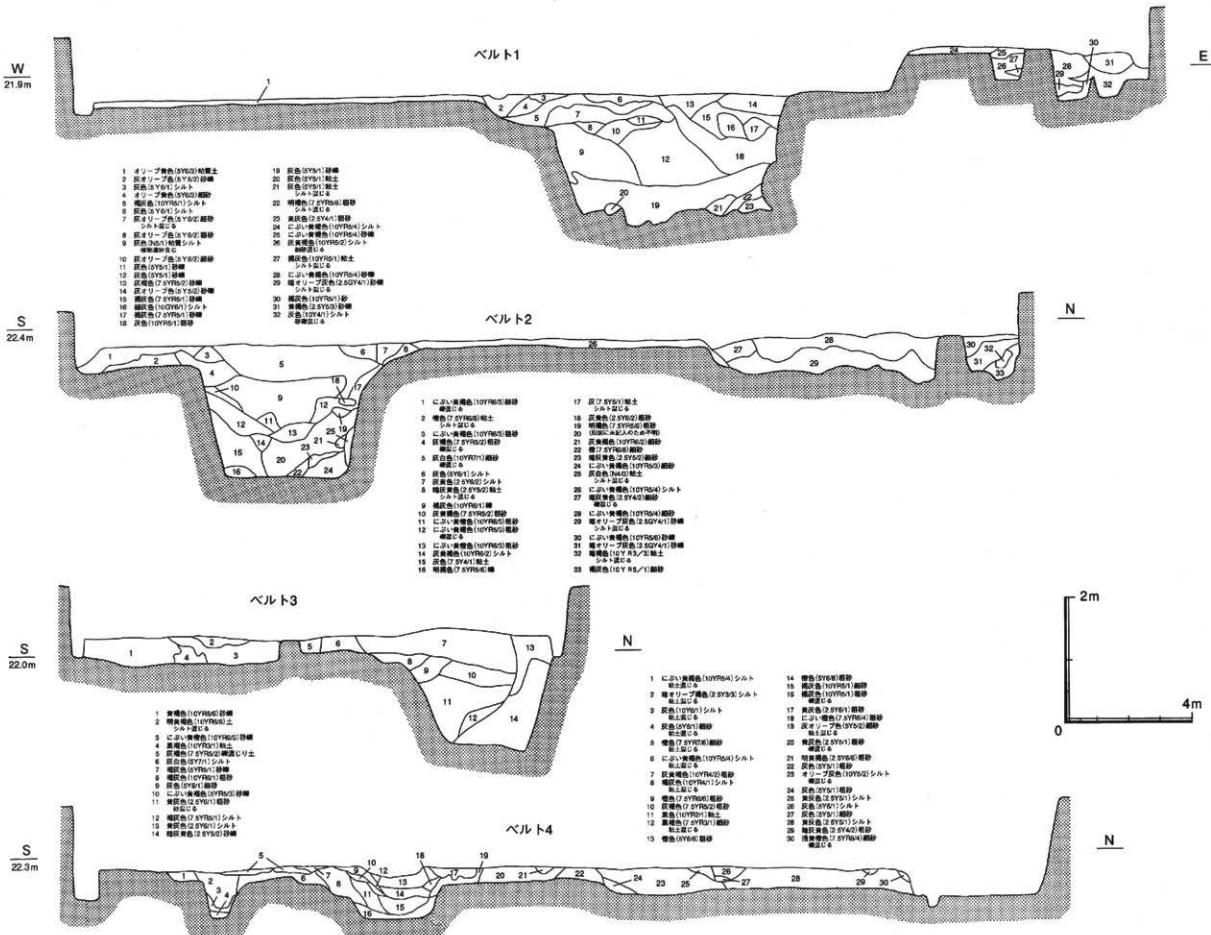
堆積土は砂、砂礫、シルト、粘土からなっている。シルトや粘土は、堆積土の上部に溜まるもの(ベルト1-3・5・6層、ベルト2-6・7・8層)、壁際に溜まるもの(ベルト2-15・17・25層)あるいは堆積層中にブロック状に散在するもの(ベルト1-16・20・21層、ベルト2-14層、ベルト3-12層)の3通りがあるが、堆積土全体からすると少量であり、大半は砂あるいは砂質土である。

粘土・シルトの3通りの堆積のうち、上層で検出されたものは河道内の流水がほぼ停止したことによって形成されたもの、壁際のものは壁面の崩れとみられる。また、ブロック状のものは流水の一時的な停止状態によって発達したか、あるいは流水により運ばれた可能性が高い。

河道内堆積土は2~3回の形成時期に分けることができる。ベルト1でみると、最下層を形成する19~23層、検出面までを一端埋めたとみられる2~12層、そしてそれを削り込んだのちに再堆積した13~18層に分かれ。さらに2~12層については、7~12層の堆積後に上部が削られて2~6



第13図 03-1-2区土層観察ベルトの位置



第14図 03-1・2区の土層

層が徐々に形成されたとみることもできる。

ベルト 2 をみると、下部の 15・16・20~24 層と上部の 1~14・17~19 層に大別が可能である。また上部堆積層にあっても 6~8 層は、一端埋没した河道内が削り込まれたのちに再堆積した層とみることができる。

ベルト 3 をみると、堆積土は南北に分かれているようにみられ、北半の 13・14 層が最初に形成され、5~12 層が一端埋没した河道内を削り込んで再堆積した層とみられる。

このように本河道は、数度にわたる堆積と削り込みを繰り返したのちに完全に埋没したと観察されるのである。

本河道からは多量の遺物が出土した。実測図を示したものは 207 点(縄文土器、砥石を含む)、拓影を掲載したもの 17 点を数え、本報告書で扱った遺構の中では最多の量である。

遺物の中には擂鉢を始めとする中世のものも含まれているが、そうしたものは極めて少なく、後世の混入、あるいは河道上を覆う近世以降の堆積土内に包含されていたものを取り上げたと考えられる。出土遺物のほとんどは弥生時代から古墳時代前期にかけての土器であり、ことに古墳時代初頭のものが大半を占めている。

火測図を示したものは壺、鉢、高杯、器台、甕のほか、手焙形土器、台形土器、台付土器、蓋、製塙土器、ミニチュア土器、蟠轡が認められる。さらに拓影では水差が加わる。

壺は、実測図 59 点、拓影 10 点を示した。弥生前期に遡るものはなく、弥生中期前半とみられるのは 5、6 および拓影の 272~276 である。次いで中期中葉のものは 7~9 および拓影の 280、中期後半のものは 10~16 の 7 点および拓影 6 点を掲載した。実測図を示した壺の中で弥生中期のものが占める割合は 20% である。

弥生中期前半の土器のうち、5 は復元口径 50 cm を測る大型品である。口縁部は大きく外反し、端部は幾分丸味のある方形を呈している。日明山型の壺である。6 は広口壺。口縁下部に櫛描直線文を巡らせている。頸部のすばまりに乏しい。

拓影についてみると、272 は胴部に流水文を描く壺である。273~276 も壺である。櫛描直線文がみられ、275 と 276 には櫛描波状文も施されている。

弥生中期中葉の土器は 3 点を図示した。7 は口縁部が直立し、外面に簾状文を施す。破片が小さいため、口径を復元することはできない。8 も口縁部が直立した受口状口縁壺である。7 に比べて口縁部の内傾が強い。口縁部に櫛描直線文と波状文を、頸部に櫛描直線文を施す。9 は胴部上半から頸部にかけての資料であるが、頸部の傾きからすると口縁部は大きく開くとみられる。四ツ池遺跡 81 地区 SD-006 溝(樋口 1990:223)に類例がある。

弥生中期中葉の土器の拓影は 280 の 1 点でだけである。簾状文を施した壺である。

弥生中期後半の土器については 7 点を図示した。10 は折返口縁部をもつ壺である。口縁部上端が肥厚し、内面の沈線を形成する。口縁部外面には円形浮文と櫛齒刺突文、内面にも櫛齒刺突文を施し、加飾を高めている。11 は口径 37.8 cm を測る大型品である。口縁部端は僅かに直立して

いる。12は口縁部正面および内面に櫛歯刺突文、頸部に簾状文を施し、加飾性が高い。頸部から口縁部にかけて大きく開く。13は口縁部が内湾気味に直立する壺である。外面に凹線文が巡る。池上曾根遺跡55地区7区溝2(樋口1990:273)に類例がある。14~16は広口壺である。14の口縁下部には2孔1対の紐孔が穿たれている。16の口縁部は上下に張り出し、その広がった面に凹線文が巡らされている。

また拓影は277~279・281~283の6点を掲載した。277は口縁部の破片で、正面に簾状文を施している。278と279はともに胸部に簾状文を施していて、水差の可能性もある。2点とも生駒西麓系である。281は受口状口縁部の破片である。外面に棒状浮文が貼付されている。地文をして簾状文が描かれているように観察されるが、摩滅のため明確ではない。283は斜格子文を施した胸部破片。攝津系である。

弥生後期の壺として、17~23の7点を図示した。いずれも口縁部を外反させた広口壺である。21と22を除いて、口縁部端の上下の張り出しは明瞭である。また17・18・19では、口縁部に円形浮文を貼付している。

弥生後期の土器で、拓影を示したのは286の1点だけである。肩部破片である。外面に櫛歯刺突のよる矢羽状文を描いている。色調は内外面とも赤褐色で、他の壺と異なっている。東海西部、浜名湖周辺に出自をもつと考えられる。

弥生後期か庄内式期かを判別できないものに、24と25がある。したがって残りの38点、壺のうちの約64%は庄内式期~布留式期、すなわち古墳時代前期のものである。

24は貼付口縁部をもつ壺である。口縁部外面には2段に円形浮文を貼付し、内面には櫛描波状文を描いている。口縁部の外反度は高い。25も壺である。口縁部は頸部から水平に張り出す。口縁部端が直立して面を形成し、その外面に円形浮文を2段に貼付している。

26~36、39~41および53・55は庄内式期に位置付けることができるものである。26は口縁部を大きく外反させ、正面に櫛描波状文を描いた上に、円形浮文を貼付している。27は口径37.6cmを測る大型品である。口縁部は緩やかに外反し、端部下辺が肥厚している。口縁部に竹管押圧を加えた円形浮文を貼付している。28は短い頸部から口縁部が大きく開いている。口縁部外面に小さめの円形浮文を貼付している。29の頸部は長めである。これも口縁部の開きが大きく、その外面には小形の円形浮文を貼付している。31は貼付口縁部をもつ壺である。肥厚した口縁部外面に櫛描波状文を描く。31は外傾する頸部から大きく開く口縁部をもつ壺である。施文は認められないが、内面のミガキ調整は丁寧である。32も有段口縁壺である。口縁部の中程に大きめの円形浮文を貼付している。33も有段口縁壺である。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面には丁寧なミガキ調整が認められる。34は胸部外面をタタキ調整された壺であり、口縁部は内湾気味に直立し、その端部は尖り気味である。胸部にタタキ調整の痕跡を残すものには後述する41もある。35も受口状口縁壺である。口縁部はやや外反しつつ直立する。その端部は幾分丸味がある。口縁部内外面のミガキ調整は丁寧に施されている。36もやや緩やかな受口状口縁部をもつ壺である。

摩滅のために内外面の調整は不明瞭である。

39は単口縁の壺である。口縁部および胴部の外面にはヘラナデ調整、胴部内面にはイタナデ調整がなされている。40は完形品である。図版5にみられるように倒立状態で出土した。また次に挙げる41も、口縁部を欠失しているとはいって50%以上の遺存率があり、これらに限らず遺存率の高いものが割合が多い。41は胴部のみの資料であるが、胴部は完形に近い。外面はタタキ調整のうちに全体にミガキ調整、内面はイタナデ調整が施されている。

53も完形品である。算盤玉形に張り出した胴部と尖り気味の底部をもつ直口縁壺である。口縁部は直線的に外傾する。摩滅のため胴部外面の調整は不明。55は小型壺である。口縁部が直立する。胴部は内外面ともヘラナデ調整がなされている。胴部の球形度は高いとみられる。

庄内式期～布留式期にかけてのものと考えられるのは、37・38・44～47・56・58・60・62の10点である。また拓影は285の1点を掲載した。

37是有段口縁壺とみられるが、屈曲は緩い。口縁部外面にミガキ調整がなされている。38は短く外反する口縁部と、張りの弱い胴部をもつ。胴部外面には継ミガキ調整が施されている。44は口縁部が大きく開いた直口縁壺。口縁部の開きは直線的である。口縁部および胴部にミガキ調整がなされている。45も直口縁壺である。口縁部内外面のミガキ調整は丁寧になされている。46および47も直口縁壺である。ともに44や45より口縁部は短いので、40のような形状を呈するとみられる。47の口縁部外面のミガキ調整は継方向になされている。

56と58は小型壺である。56は口縁部が開き、胴部の球形度は高い。58は胴部の球形度は高いが、口縁部が直立気味である。底部は平坦である。60は頸部から肩部にかけて横彫刺突文と横描波状文を施している。頸部は直立している。東海西部に系統が求められる。62は底部資料のため時期比定は難しいが、形状および内面調整からこの時期に比定した。

拓影で示した285は、大きく外反した口縁部破片である。端部が肥厚し、その正面に竹管文が施されている。

布留式期のものと考えられるのは、42・43・48～52・54・57・59・63の11点である。42は貼付口縁壺である。口縁部外面への施文はなく、ヘラナデ調整がなされている。43も貼付口縁壺であるが、42ほど貼付が明瞭ではなく、口縁部下辺の張り出しが弱い。内外面にミガキ調整が施されている。

48は直口縁壺である。口縁部は短く、やや開き気味に外反する。49も直口縁壺である。口縁部はやや外反するが、立上がりは直線的である。口縁部および胴部外面のミガキ調整は丁寧になされている。50も直口縁壺をもつが、開き気味に外反する。摩滅のため口縁部および胴部とも内外面調整は不明である。51は小型の直口縁壺と考えられる。ただし通例と異なり、器壁は厚く、いびつな形状に仕上がっている。口縁部内外面はユビナデ調整、胴部外面は摩滅のため調整不明。52も小型直口縁壺とみられる。胴部外面はヘラナデ・ヘラケズリ調整、内面はヘラケズリ調整がなされている。54は小型壺である。口縁部は内湾気味に直立する。胴部内外面ともミガキ調整が

なされている。57 も小型壺である。口縁部は大きく外反する。胴部の球形度は高い。胴部外面はヘラナデ調整、内面はユビナデ調整がなされている。59 も小型壺である。口縁部は短く外反する。胴部の球形度は高い。胴部内外面ともヘラナデ調整がなされている。底部は僅かに突出する。63 は底部資料である。平坦な底部から胴部下半にかけて直線的に開いて立ち上がる。大型品とみられる。胴部外面はヘラケズリ調整、内面はイタナデ調整がなされている。

鉢は、実測図 16 点を示した。弥生中期後半のものは 4 点、弥生後期のもの 5 点、古墳前期のもの 5 点、そして弥生時代から古墳時代のもので時期区分しがたいもの 2 点であり、弥生後期と古墳前期のものがそれぞれ 30% 強を占めている。

64～66・68 は弥生中期後半のものである。64 は口縁部にかけて内傾して直線的に立上がり、口縁部は肥厚する。胴部に簾状文を施す。65 は台付鉢の脚部である。現状からすると、脚部の開きは強いとみられる。66 は口径 28.0 cm を測る、大きめの鉢である。口縁部にかけて僅かに内傾し、口縁部は肥厚する。胴部に簾状文を施す。68 は大きく直線的に開く口縁部をもつ鉢である。口縁部に 1 条の凹線文を施す。口縁部端は平坦。

67・69～72 は弥生後期のものである。67 は低脚の台付鉢である。鉢部の内外面にはミガキ調整がなされている。69 は半球状の胴部と平坦な底部をもつ小型鉢である。胴部外面はヘラケズリ調整である。70 の底部は輪状台手法による。胴部外面にタタキ調整がみられる。71 の脚部は「ハ」字状に大きく開き、底面は上底となる。胴・脚部間にユビオサエ調整を施す。72 は胴部が「ハ」字状に直線的に立ち上がっていく。

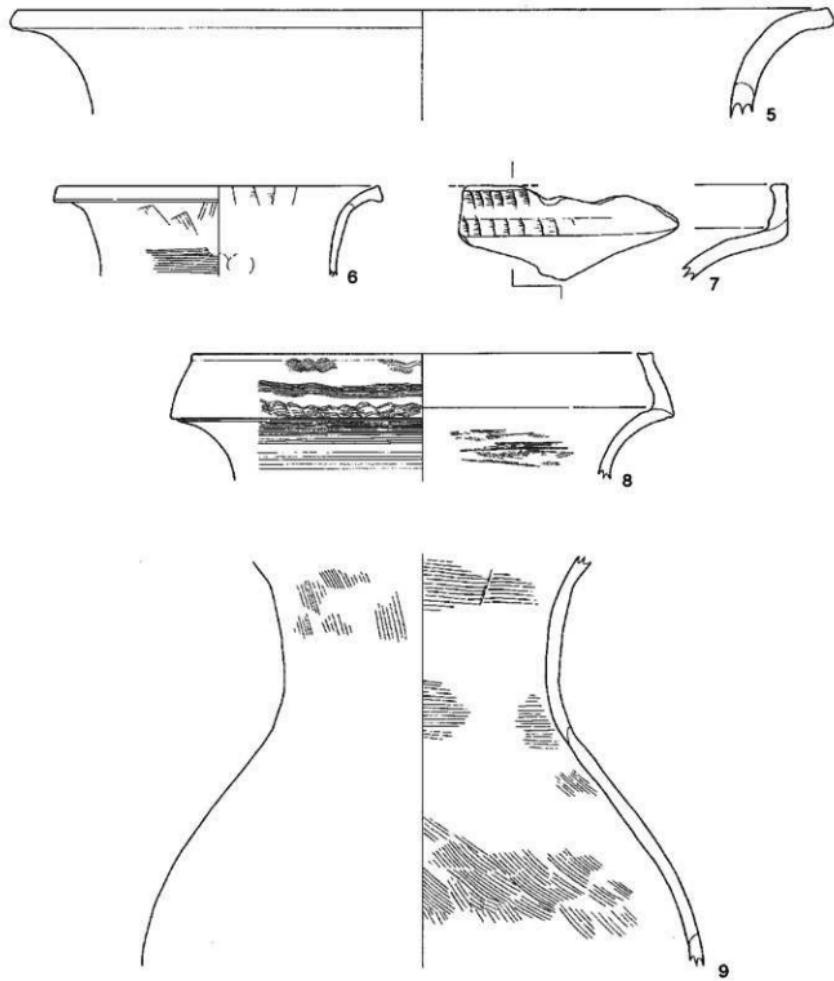
庄内式期～布留式期のものは、73 と 75 の 2 点である。73 は丸底鉢。口縁部の屈曲が明確で、稜が生じている。口縁部は僅かに内湾し、端部は尖り気味である。75 は口径 23.0 cm を測る、中型鉢である。口縁部の屈曲は明確である。底部は僅かに突出する。口唇端は平坦である。内外面にミガキ調整がなされている。

布留式期のものは、74・76・77 の 3 点である。74 は丸底鉢とみられるが、73 に比べると口縁部の屈曲が不明確である。胴部内面はミガキ調整がなされているが、外面にはユビナデ調整がなされているように観察される。76 は焼成前に底部穿孔がなされた丸底鉢である。胴部は球形度が高く、内外面はミガキ調整がなされている。この土器は、墓制あるいは祭祀に関わるものと考えられる。77 は小型鉢である。やはり胴部の球形度は高い。口縁部・胴部の内外面いずれにも丁寧なミガキ調整がなされている。底部は僅かに平面をもつ。

弥生時代か古墳時代のものか判別の難しいものは、78 と 79 の 2 点である。78 は有孔鉢の底部の小破片である。79 も有孔鉢の底部である。胴部外面にはタタキ調整がなされている。

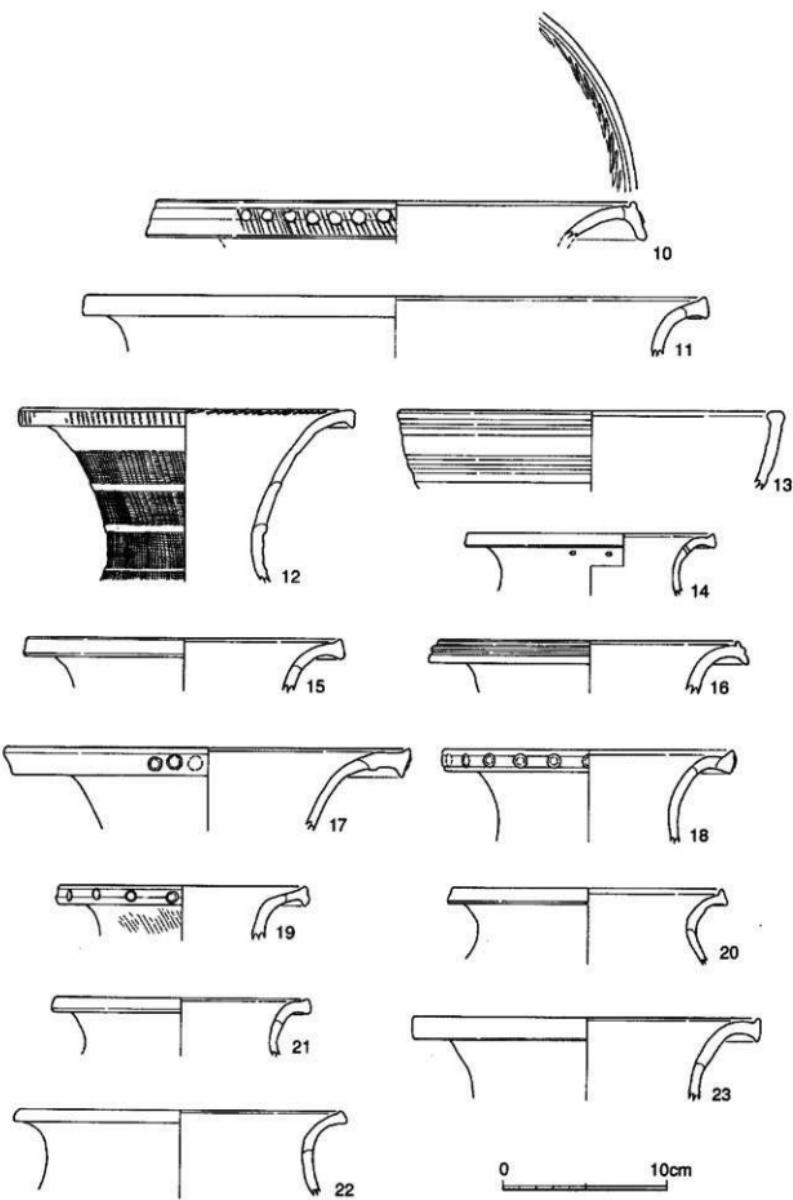
高杯は実測図 19 点を掲載した。弥生中期後半のものが 2 点、弥生後期が 3 点、古墳前期が 14 点であり、70% 強が古墳前期のものである。

弥生中期後半のものは、80 と 82 の 2 点である。80 は受口状の杯部をもつ。口縁部は直立し、外面に凹線文を施す。82 は脚部資料であるが、台付土器の脚部の可能性もある。断部の 4 方向に

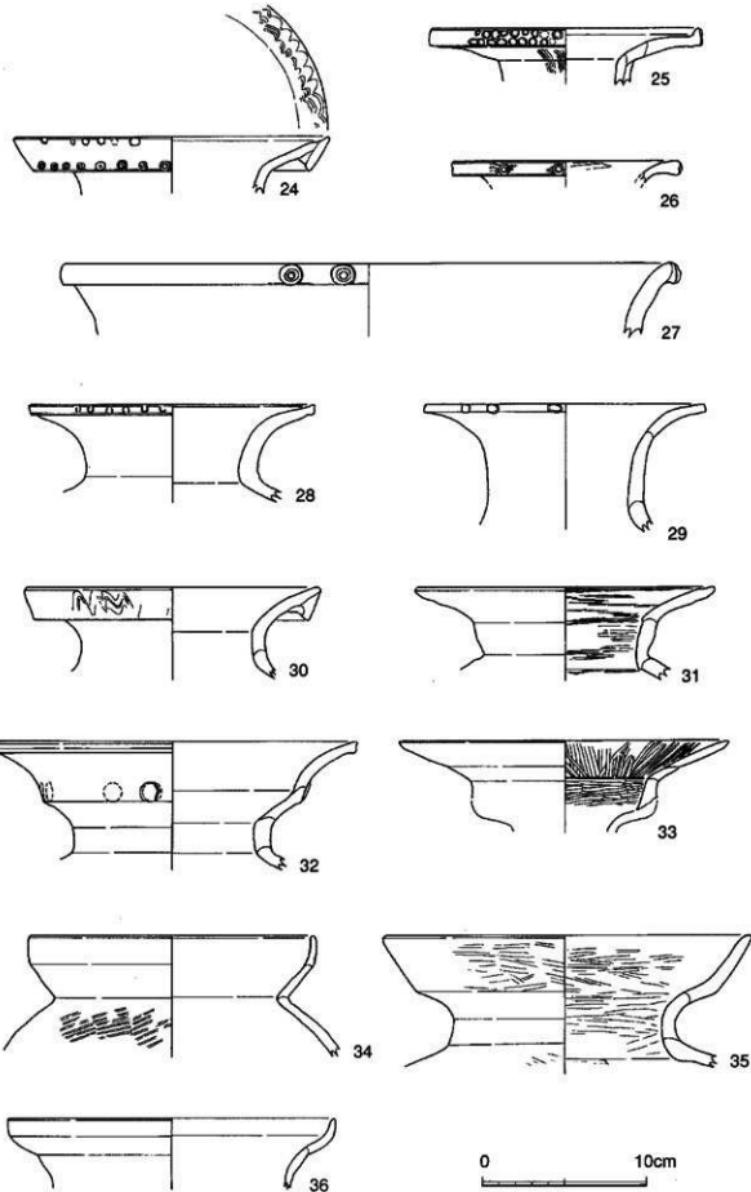


0 10cm

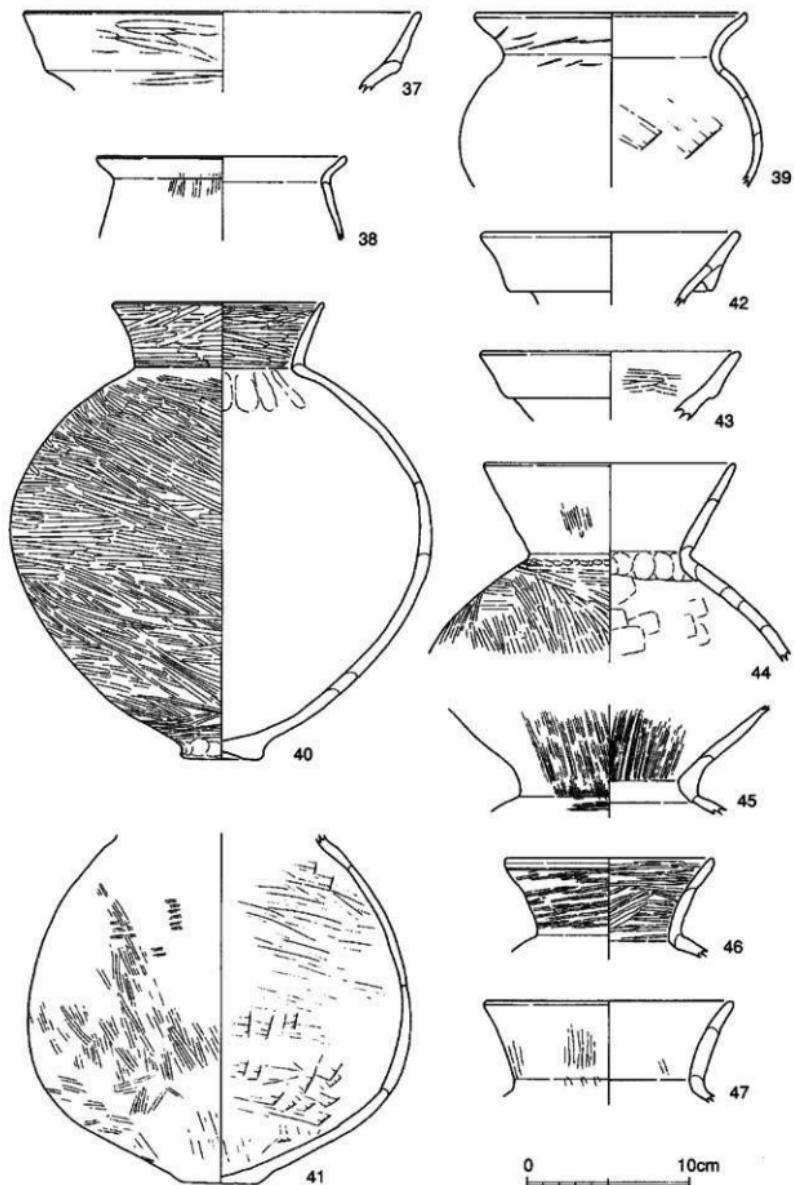
第15図 NR001出土遺物(1)



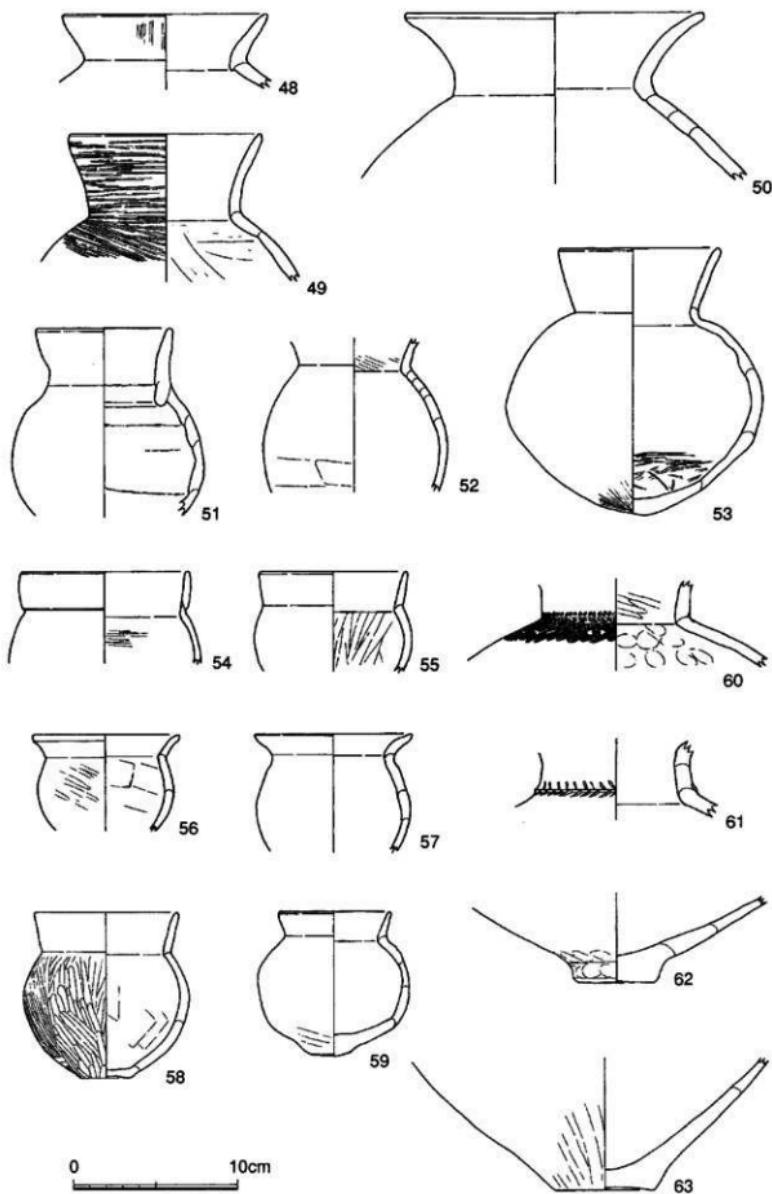
第16図 NR001出土遺物(2)



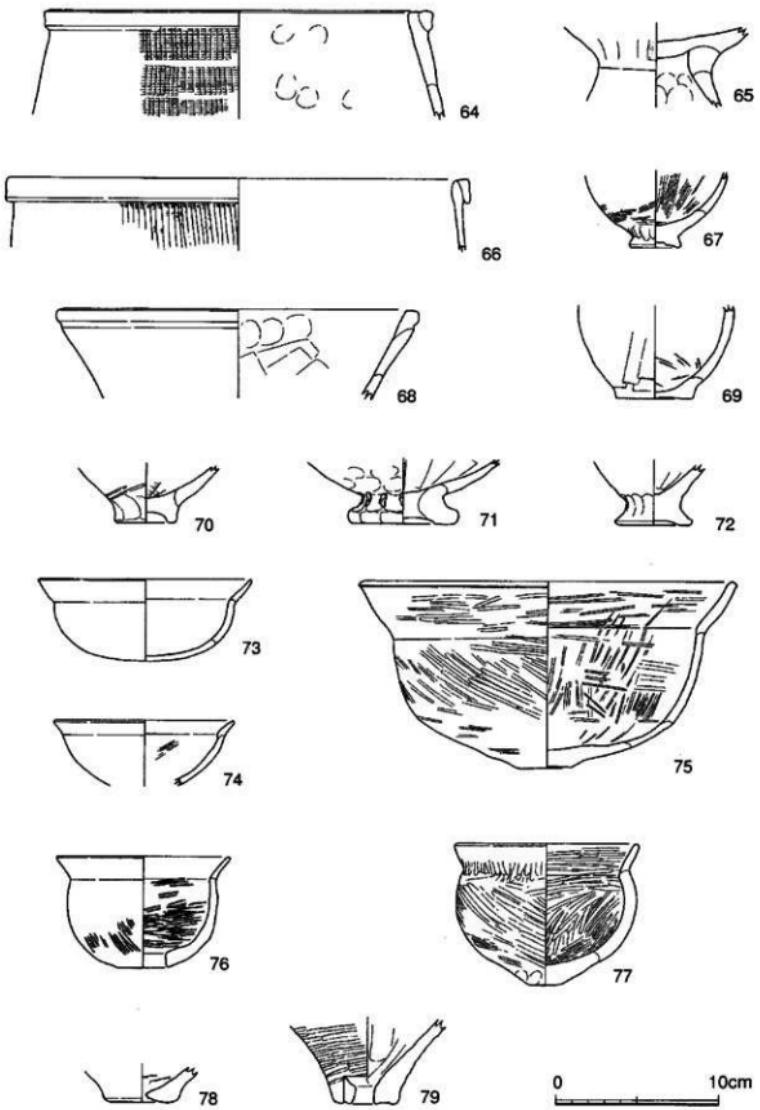
第17図 NR001出土遺物(3)



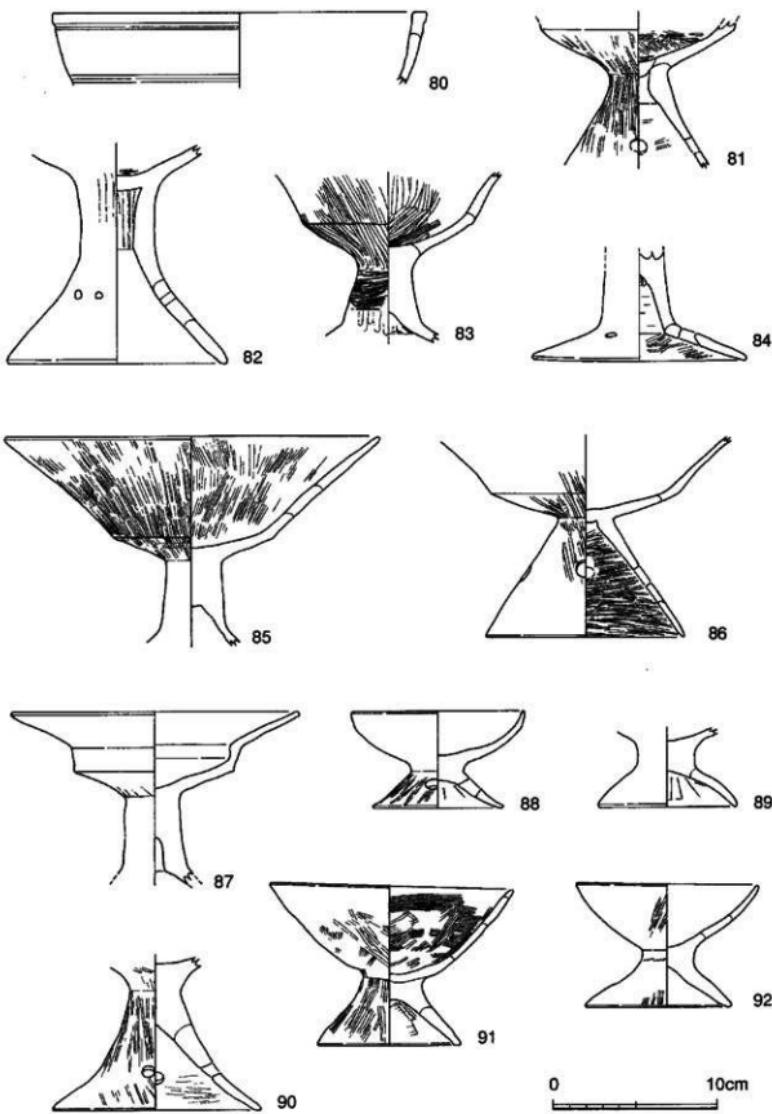
第18図 NR001出土遺物(4)



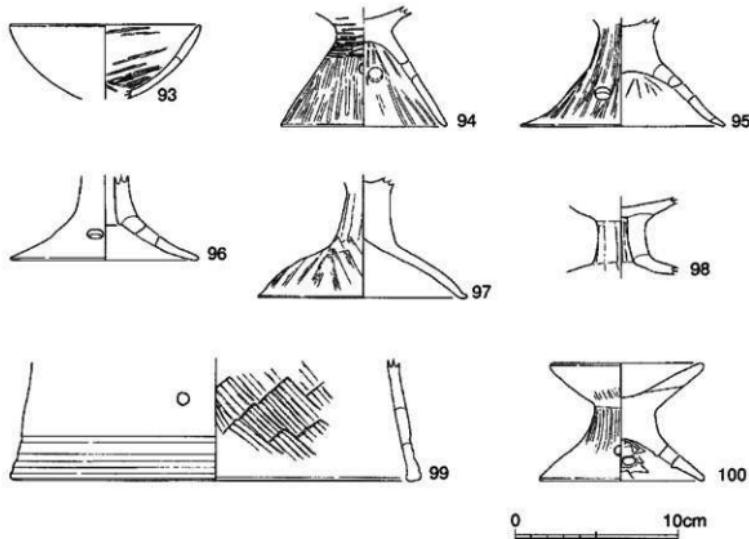
第19図 NR001出土遺物(5)



第20図 NR001出土遺物(6)



第21図 NR001出土遺物(7)



第22図 NR001出土遺物(8)

2孔1対の透孔が設けられている。脚部外面にはミガキ調整が施されている。

弥生後期のものは、81・83・84の3点である。81は杯部の欠損部分近くに稜が立っていることから、有稜高杯とみられる。杯部内外面および脚部外面には丁寧なミガキ調整がなされている。83も有稜高杯である。杯部下半は開きが乏しい。杯部内外面・脚部外面に丁寧なミガキ調整がなされている。84は脚部資料であるため、時期比定に不確実さが残る。脚部は直立する柱状で、裾の開きは大きい。

庄内式期のものとしては85～89がある。85は杯部下位が僅かに屈曲する有稜高杯である。稜線から上は直線的に外傾している。杯部内外面には丁寧なミガキ調整が施されている。脚部は柱状である。86も有稜高杯である。85に比べると杯部の屈曲位置は高い。また僅かに外反する。脚部は「ハ」字状に大きく開く。摩滅のため杯部・脚部の外面調整は不明瞭であるが、内面はともにミガキ調整を認めることができる。87は有段高杯である。杯部の屈曲は強く、脚部は柱状である。杯部内外面・脚部外面にはミガキ調整がなされているが、摩滅のため極めて不明瞭である。88は低脚高杯である。脚部は「ハ」字状に大きく開いている。また杯部も浅い。89は楕形高杯の脚部とみられる。裾部にかけて内湾する。

90は脚部資料のため、庄内式期か布留式期かの時期区分が難しい。脚裾は僅かに外反して「ハ」字状に開く。脚部外面はミガキ調整がなされているが、摩滅のため不鮮明になっている。

布留式期のものとしては、91～98がある。91は深さはあるがやや直線的に開く杯部をもつ。脚部は低くなっている。92は91より小型であるが、直線的に開く杯部と低い脚部が共通している。

脚部はやや広めに開く。93 は楕形杯部である。摩滅のため外面調整は不明。94 は直線的に「ハ」字状に開く脚部資料である。95 も脚部は直線的に「ハ」字状に開くが、端部は僅かに外反する。96 は裾部の開きが大きい柱状脚部資料とみられる。97 は裾部が内湾する柱状脚部である。摩滅のため外面調整は不鮮明であるが、ヘラナデ調整がなされているとみられる。98 は低脚高杯とみられる。内外面ともヘラナデ調整がなされている。

器台は火測図 2 点および拓影 1 点を掲載した。99 は、脚部に凹線文を巡らせた弥生中期後半のもので、後述の 282 も同時期である。100 は庄内式期～布留式期の小型器台である。杯部径と脚部断径とがほぼ等しく、やや新しい傾向を示している。

拓影で示した 282 は器台の脚部である。粘土凸帯を巡らせている。

壺は 87 点の実測図を掲載した。弥生中期後半のものが 10 点、V 様式系が 60 点、庄内式系が 11 点、布留式系が 3 点であり、70% 近くを V 様式系が占めている。

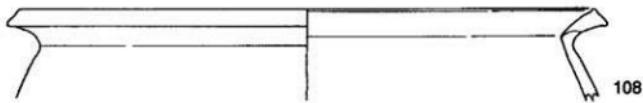
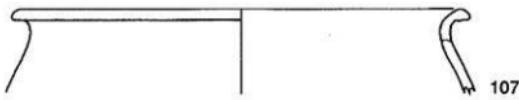
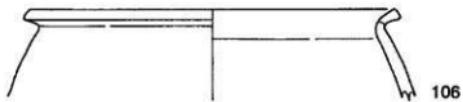
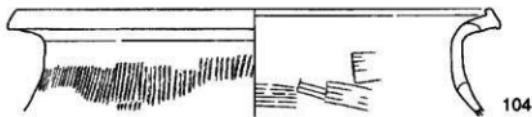
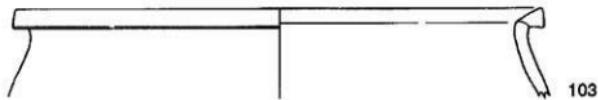
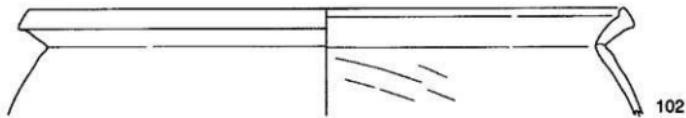
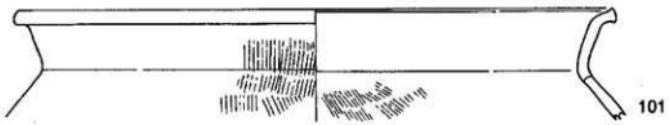
胴部外面にタタキ調整を施した壺は、主として弥生後期から庄内式期に属する。そのなかでも、本遺跡から出土したタタキ調整のある壺は、破片のため全体の形状が捉えられないが、胴部が球形化する、口縁部端が丸く收まる、底部の突出が弱まる、といった形態的特徴が断片的ながら認められる。したがって、大半のものは V 様式系と呼ばれる、庄内式期の壺と考えられる。この庄内式期の V 様式系壺が実測図掲示の壺に占める割合(69%)は、壺における 64%、高杯における 68% が庄内式期～布留式期のものであるという傾向にはほぼ等しい。

101～110 は弥生中期後半のものである。101 は口縁部がやや長めで、外反度も比較的緩く、中期中葉に近いと考えられる。102・103 は、「く」字状に外反した口縁部は短く、前者は口縁部端が直立、後者は口縁部が僅かに肥厚する。ともに胴部外面はヘラナデ調整によっている。104 は口縁部にかけての屈曲が緩やかである。口縁部端は上下に張り出す。胴部外面に簾状文が施されているが、摩滅のため不鮮明である。105～109 も口縁部は短く外反し、105・109 の口縁部端は直立している。110 はやや小型である。口縁部の屈曲は緩やかで、口縁部上端がやや張り出す。胴部内外面にヘラナデ調整がなされている。

V 様式系としたものは 111～170 までの 60 点である。大半は既述したような特徴をもつが、ただし、口縁部が内湾したのち外反する 113、口縁部の開きが弱い 122 や 136、底部の突出が顕著で胴部の張りが弱そうな 160 などは、弥生後期の範疇で捉えるのがよいかもしれない。

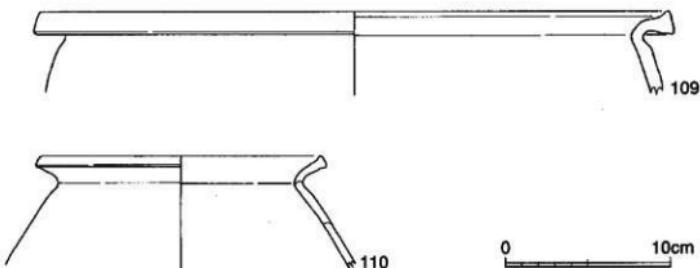
また 149・151・153・155・159 はタタキ調整が右下がりであり、大和系である。V 様式系壺として図示したものの中では約 8% を占めていて、割合に高い比率で大和系壺が含まれているといえる。なおこの大和系壺の場合、内面調整は逆時計回りになされる傾向にある。

171～181 は庄内式系壺である。171～179 では、強弱差はあるが、口縁部端が立上がりっている。181 は口縁部を消失した、胴部以下の資料である。胴部外面にタタキ調整の後ハケ調整が施され、底部は丸底である。頸部のすぼまりはやや弱そうである。180 は胴部下半の資料である。胴部外面はタタキ調整ののちヘラナデ調整がなされている。底部はほぼ平坦である。



0 10cm

第23図 NR001出土遺物(9)



第24図 NR001出土遺物(10)

182は口縁部が短く外反し、端部が直立する。頸部は比較的広く、頸部近くの胴上部にハケ調整が施されている。吉備との関係が考えられる。弥生後期あるいは庄内式期のものである。

183・184は布留式系壺である。184ではやや不明瞭ながら、ともに口縁部端が肥厚する。また2点とも胴部外面は細かなハケ調整、内面はヘラケズリ調整がなされている。

185は球形の胴部と短い直立気味の口縁部をもち、形状からすると壺に近いが、外面ハケ調整であること、胴部外面に煤が付着していることから壺と捉えた。布留式期のものである。

186はV様式系の壺と考えられる。胴部上半に最大径をもち、底部にかけて内湾気味にすぼまる。胴部外面にタタキ調整がなされ、胴中央に穿孔が施されている。この土器も祭祀などに用いられたものと考えられる。

187は時期比定の難しい小型壺である。胴部の張りは乏しく、底部は平坦である。胴部外面はユビオサエあるいはヘラケズリにより調整されている。内部に炭化した種子が遺存している。

188は手焙形土器の覆部の破片資料である。正面にはやや雰雰な鋸歯文、縁部外面には正面と似た鋸歯文を端部に描き、さらに全体に斜格子文を施している。

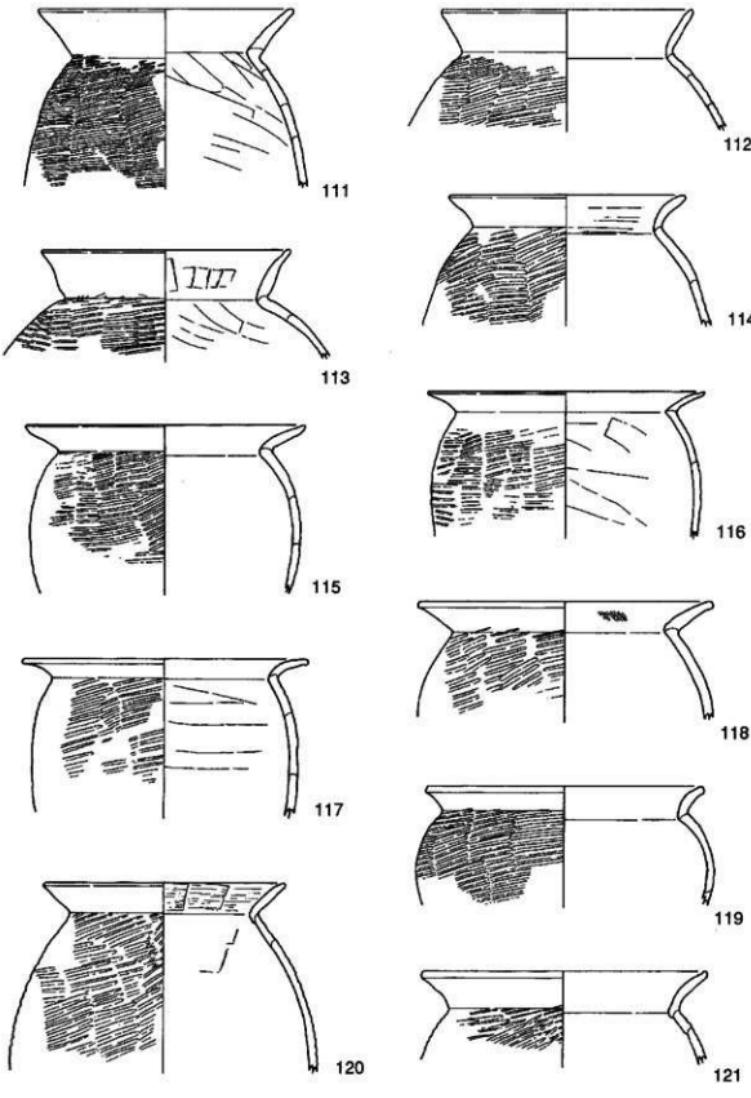
189は台形土器である。弥生中期後半に位置付けることができよう。和泉地域には類例の少ない器種である。

190～192は台付土器の脚部である。いずれも弥生中期後半のものである。190・192は「ハ」字状に開く脚部で、前者は脚端近くに、後者は脚端にそれぞれ回線文を巡らせている。191は裾部の開きが小さく、やや低めである。端部は丸味がある。

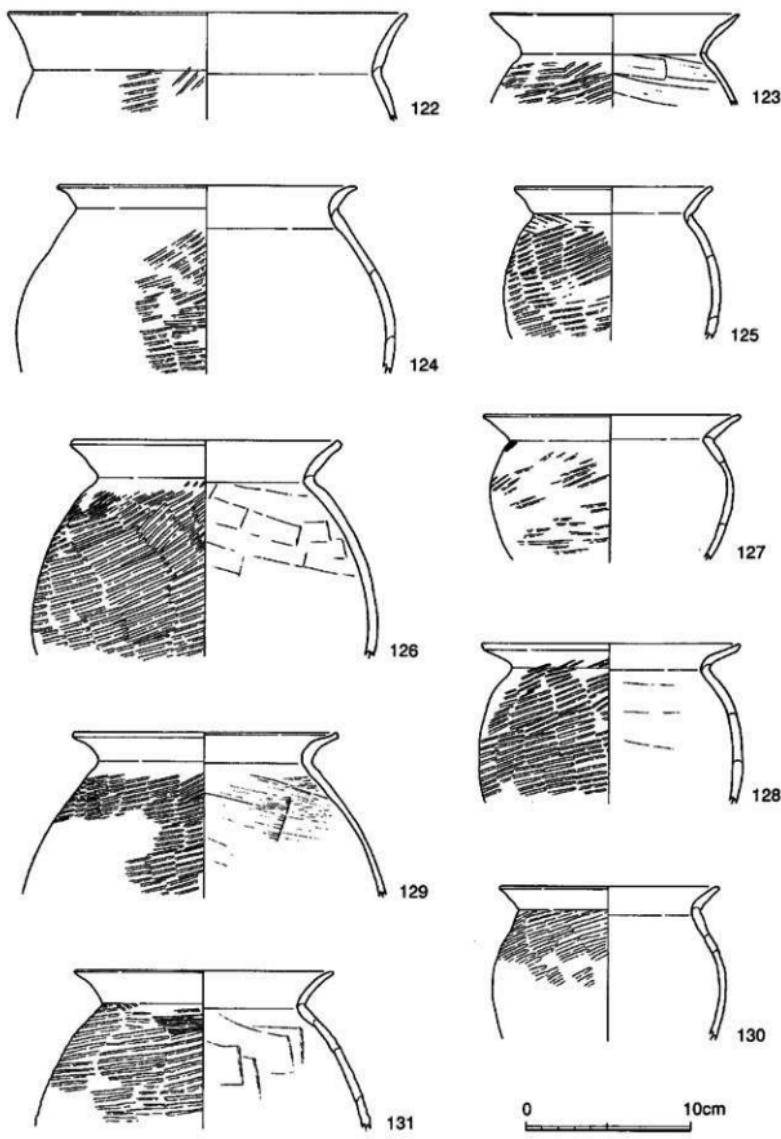
193・194は蓋である。前者の裾部径は9.4cm、後者は10.2cmで、小型壺に対応しよう。ともに弥生時代のものと考えられるが、詳細な時期については不明である。

195・196は製塩土器の脚部と考えられるが、前者は鉢の脚部の可能性もある。ともに弥生時代のものと考えられるが、詳細な時期については不明。

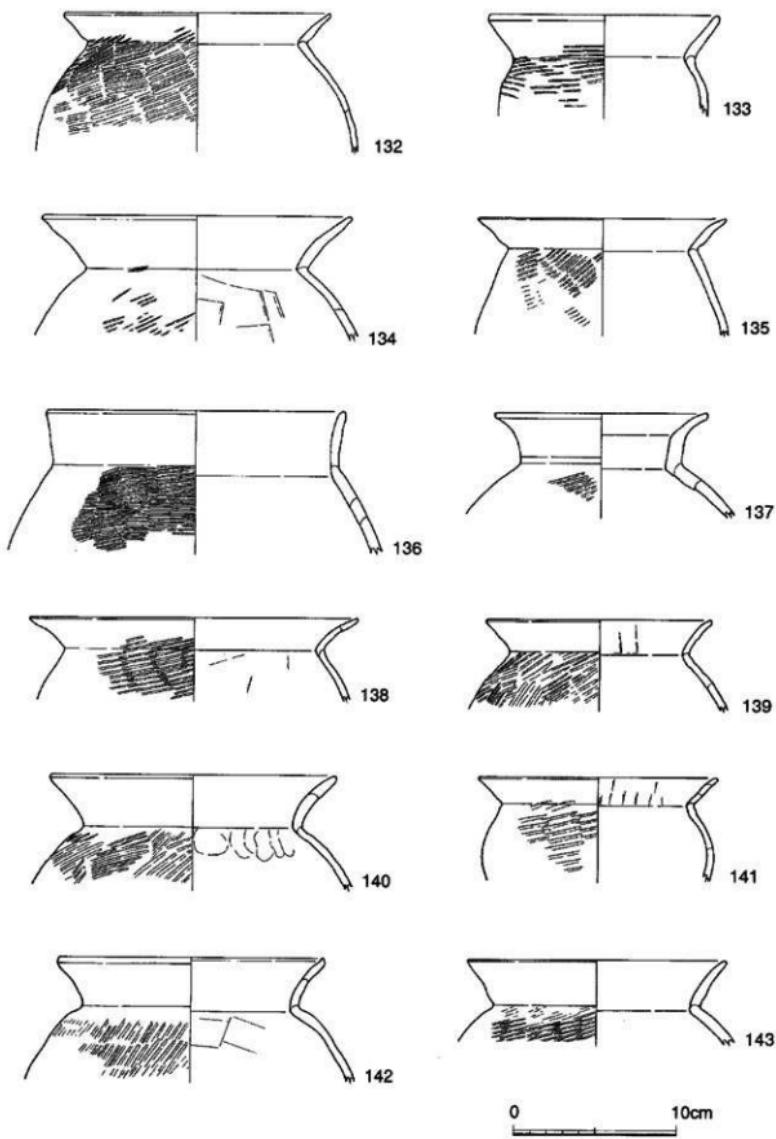
197～201はミニチュア土器である。いずれも鉢の模倣品である可能性が高い。これらについても、弥生時代のものとは考えられるが、詳細な時期は不明である。ただし、こうしたミニチュア土器の存在は、付近に墓域があったことを示唆する。



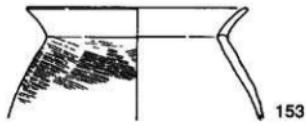
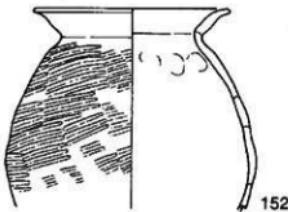
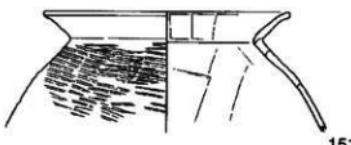
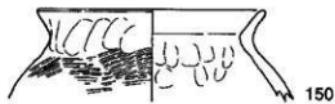
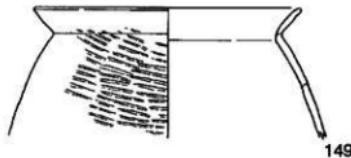
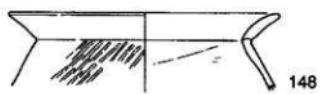
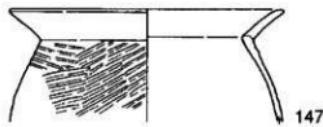
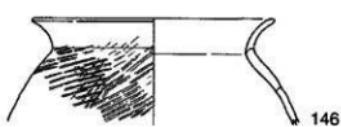
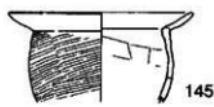
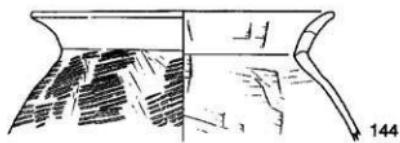
第25図 NR001出土遺物(11)



第26図 NR001出土遺物(12)

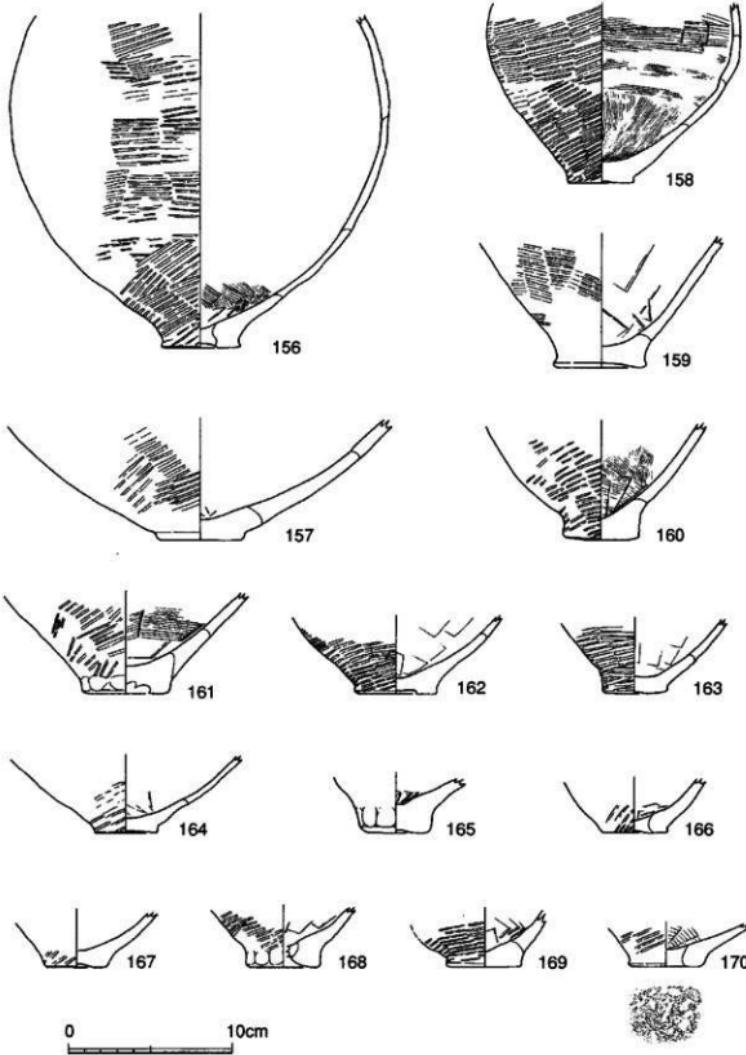


第27図 NR001出土遺物(13)

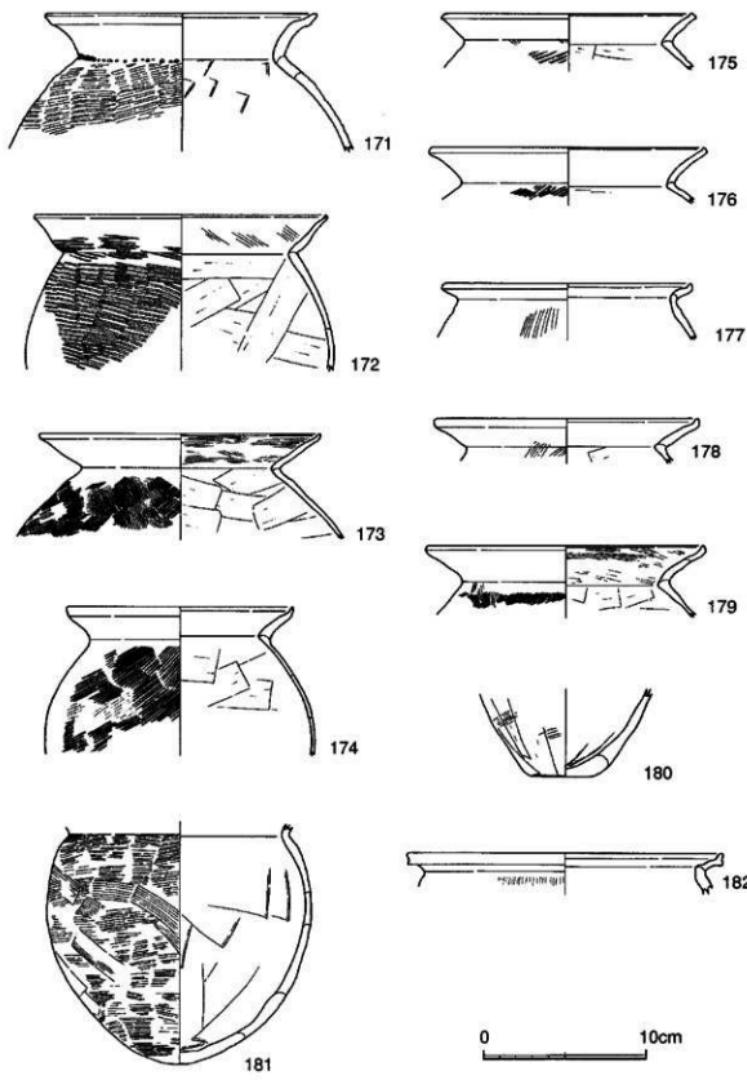


0 10cm

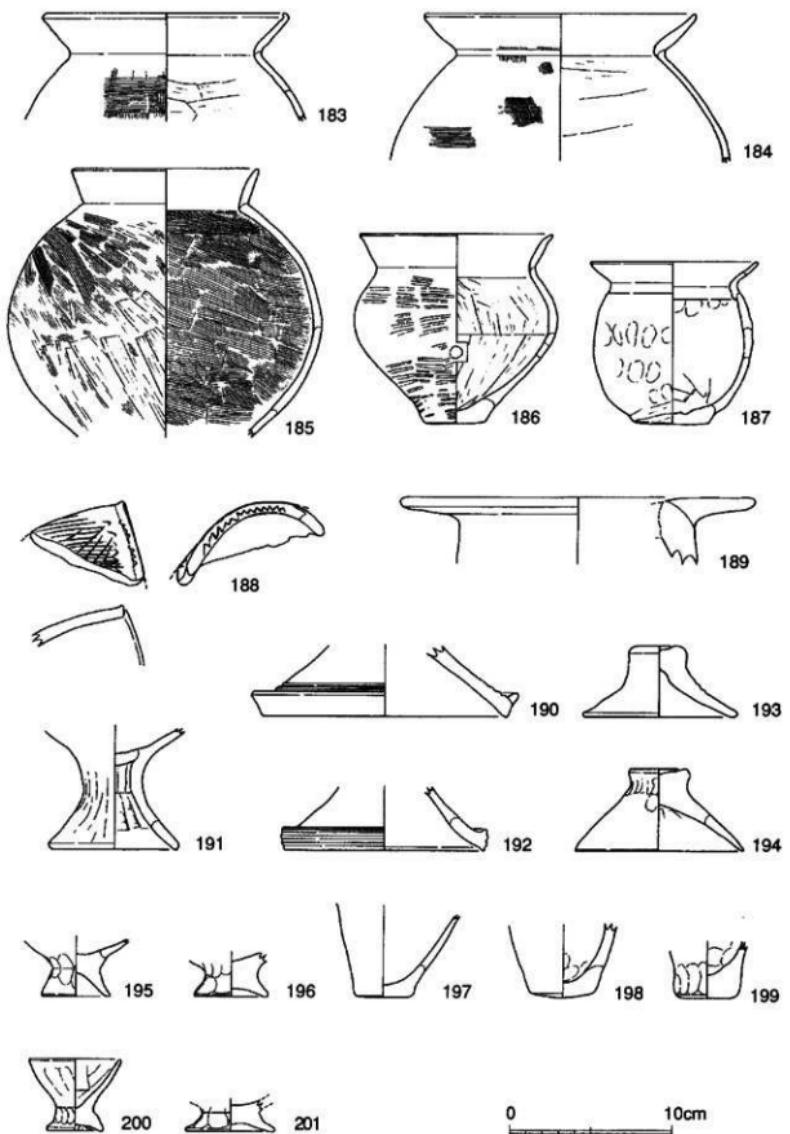
第28図 NR001出土遺物(14)



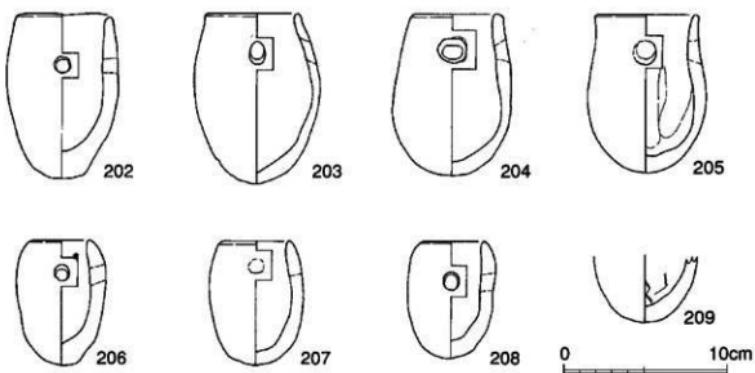
第29図 NR001出土遺物(15)



第30図 NR001出土遺物(16)



第31図 NR001出土遺物(17)



第32図 NR001出土遺物(18)

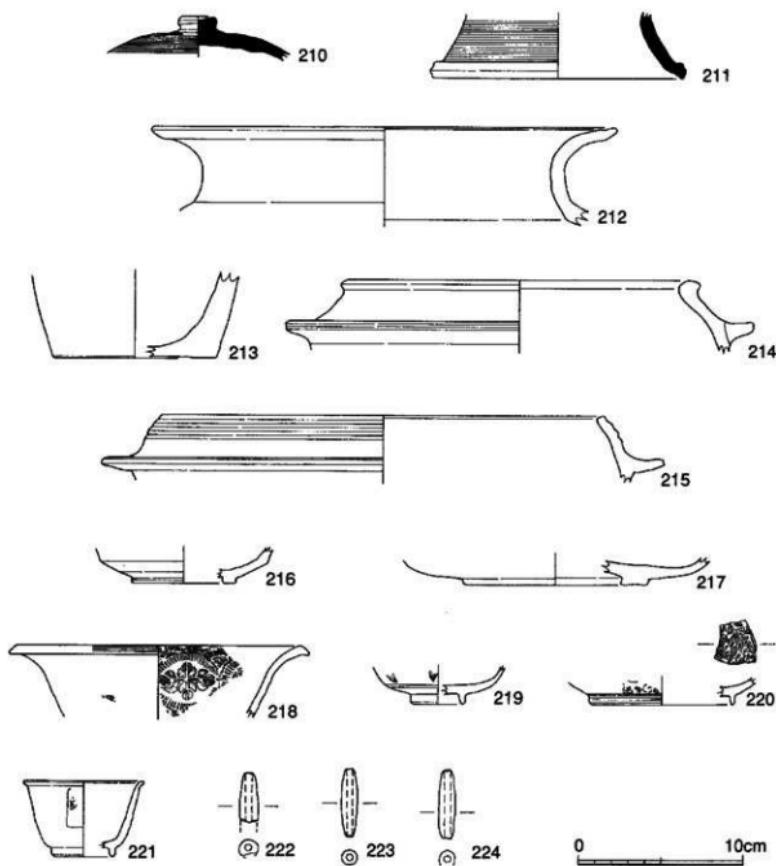
202～209は飯蛸壺である。いずれも前後の型合せにより砲弾形に製作されていて、接合痕が縦目地となって両側面に通っている。203と208とでは、高さに3.4cmの差がある。また205の口縁部は外反気味であるが、これ以外は内傾している。いずれも外面はヘラナデ調整、内面は強いユビナデ調整がなされている。弥生～古墳時代のものではあるが、時期比定はできない。

#### NR001東岸上整地土(第33・40～43図)

NR001の東岸上には部分的ながら整地土が残り、その中から遺物が出土している。図示し得たものは210～224の15点である。また拓影を掲載したものは、288～291・293・295・300・301・304・305・307～310の14点である。

実測図のうち210～212は須恵器である。210は蓋。頂部にボタン状のつまみを付け、外面にカキメ調整を施す。211は高杯の脚部。「ハ」字に開き、端部は肥厚する。外面にカキメ調整を施す。ともに古墳後期のものである。212は平安後期の甕である。口縁部は大きく外反し、端部は僅かに肥厚する。213は上師質土釜である。口縁部は内傾し、端部は肥厚する。12～13世紀に比定できよう。214は瓦質の鉢、215は瓦質の羽釜である。後者は、口縁部は内傾するが、端部は肥厚しない。口縁部端下に沈線が巡る。15世紀に位置付けられる。216・217は灰釉陶器で、前者は碗、後者は鉢である。218～221は磁器。218・220は鉢、219・221は碗である。磁器はいずれも近世後期～近代のものと考えられる。222～224の3点は土錐である。

拓影を示したもの全ては須恵器である。228は甕の口縁部破片、289・290・293・295・300・301・304は甕の胴部破片である。228はMT15型式に比定でき、6世紀前半に年代付けられる。289は甕の可能性もあり、内外面とも調整痕が磨消されている。291は東播系の甕の破片であり、時期の詳細については不明。305は甕の口縁部とみられる。波状文が施されている。TK23～TK47型式に比定できる。307～310は杯蓋の破片である。端部の残る307はTK47型式に比定できる。これらの須恵器は整地上中に2次的に混入したものであるが、6世紀代の遺物が複数含まれていること



第33図 NR001東岸上整地土出土遺物

は、この周辺の土地利用の一時期を示すものとして注目される。

さらにこの整地上からは、焼瓦や壺器なども出土している。さらに近代以降のものも少量認められることから、NR001東岸上の整地土は近世後期～近代に形成された可能性が高い。

#### SX002(第11・12・14図)

03-2区東半で検出された不定形土坑である。ひとつの土坑というよりは、幅1~2m、長さ10m以上の長方形土坑が群集したものといえる。そのため土坑間の重複が僅かにずれ、そこが幅の狭い壁状の立上がりとして残った部分もある。同様に不定形土坑と呼ぶSX008・009とは形成過程が異なっているとみられる。

後述する、04-1区で検出された長方形土坑群に近いが、04-1区のものは長軸方向にも連接し

て広がり、また壁状の立上がりがより明瞭であるなど、若干様相を異にしている。

この土坑は NR001 と重複した部分もあるが、掘り込み端がそれと接したり、あるいは 1~3m 開く場合がほとんどであり、基本的には NR001 を避けて土坑が掘削されたとみられる。

ベルト 3 にかかる土層図をみると、土坑内堆積土は主として砂疊である。

出土遺物はコンテナ 1.5 箱分を数える。弥生中期～古墳前期の土器である。しかし小破片のものが多く、図示できる遺物はなかった。

#### SX003(第 11・12 図)

03-2 区の北半に位置する、南北方向に広がる土坑である。規模は、長さ 21m 以上、幅 7m ほどである。また深さは、現状で 50~80 cm を測る。

この土坑は、東・西両側辺がほぼ直線的に延びていて、また北端が僅かに捉えられる北短辺も直線的であることから、SX002 とは異なり、当初よりひとつの土坑として掘削されたものと考えられる。しかしその底部は、壁体の周囲を除いて起伏が激しく、しかも幅 1m、長さ 3~8m の窪みの集まりのように観察され、定まった範囲の中に掘削単位があったかのようである。

土坑の南端は NR001 と重複しているが、一部に立上がりも認められることから、NR001 を大きく削り込むことはなかったと考えられる。この点は、先の SX002 と同様であり、さらにまた 04-1 区の長方形土坑群とも様相を等しくしている。

堆積土は、僅かに粘土も認められるが、主として砂あるいは砂疊で形成されている。

出土遺物はなかった。

#### 遺構外出土物(第 34~37・40~43 図)

遺構検出面の精査や側溝掘削によって出土した遺物のうち、遺構の帰属が明確でないものを遺構外出土遺物とした。03-2 区出土の遺構外出土遺物の中で、図示し得たものは 227~269 の 43 点である。

227~233 は壺である。227 と 228 は弥生後期の広口壺である。229・231・232 および小型壺である 233 は庄内式期、230 は布留式期に位置付けられよう。229 では粘土帯の貼り付けにより有段部を形成し、その上部に竹管文を施している。231 は直立する頸部の下位に粘土帯を巡らせ、その上に 2 列の櫛歯刻目を施した、加飾性の高い壺である。口縁部下半には丁寧なミガキ調整が内外面ともになされている。232 は口縁部上半が外反し、端部は立上がり気味である。内外面とも丁寧にミガキ調整が施されている。233 は胴部外面にタタキ調整を、内面にハケ・ヘラナデ調整を施している。230 は直口縁壺である。口縁部の立上がりは直線的である。

234・235 はともに弥生中期後半の鉢である。前者は大型品で、棒状浮文が貼付されている。また後者の胴部には簾状文が施されている。

236・237 は高杯である。前者は有稜の杯部で、庄内式期に位置付けられる。外面に横位のミガキ調整がなされている。後者は、杯部径と脚部裾径とがほぼ等しく、布留式期に位置付けられる。杯部内外面および脚部外面にミガキ調整がなされている。

238 は布留式期の器台である。器受部は浅く、その端部は幾分直立気味であり、面を形成している。外面には丁寧なミガキ調整がなされている。

239～251 は壺である。そのうち 239～241・243 は、胴部が球形化し、口縁部が「く」字状に短く外反する、V 様式系の壺である。242 は底部資料であるので、位置付けは難しいが、底部の突出が脆弱化し、底面が緩やかに窪む形状から、やはり庄内式期の V 様式系と捉えられる。

244～248 は庄内式系の壺である。244・247 は口縁部端が直立し、この系統の壺の典型的な形状を呈している。これに対し 246 の口縁部は、現状では丸味をもっている。ただしこれは摩滅による可能性もあり、胴部外面のタタキ・ハケ調整をみる限り、同系統のものと考えられる。また 245 の口縁部端は平坦であるが、胴部には細密なタタキ調整が施され器壁が薄いこと、248 の口縁部端も丸味があるが、僅かに内湾気味に立上がる口縁部上半の形状から、この 2 点も庄内式系壺であると考えた。

249 は壺の胴部資料である。胴部外面はタタキ・ミガキ調整、内面はイタナデ調整がなされている。胴部は球形度が高く、底部は僅かに突出するとはいへ平底に近い。この資料も庄内式期のものと考える。この壺は胴部外面に炭化物が付着し、使用されたことを窺わせるが、一方胴部の下半には直径 1 cm ほどの孔が穿たれている。外面から穿孔されたとみられる。祭祀あるいは墓葬に用いられた可能性も考えられる。NR001 からは底部穿孔された丸底鉢(76)や胴部に穿孔のある壺(186)、ミニチュア品(197～201)も出土しているので、03-1 区周辺に弥生後期～布留式期までの間で、墳墓が形成されていた可能性は高い。

250・251 は布留式系壺である。前者の口縁部は短く、端部は丸くおさまっている。同系のものでも新相に位置付けられよう。251 は胴部資料である。胴部は球形化していて、外面には粗いハケ調整、内面にはユビナデ・ヘラケズリ調整がなされている。

252 はミニチュア土器である。弥生時代のものと考えられる。253 は製塙上器の脚部である。弥生～古墳時代のいずれの時期かは不明。254 は土錘である。時期については不明。

255～257 は須恵器である。そのうち 255・256 はともに鉢で、平安末～鎌倉初頭に位置付けられる。257 は長方形 3 方透かしの施された高杯の脚部である。6 世紀代のものである。

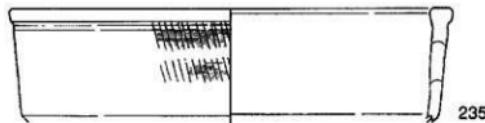
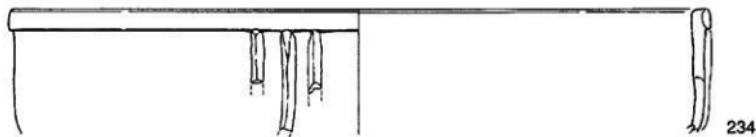
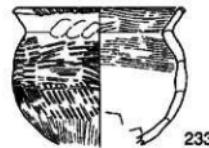
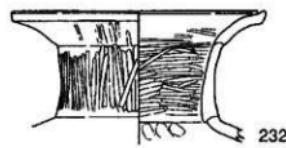
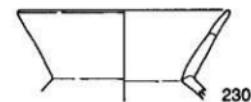
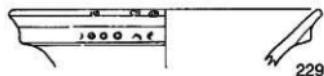
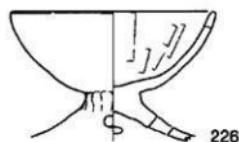
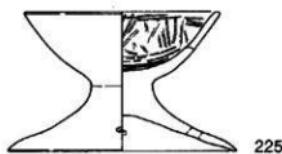
258・259 は土師器の皿である。前者は口縁部が僅かに外反する。ともに平安後期のものと考えられる。

260・261 は瓦器の椀である。261 は胴部から口縁部にかけて僅かに内湾気味に立上がり、深さも保っている。これに対して 260 は形骸化しているが、ともに平安末に位置付けられよう。

262 は土師質土釜である。NR001 の東岸整地土から出土した 213 に近似しており、12～13 世紀のものと考えられる。

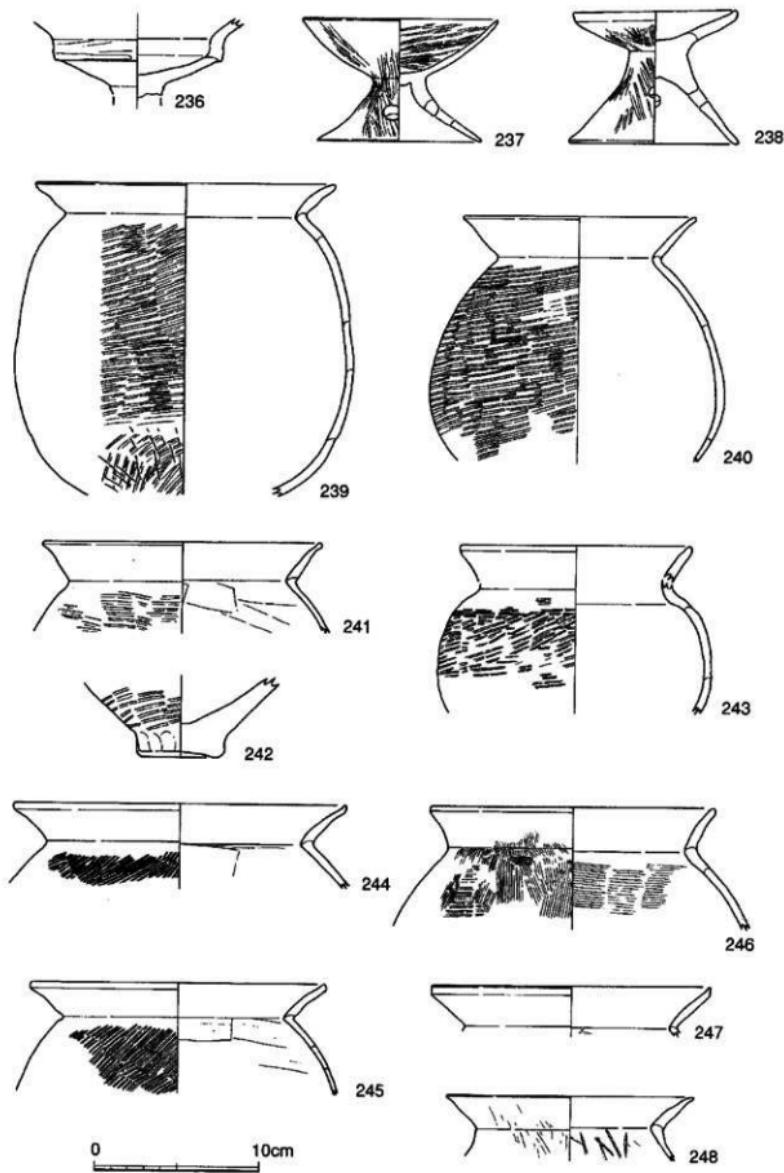
263 は青磁碗、264 は綠釉碗、265・267 は火釉碗である。266 は陶器の皿である。これらのうち 266 と 267 は近世後期のものである。

268 は馬の蹄鉄である。時期比定はできないが、近代の粘土採掘にあたって粘土運搬用のトロ

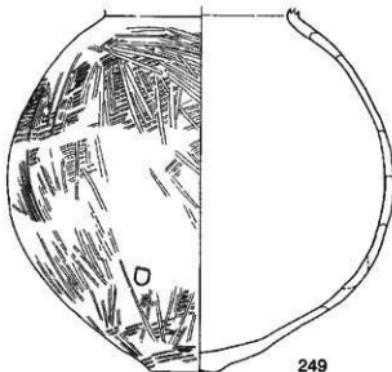


0 10cm

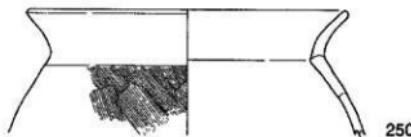
第34図 遺構外出土遺物(1)



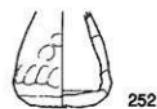
第35図 遺構外出土遺物(2)



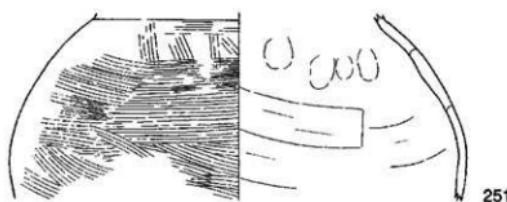
249



250



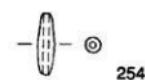
252



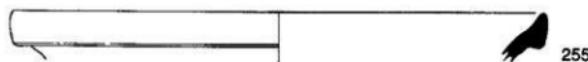
251



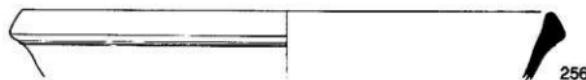
253



254



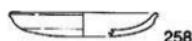
255



256



257



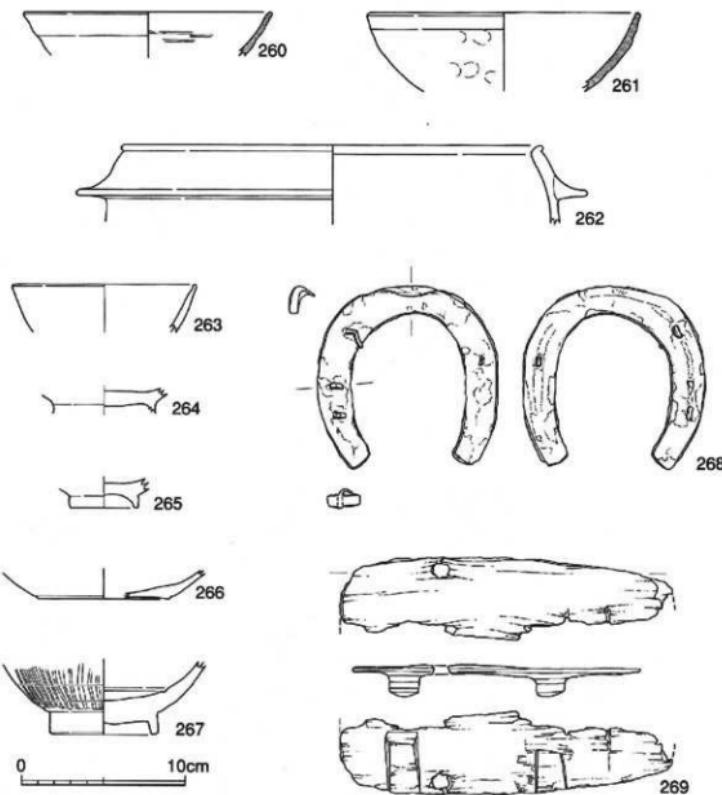
258



259

0 10cm

第36図 遺構外出土遺物(3)

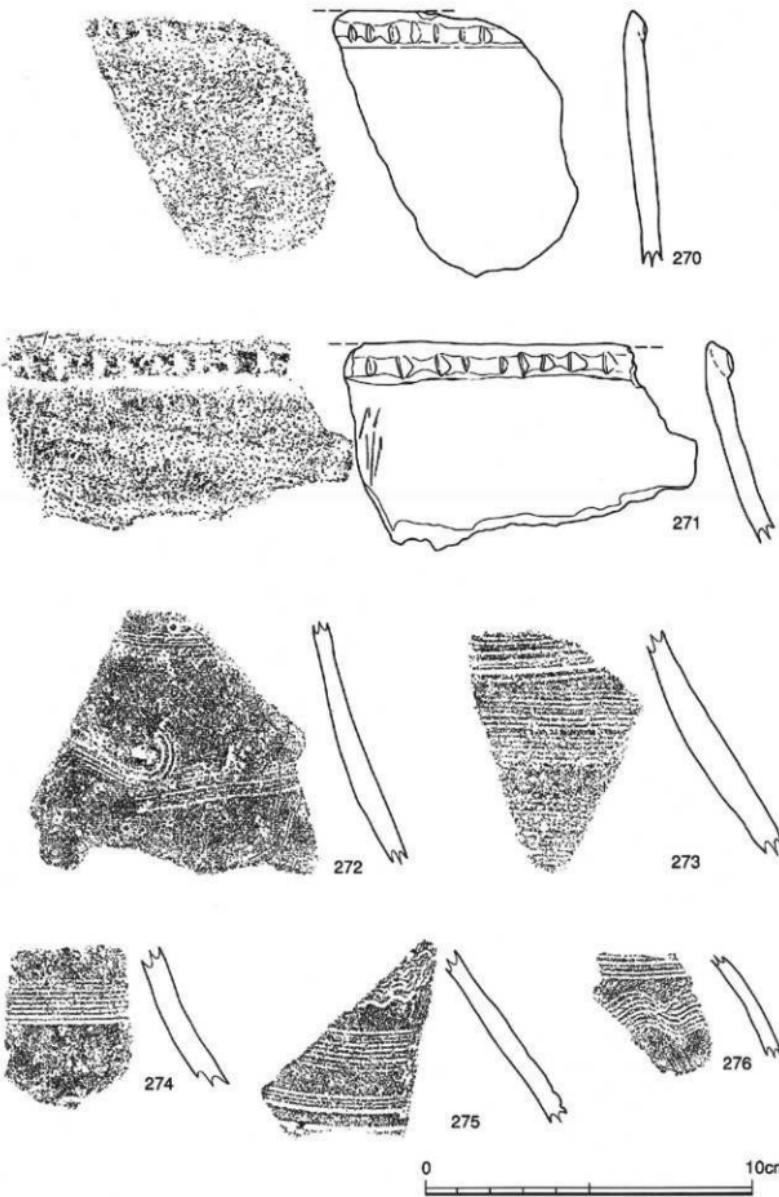


第37図 遺構外出土遺物(4)

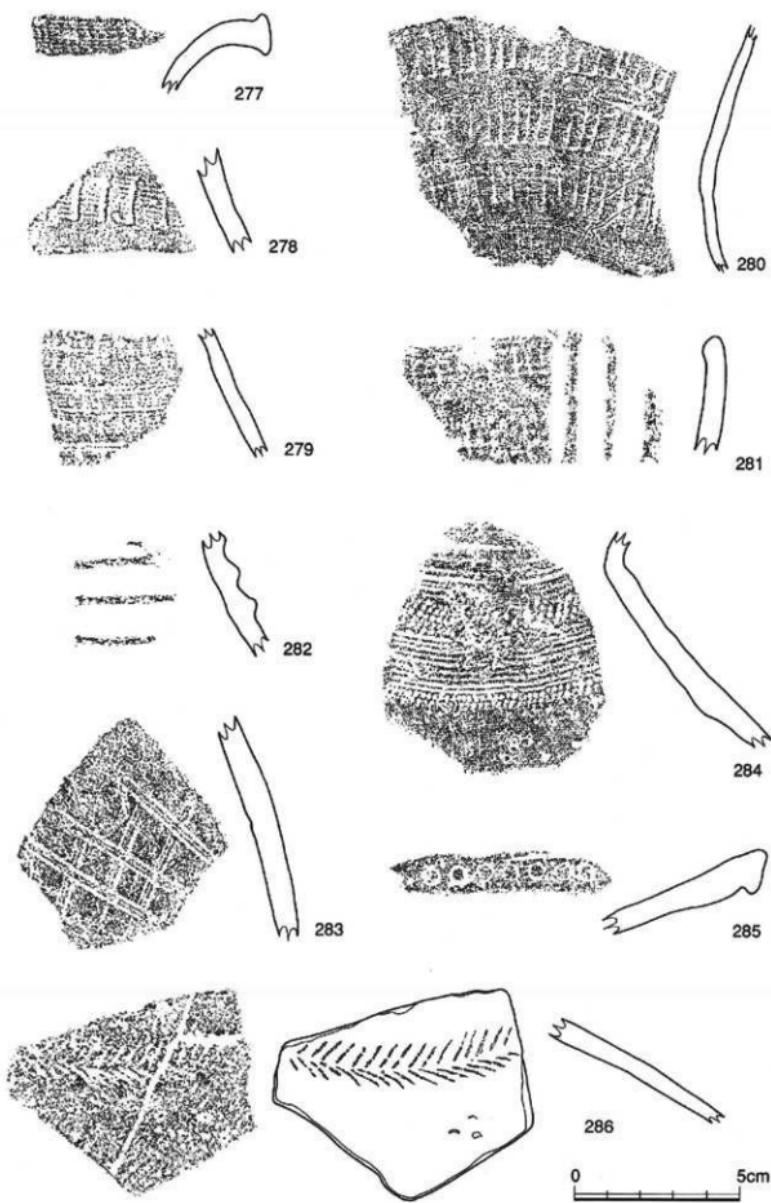
ツコを馬で引いたといわれており、それとの関係も推測される。269は木製下駄。これも時期を求める事はできないが、近代以降のものであろう。

図化できないが、拓影を掲載したるものに287・292・294・296~299・302・303・306・311の11点がある。311が炬器である以外、いずれも須恵器である。

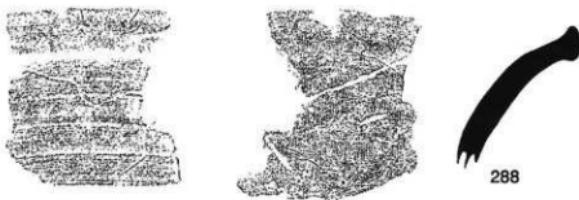
287は壺の口縁部である。復元口径は37cmとみられる。口縁部端下に粘土帯を巡らせて肥厚させている。TK10型式に比定でき、6世紀中頃に年代付けられる。292・294・296~299・302・303は壺の胴部破片である。このうち292の外面には平行タタキ調整がなされているが、タタキメと斜交方向の工具の傷痕が認められる。この胴部内面は、スリケシ調整により当具痕が消されている。294・296・297・298もまた外面平行タタキ調整、内面スリケシ調整がなされている。また303は、外面が格子タタキ調整であるが、内面はやはりスリケシ調整である。これらに対し、299・302は内面の当具痕が同心円文として残っている。306は壺の胴部とみられる。外面にカキメ調整



第38図 03-1-2区出土遺物拓影(1)

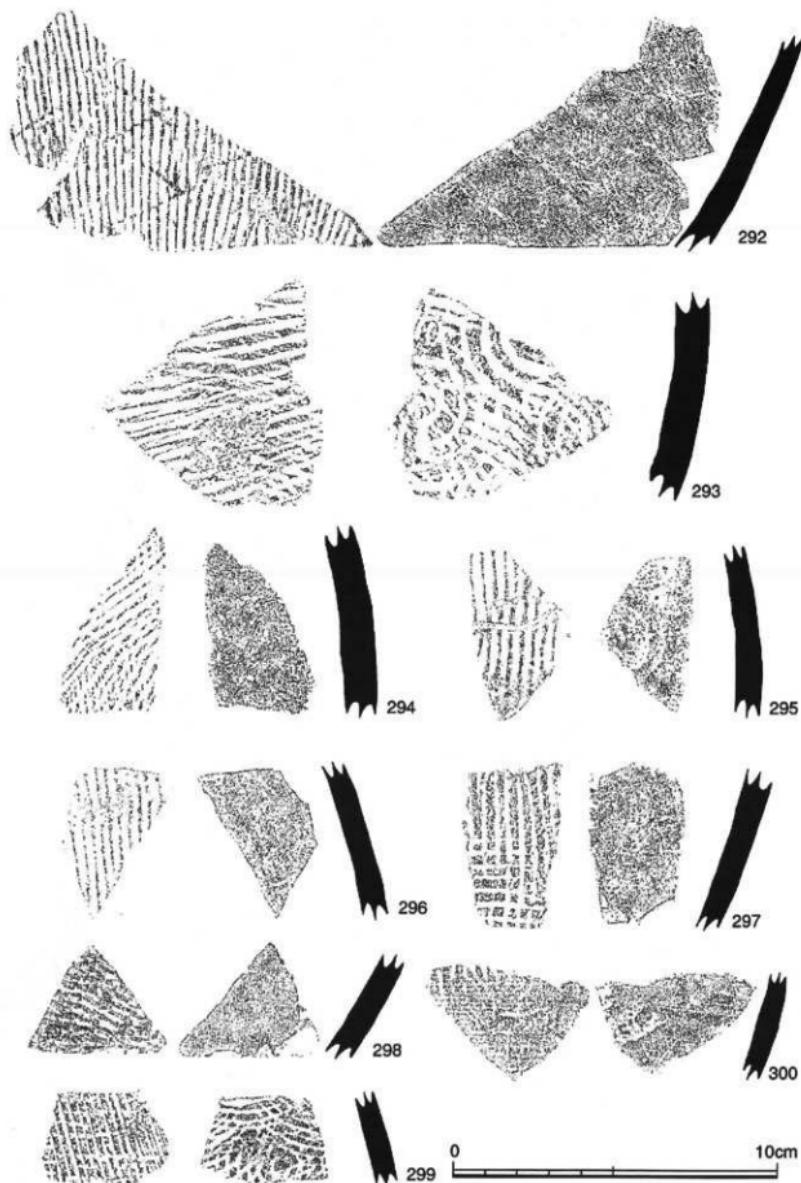


第39図 03-1・2区出土遺物拓影(2)

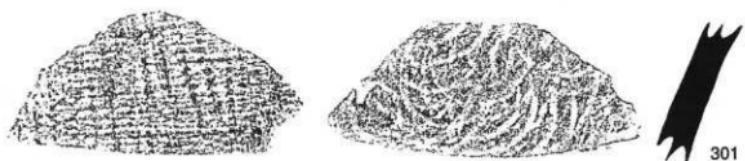


0 10cm

第40図 03-1・2区出土遺物拓影(3)



第41図 03-1-2区出土遺物拓影(4)

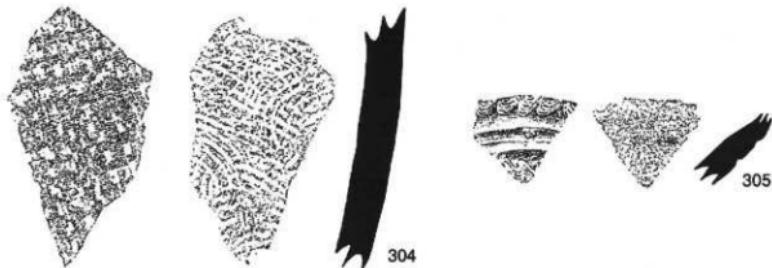


301



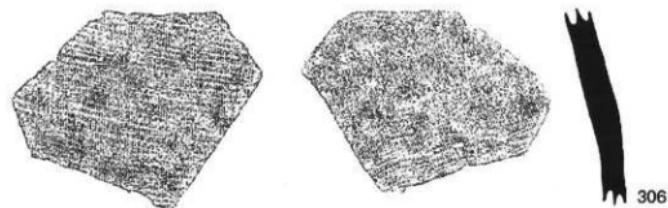
302

303



304

305



306



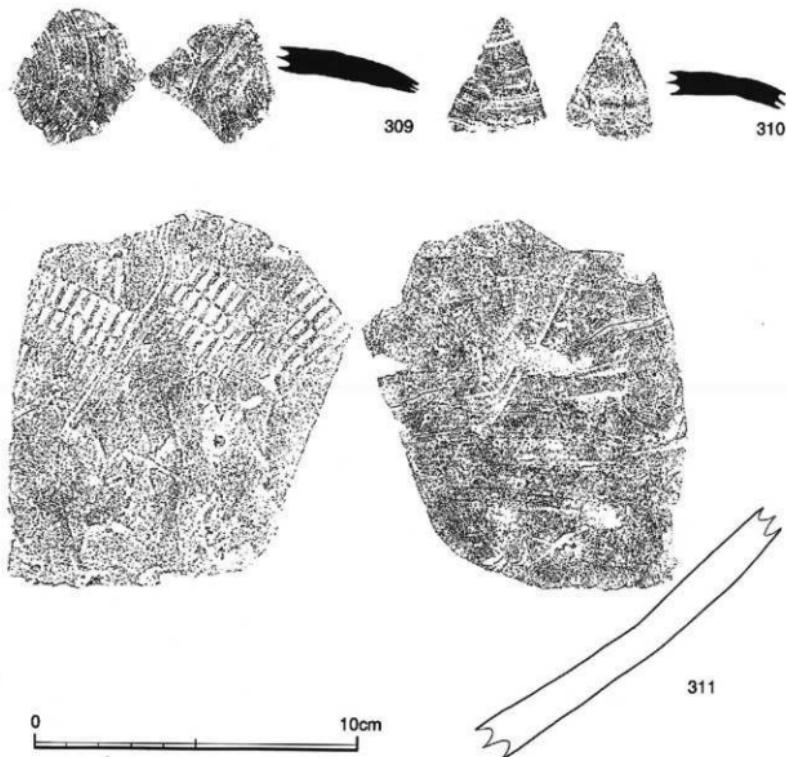
307



308

0 5cm

第42図 03-1・2区出土遺物拓影(5)



第43図 03-1-2区出土遺物拓影(6)

が残る。内面はスリケシ調整がなされているが、当具痕が僅かに残っている。

311は炻器の甕の胴部である。外面は格子タタキ・ケズリ調整、内面はスリケシ調整がなされている。時期は不明。

このように、遺構との関係が不明瞭な資料においても、NR001で検出されたような弥生・古墳時代の土器も数多いとはいえ、NR001東岸整地土やSX008と同様に、古墳中～後期の須恵器、平安後期(～鎌倉初頭)や近世の遺物も出土した。さらに近代の粘土採掘と関連が推測できる蹄鉄も存在していた。

複数点の古墳中～後期の須恵器は、先のNR001東岸整地土より出土した須恵器ともども、この周辺での土地利用のひとつの時期を求める上での手掛かりとなる。また整地土では中世の資料も認められることから、古墳前期以降も断続的ながら人の営みがこの遺跡内で行なわれていたことを示している。そして整地上が近世後期～近代に形成されたと考えられることから、古墳時代から中世にかけての人々の生活の痕跡は、その時期に消し去られたのであろう。

## 4 平成 16 年度の発掘調査

### (1) 調査概要

平成 16 年度は、住棟部分 1 カ所と電機室・受水槽部分 1 カ所の調査を実施した。住棟部分を 04-1 区、電機室・受水槽部分を 04-2 区と呼ぶ。04-1 区では、北東半と南西半とで検出遺構の状況が異なっている。

調査区の北東半では遺構の分布は粗い。この範囲で注目されるのは、その中央に位置する 075 積穴状遺構である。これは布留式期の遺構と考えられる。またその北東に近在する 030 土坑も、同時期のものとみられる。

2 カ年度にわたり実施した大町遺跡の調査において、古墳時代に比定し得る遺構はこの 2 基のみである。自然河道を中心に、多量の弥生時代から古墳時代前期にかけての土器が出土し、しかもその多くが庄内式期（～布留式期）のものと考えられる状況にあっては、当該期の遺構が検出されたことに疑義は生じないであろう。現状において、それらがほとんど見つからなかったのは後世の削平・擾乱によるために他ならない。この 2 基の遺構を除くと、近代の粘土探柵坑が点在するのが目立つ程度であり、大きな遺構は存在していない。

一方、調査区南西半では、2 条の自然河道を始め、数カ所に分かれる土坑群、溝などが存在し、遺構分布が極めて密になっている。この部分の上坑には、不定形の粘土探柵坑および連接状態を示す長方形上坑群があるが、いずれも自然河道の脇に取り付くように広がっている。

その上坑群の中を 080 溝が南北方向に延び、また土坑群の北東域を画るように 076 溝が伸びている。080 溝と 076 溝は、広狭差はあるものの、ほぼ平行しており、両者が有機的な関係にあったことを窺わせる。

また調査の最終段階に、調査区内に平行する 2 本のトレンチを設定し、遺構検出面下にあたる基盤層の調査を実施した。その結果、不定形土坑と連接する長方形土坑群の形成位置と地層との関係が明らかになり、両土坑の性格差を推測することができた。

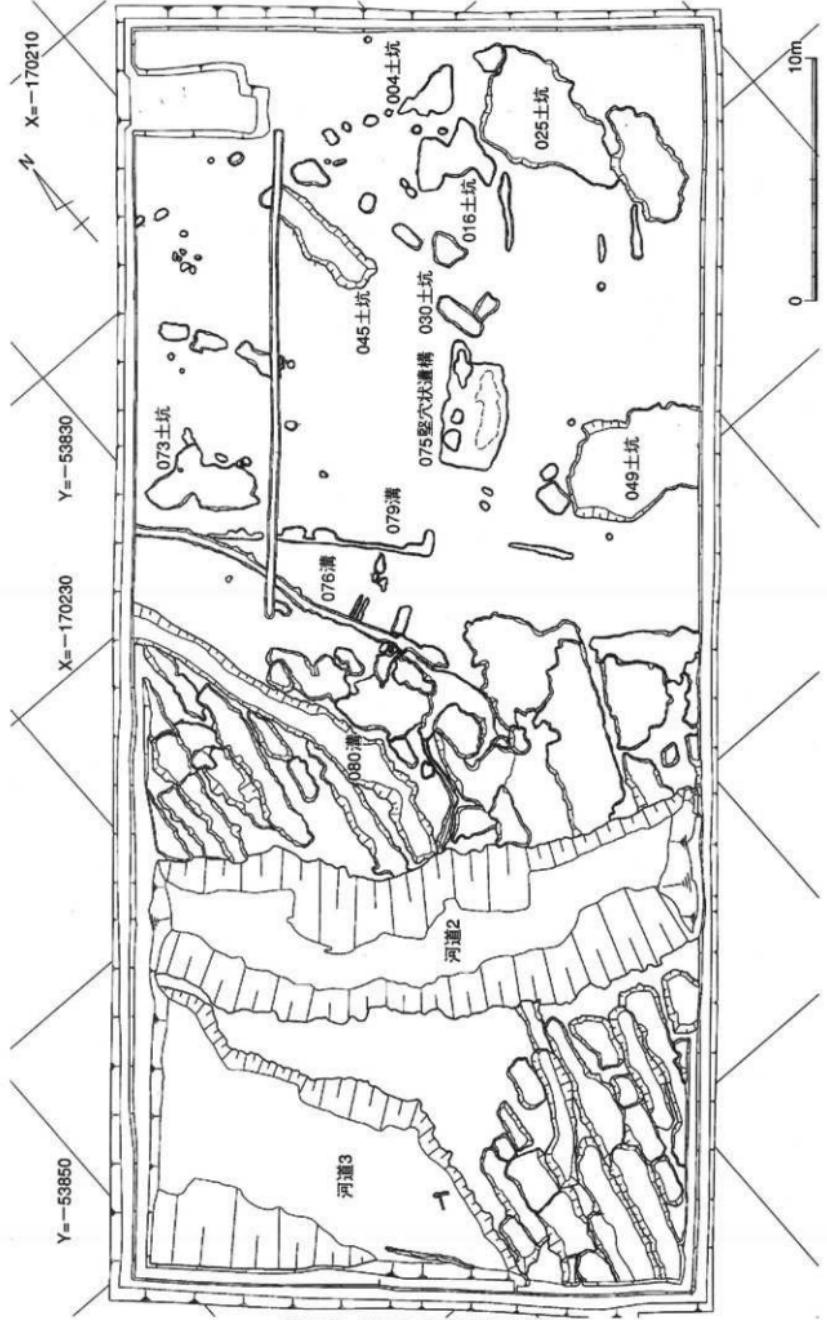
04-2 区では、調査区の北東半に自然河道が存在し、その南西岸に長方形土坑群が広がっていた。しかし調査区が狭いためもあって、ここでは不定形上坑を始めとする別種の遺構の存在は認められなかった。

なお、04-1 区の南西半に広がる長方形土坑群が調査区北東半では形成されず、40~50m の距離をおいて再び 04-2 区で現れる点は、上述したように、この土坑群の形成が地層との関係で捉え得るとする見方に手掛かりとなる。

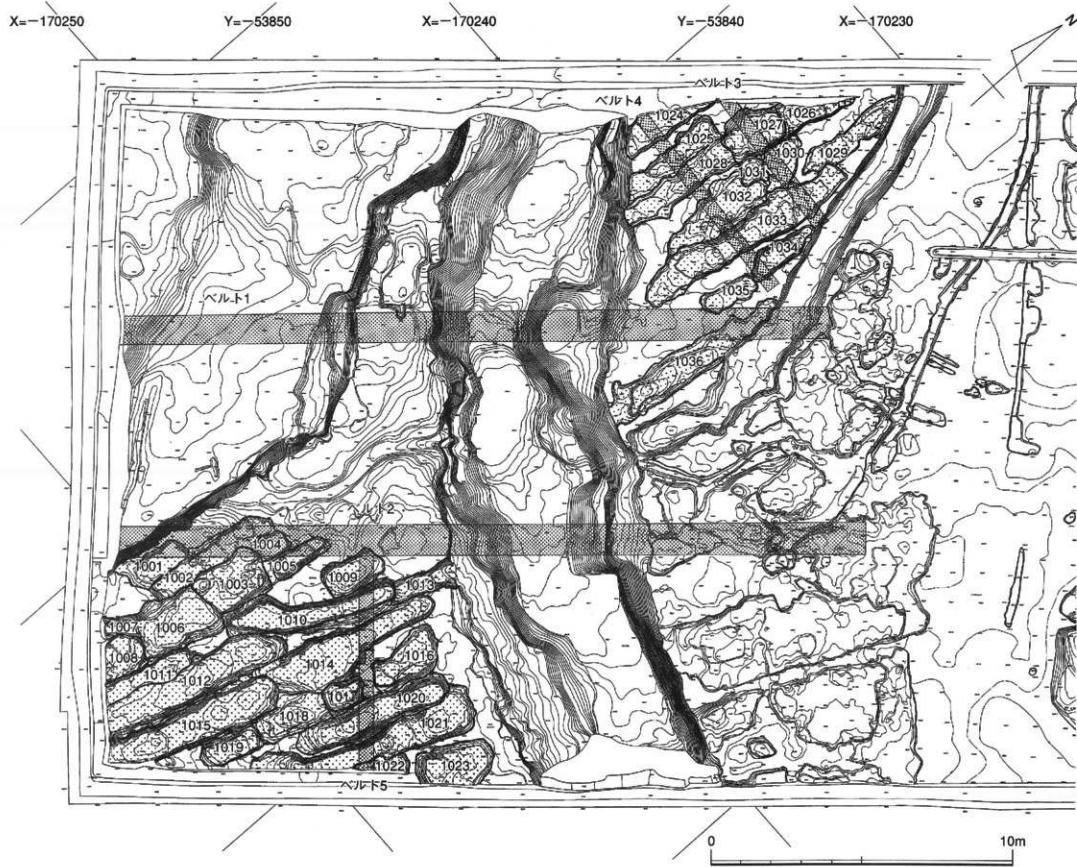
### (2) 04-1 区の調査

河道 2(第 44~58・81・82・87・88 図)

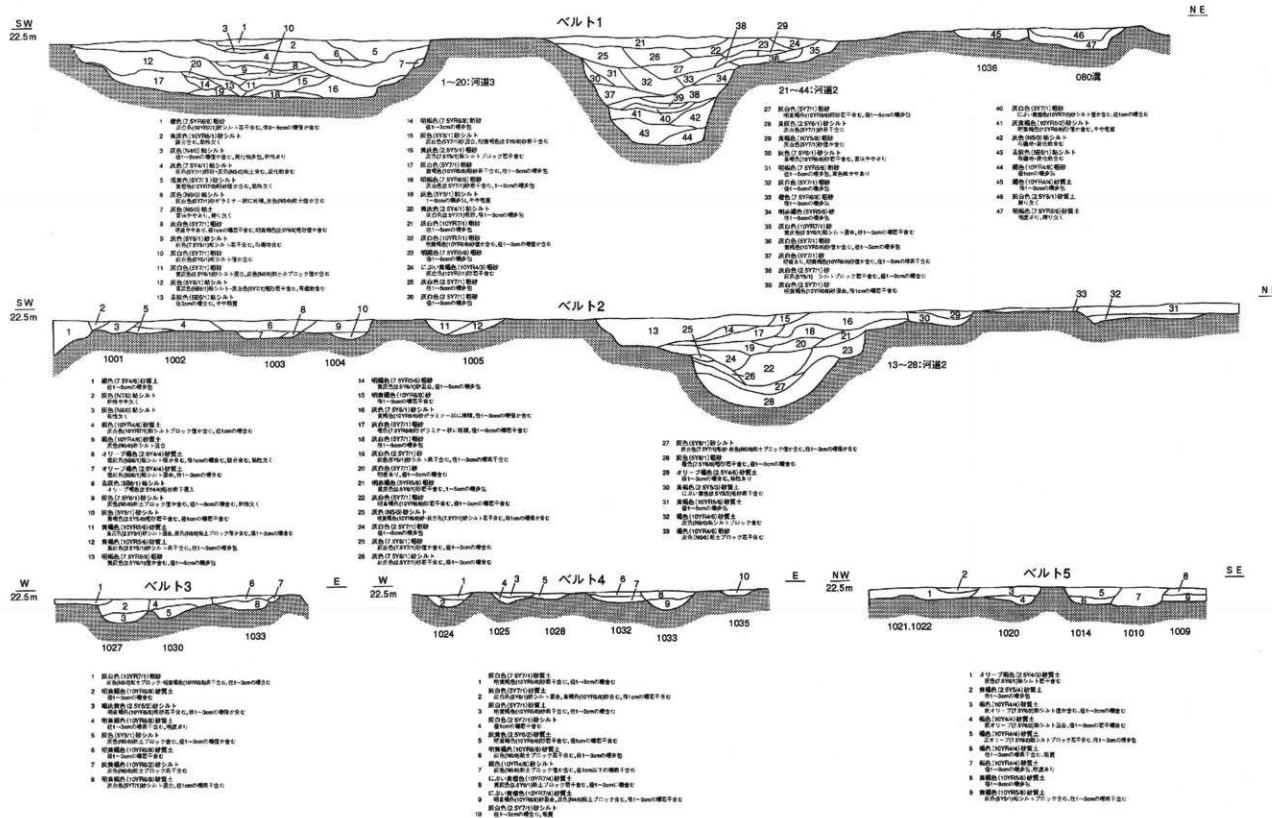
04-1 区南西半のはば中央に位置する自然河道である。僅かに南西方向に湾曲しているが、ほぼ調査区の短辺に平行し、北西一南東方向に延びている。検出面での上幅は 6m 前後、深さは検



第44図 04-1区の主要検出遺構



第45図 04-1区土層観察ベルトの位置



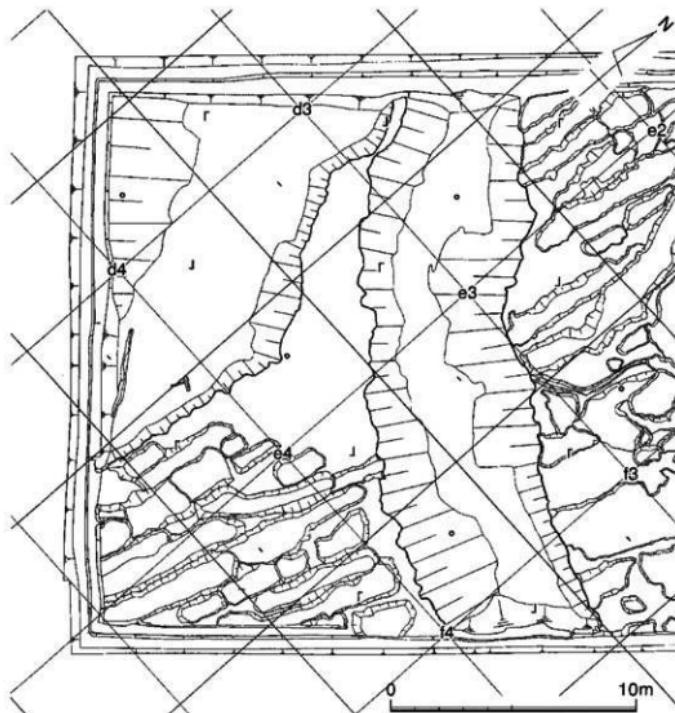
第46図 04-1区の土層

出面から2m以上あり、深いところで2.4mほどを測る。

北東壁には基盤層の削り残りがテラス状に張り出し、南西壁の東寄り部分でも壁面の立上がりは緩やかである。底面には多少の起伏があり、全体として北西方向に下降している。底面の標高値は、北西端が20.4m、南東端が20.7mで、30cmの高低差がある。03-2区のNR001の底面の標高値は20.0mほどなので、10mでおよそ20cmほどの勾配であったことになる。

堆積土は、下部のシルト系のものと、上部の砂系のものに大別できる。すなわち、ベルト1をみると41層以下と40層以上に、ベルト2では23・26・27・28層とそれよりも上層に、それぞれ区別される。このことは、下半部が埋没した段階でいったん水の流れが停止した時期があったことを示している。上半のほとんどの砂層には小礫が多包されている。

調査区の北西辺に沿って設けた基盤層観察用の西トレーンチにおいては、河道2内の堆積土(31～44)は砂を主としていて、シルト系のものは壁際でブロック状に認められただけであった。それらは壁面の崩落上の可能性が高いので、堆積土は基本的に砂だけということになる。この西トレーンチとベルト1・2の様相の違いは、西トレーンチ付近では先に堆積したシルト系土が全て流された



第47図 河道2・3の第V区画グリッド

ためであろう。NR001 でも堆積土の形成が複数回に分かれるとみられるが、砂系のものが主体であり、河道 2 の西トレンチにおける状況と一致している。流れの強弱、周辺の地質環境、あるいは先行する堆積土の継り具合などに起因して、上部砂層を形成した流水の下部への影響の強弱が異なるてくるといえる。

河道 2 から出土した遺物は 3559 点、62145g を数える。そのうち、地区割りに従って第 V 区画(5m 単位)のグリッドごとに、そして遺構検出面(標高約 22.2m)から 30 cm の深さごとに取り上げた遺物は 2778 点・52075 g であり、点数比では河道 2 全体の 78.1%、重量比では 83.8% であるので、それらを通観することで、河道 2 の出土遺物の傾向を捉えることは可能である。

2778 点・52075 g の遺物の全体的な状況をみると、弥生中期前半の土器が 14 点・630g(0.5%・1.2%)、弥生中期中葉 11 点・530g(0.4%・1.0%)、弥生中期後半 39 点・1680g(1.4%・3.2%)、弥生後期 56 点・3145g(2.0%・6.0%)、弥生土器一括 82 点・2600g(3.0%・5.0%)を数え、弥生中～後期の土器は、点数比で 7.3%、重量比で 16.4% である。

これに対して庄内式期になると土器数は急増する。庄内式期と捉えられた土器は 454 点・12725g(16.3%・24.4%) を数える。さらに布留式期の土器は 35 点・1010g(1.3%・1.9%)、庄内～布留式期のものは 17 点・1415g(0.6%・2.7%)であり、庄内・布留式期を合わせると 506 点・15150g(18.0%・28.7%)となる。そして弥生時代か古墳時代か、帰属の不明確の土器が 2064 点・28265g(74.3%・54.3%)あるので、この河道 2 から出土した土器は、ほとんどが弥生中期から布留式期のものといえる。

一方、古代以降のものとしては、古代の土師器 1 点・5g(0.04%・0.01%)、灰釉陶器 1 点・5g(0.04%・0.01%)、陶器 1 点・10g(0.04%・0.02%)、磁器 1 点 25g(0.04%・0.05%)がある。この 4 点はいずれも検出面下 0～30 cm の層から出土したものなので、河道 2 の埋没後に上面を覆った層中のものが混入した可能性が高い。

グリッドにとらわれず層位に従ってみると、弥生中期前半の土器は検出面下 0～150 cm まで継続

	弥生中期前半	弥生中期中葉	弥生中期後半	弥生一括	庄内	庄内～布留	布留～古墳	彌生～古墳	須恵器	古代土師器	灰釉陶器	陶器	磁器	その他
0～30cm 点数	5	0	4	9	20	83	6	12	643	1	1	1	1	0
0～30cm 重量	300	0	120	355	605	2345	400	380	7535	10	5	5	10	25
0～150cm 点数	0	0	0	1	0	7	0	1	17	0	0	0	0	0
0～150cm 重量	0	0	0	185	0	1120	3	20	205	0	0	0	0	0
30～60cm 点数	3	0	8	18	9	61	3	8	302	0	0	0	0	1
30～60cm 重量	75	0	395	445	375	2015	485	75	4045	0	0	0	0	20
60～90cm 点数	2	1	12	9	29	102	4	6	477	0	0	0	0	0
60～90cm 重量	60	45	345	1040	400	2620	325	385	6845	0	0	0	0	0
90～120cm 点数	2	7	8	13	15	115	3	6	329	0	0	0	0	0
90～120cm 重量	65	430	655	790	860	2610	50	135	5375	0	0	0	0	0
120～150cm 点数	0	2	8	4	10	1	1	1	131	0	0	0	0	0
120～150cm 重量	0	0	80	75	250	1065	55	10	2000	0	0	0	0	0
150～180cm 点数	0	3	3	1	38	0	1	134	0	0	0	0	0	0
150～180cm 重量	0	55	70	220	20	690	0	5	2020	0	0	0	0	0
180～210cm 点数	0	0	1	2	0	4	0	0	16	0	0	0	0	0
180～210cm 重量	0	0	15	35	0	45	0	0	150	0	0	0	0	0
210～240cm 点数	0	0	0	0	0	4	0	0	15	0	0	0	0	0
210～240cm 重量	0	0	0	0	0	215	0	0	90	0	0	0	0	0

第 1 表 河道 2 出土遺物組成

して認められる。中期中葉の土器は30~60cm間ではみられないものの、やはり0~180cmの間に分散していく、中期前半の土器と類似した分布傾向を示している。弥生中期後半および弥生後期の上器は、さらに下層から出土していく、0~210cmまでの間で認められる。これはほぼ河道の上面から底面までに対応する。なお180~210cmの深さから弥生中期後半・後期の土器が出土したのは、e4・Ⅲグリッド(中期後半1点・15g、後期2点・35g)である。

庄内式土器は同じe4・Ⅲグリッドの180~210cm間から4点・45gが出土しているが、さらにe5・Iグリッドの210~240cm間からも4点・215gが出土している。

この河道下層から出土した庄内式期の土器は、7点がタタキ調整のなされた壺の胸部破片で、庄内式期のV様式系壺を捉えたものだが、1点・150gは庄内式期の鉢(410)であるので、河道底

	弥生後期						弥生・古墳						庄内			
	壺	高杯	鉢	有孔 鉢	飯鍋 壺	豆	壺	高杯	台付 土器	鉢	ミニ チュ ア	V様 式系 壺	庄内 式系 壺	壺	高杯	鉢
													点数	重量	点数	重量
0~30cm	点数 4	3	2	0	0	4	12	1	3	0	0	71	7	3	2	0
	重量 165	65	125	0	0	300	170	10	125	0	0	1525	180	315	325	0
0~150cm	点数 0	0	0	1	0	5	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0
	重量 0	0	0	185	0	0	0	0	0	0	0	1120	0	0	0	0
30~60cm	点数 16	2	0	0	0	3	3	3	0	0	0	52	3	1	0	0
	重量 395	59	0	0	0	260	25	80	0	0	0	1980	65	50	0	0
60~90cm	点数 6	2	0	1	0	1	24	1	0	3	0	99	3	0	0	0
	重量 630	245	0	165	0	60	205	25	0	205	0	2585	35	0	0	0
90~120cm	点数 6	6	0	0	1	2	8	1	2	2	0	108	7	0	0	0
	重量 205	370	0	0	215	205	95	165	55	310	0	2235	375	0	0	0
120~150cm	点数 0	0	0	1	0	2	6	0	0	0	0	36	3	1	0	0
	重量 0	0	0	75	0	110	140	0	0	0	0	895	120	40	0	0
150~180cm	点数 1	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	38	0	0	0	0
	重量 70	150	0	0	0	3	0	20	0	0	0	690	0	0	0	0
180~210cm	点数 1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
	重量 15	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0	0	0	0
210~240cm	点数 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1
	重量 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	0	0	0	150

	庄内～布留				布留				弥生～古墳							
	壺	鉢	布留 式系 壺	壺	高杯	器内	丸底 鉢	壺	壺	高杯	器内	壺	器種 不明	壺	鉢	
0~30cm	点数 4	2	6	3	0	0	1	15	23	14	0	591	0	0	0	0
	重量 260	140	220	140	0	0	20	1445	135	580	0	5375	0	0	0	0
0~150cm	点数 0	0	0	0	0	0	1	0	5	0	0	12	0	0	0	0
	重量 0	0	0	0	0	0	0	20	0	25	0	0	180	0	0	0
30~60cm	点数 2	1	7	1	0	0	0	5	12	13	0	272	0	0	0	0
	重量 425	60	50	25	0	0	0	405	85	615	0	2940	0	0	0	0
60~90cm	点数 4	0	3	0	3	0	0	28	50	13	0	386	0	0	0	0
	重量 325	0	30	0	355	0	0	1120	395	410	0	4920	0	0	0	0
90~120cm	点数 3	0	6	0	0	0	0	7	28	10	0	282	1	1	0	0
	重量 150	0	135	0	0	0	0	640	270	580	0	3680	35	70	0	0
120~150cm	点数 1	0	1	0	0	0	0	2	7	5	0	117	0	0	0	0
	重量 55	0	10	0	0	0	0	50	50	360	0	1540	0	0	0	0
150~180cm	点数 0	0	1	0	0	0	0	2	10	1	0	121	0	0	0	0
	重量 0	0	5	0	0	0	0	165	60	80	0	1715	0	0	0	0
180~210cm	点数 0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0
	重量 0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	140	0	0	0	0
210~240cm	点数 0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	13	0	0	0	0
	重量 0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	80	0	0	0	0

第2表 河道2出土遺物の器種別組成

直上の埋没も庄内式期以降と予測できる。

庄内式期の土器はこのように河道の深い位置からの出土もあるが、150~180 cm間では 38 点・690g を数え、これより上層での出土数は多い。

この庄内式期の土器とした 454 点・12725g には、V 様式系壺、庄内式系壺、壺、高杯、鉢があり、V 様式系壺は 423 点・11060g、庄内式系壺 23 点・785g、壺 5 点・405g、高杯 2 点・325g、鉢 1 点・150g である。つまり庄内式期の土器のうち点数比で 93.2%、重量比で 86.9% が V 様式系壺である。そして V 様式系壺とした、胸部外面にタタキ調整の施した土器がこの河道 2 内全体にわたって包含されているのである。

さらに、布留式期の土器には布留式系壺、壺、高杯、器台がある。そして布留式系壺が 150~180 cm 間で 1 点・5g ではあるが出土している。この層には、弥生中期前半や中期中葉の土器も含まれているが、それらの時期の上器はそれより下の堆積土には認められない。これに対し、上述したように弥生後期や庄内式期の土器が下位の堆積土中にも包含されているので、弥生中期前半以降、時間的経過とともに溝内が順次堆積したのではないといえる。

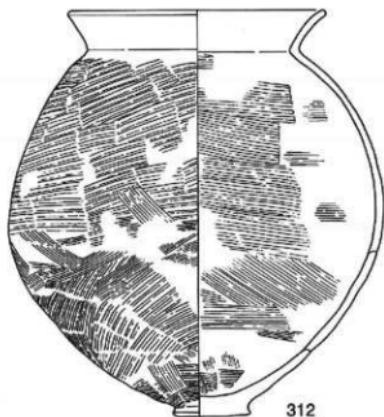
出土遺物のうち、実測図 116 点、拓影 9 点を掲載した。

312~318 は河道上面で出土した資料である。312 は V 様式系壺。胸部外面にはタタキ調整がなされているが、中程には部分的にハケ調整も加えられている。313 はタタキ調整が施された有孔鉢。弥生後期あるいは庄内式期のものとみられるが、詳細な時期については不明である。314 は胸部中央に直径 3.2 cm の孔が穿たれた碗と考えられる。焼成前に内面から穿孔されている。穿孔目的や土器の機能については不明である。時期比定もできない。

315 は有段口縁壺の口縁部である。段部の張りが強く、外反して端部へと到る。口縁部内面には細線によって軸線を伴う綾杉文が描かれている。綾杉文は 3 cm ほどの間隔で向きを変え、その都度、頭合わせ・尻合わせとなっているが、他方に線が入り込むことによって複合鉛削文状を呈する部分もみられる。綾杉文帯は内側に仕切り線が設けられ、幅 3 cm ほどを測る。外側には仕切り線はみられないが、縦 5~6 条、横 8 条以上の細線を束ねた帯を組み並べて綾杉文帯を仕切っている。この縦・横線帯の構成は、遺存状態のよい部分では縦群・横群・横群・縦群である。しかしこの構成で口縁部縁辺を全周するかは不明であり、綾杉文帯でも不整合な部分が認められたよう、部分によって構図が異なる可能性は高いとみられる。この縦・横線帯の上辺は摩滅のため不明瞭であるが、横線が縦線を囲むように延びることはおそらくないと考える。この壺の色調は橙色 (5YR6/6) で、類似した色調の壺は少ないものの、03-2 区から出土した 286 とは共通している。この土器は概述のように東海西部のものと推定されることから、315 もまたその地域との関係を推測することができる。庄内式期に比定できよう。

316 も庄内式期の壺である。頭部から口縁部にかけて大きく外反して立上がるが、口縁部は僅かに内湾気味である。頭部にはハケ調整が施されている。317 は庄内式期~布留式期の鉢である。

河道上面からは 318 のような近世後期の磁器碗も出土している。碗は調査区周辺の地形を改變



312



313



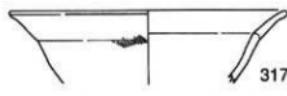
314



315



316



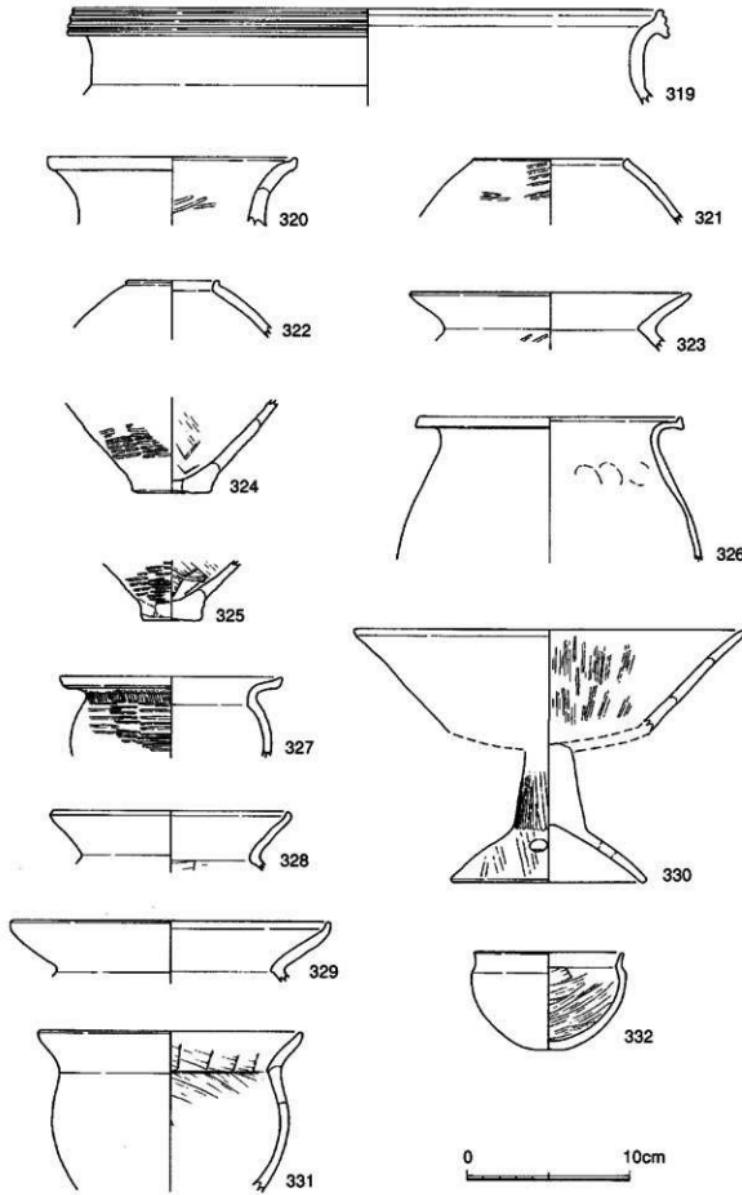
317



318



第48図 河道2出土遺物(1)



第49図 河道2出土遺物(2)

した際に河道上層に混入した可能性が高い。

319～335は河道上面から30cmまでの堆積土から出土した資料である。

319は弥生中期後半の甕である。上下端が張り出した口縁部の外側に3条の凹線文を施す。320は弥生後期の広口甕。321は胴部にタタキ調整の施された無頸甕で、これも弥生後期に位置付けられよう。322も同じく無頸甕であるが、詳細な時期比定はできない。

323・324・325はV様式系、328・329は庄内式系甕である。庄内式系とした2点はともに口縁部端が直立する。

326は、摩滅のため胴部の外側調整が判読できないが、内面はイタナデ・ユビオサエ調整がなされている。短く外反する口縁部と直立する端部の形状から、03-2区NR001出土の182と同じく吉備系の土器と考えたい。弥生後期あるいは庄内式期のものである。327は小型甕である。口縁部端は直立する。胴部外面にハケ・タタキ調整、内面にイタナデ調整を施している。

330は有稜高杯である。杯部と脚部が直接接合しないが、同一個体とみられる。庄内式期に位置付けられよう。

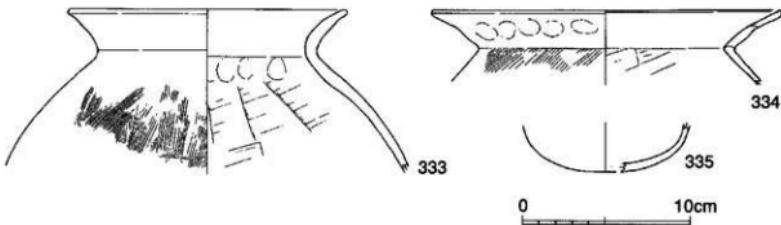
331は鉢、332は丸底鉢でともに庄内式期～布留式期のものとみられる。前者は口径16.2cmを測り、胴部最大径より僅かに広い。また、外側は摩滅しているため調整が不明瞭であるが、口縁部および胴部は内外面ともヘラナデ調整がなされているとみられる。後者は胴部が球形であり、最大径は上半にある。口縁部は屈曲して外反し、頸部に稜線が立つ。

333・324は布留式系甕である。333の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさまっている。これに対し、324の口縁部は直線的に外反し、その内面端は肥厚する。

335は小型鉢とみられるが、器台の器受部の可能性もある。布留式期に位置付けられよう。このように検出面から30cmまでの間で出土した遺物のうち図示したものだけをみても弥生中期後半から布留式期まで認められた。そしてそのなかでも、V様式系甕を含む庄内式・布留式期のものが70%ほどを占めている。

336～349は30～60cmの深さの堆積土から出土した資料である。

336は胴部外側にタタキ調整がなされた甕である。口縁部は短く外反し、端部上下は張り出す。口径は30.1cmと広い。弥生中期後半のものである。



第50図 河道2出土遺物(3)

337 は受口状口縁部をもつ壺である。胴部内外面ともヘラナデ調整がなされている。弥生後期に位置付けられよう。

338～344・346 はV様式系壺である。胴部は球形化し、頸部から「く」字状に屈曲する口縁部は短く直線的に延びている。344 はほぼ平底になっている。これに対して 343 の底部は突出が顕著であるが、胴部への立上がりは大きく開いている。また 346 は平底で、外面にタタキ調整が認められる。よって各底部資料もまた V 様式系壺と捉えた。345 は弥生後期～庄内式期の有孔鉢。

347 は有段口縁壺の口縁部である。内外面ともヘラナデ調整がなされている。布留式期のものである。349 は直口壺である。口縁部は直線的に外傾し、端部は尖り気味である。口縁部内外面および胴部外面はミガキ調整がなされている。庄内式期に位置付けられようか。

348 は有稜杯部をもつ高杯である。杯部の復元径は 17.0 cm とやや小さいが、深さはあり、稜も明瞭である。弥生後期～庄内式期の範疇であるが、詳細な時期比定は難しい。

このように 30～60 cm の間から出土した図示資料には、弥生中期後半および後期のものもあるが、多くは庄内式期のものである。

350～374 は、60～90 cm の深さの堆積土から出土した資料である。

350 は弥生中期前半の壺である。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさまる。351 は弥生中期後半の壺。口縁部は短く外反し、端部は上方に直立する。不鮮明ではあるが、胴部外面にタタキ調整が施されているように観察される。353 も弥生中期後半の壺である。口縁部は短く外反し、口径は 26.2 cm と広い。

352 は弥生中期中葉の長頸壺の口縁部である。現状 5 段の櫛歯刺突文が認められる。また端部近くには、ユビオサエの痕が残る。354 は弥生中期後半の広口壺である。口縁部は水平に屈曲し、端部は上下に張り出す。

355 は弥生中期後半の壺である。口縁部は大きく外反し、端はやや直立している。

356 は弥生後期の長頸壺である。肩の張りが強く、胴部の球形度もある。頸部は直立している。摩滅のため外面調整は不明。

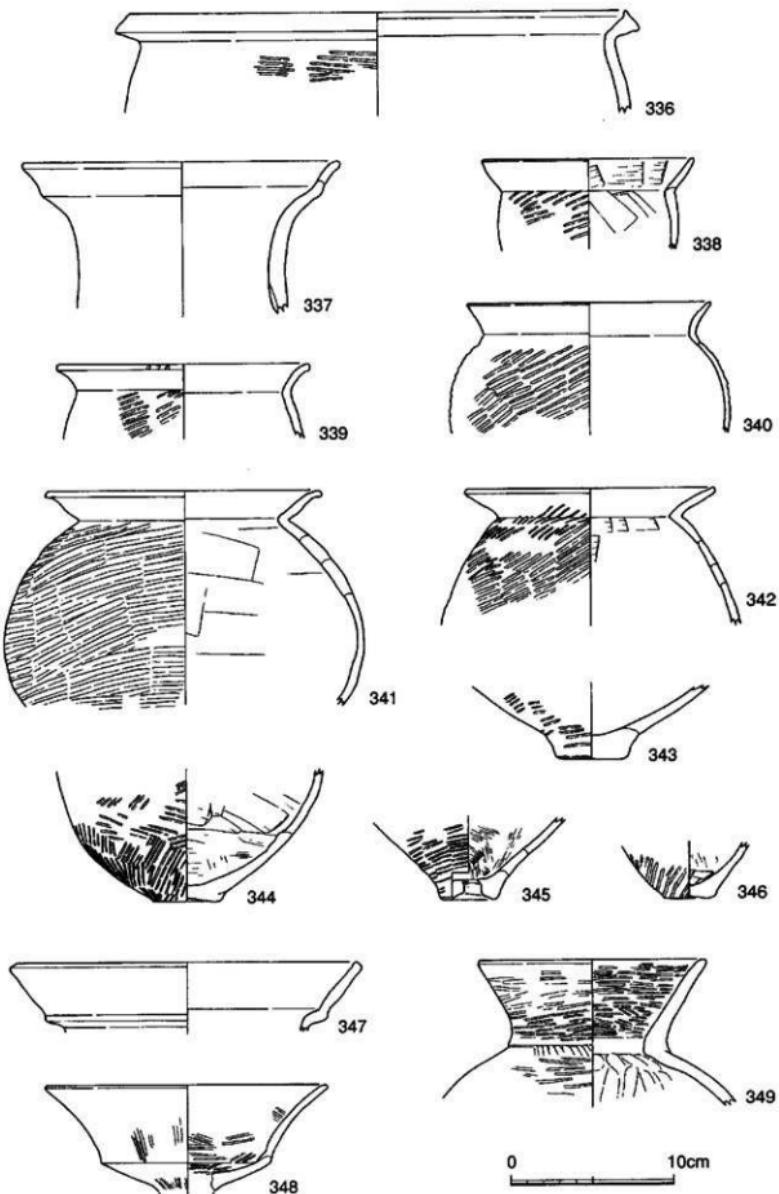
357 は柱状の脚部をもつ高杯である。弥生後期に位置付けられよう。

358～360 は蓋である。359 は裾端を欠損しているが、ほぼ完形である。これに対して 358・360 は、遺存率は低いが頂部から裾端まで捉えられる。大きさから、いずれも壺に伴うものであろう。また、弥生時代のものであろうが、詳細な時期比定はできない。

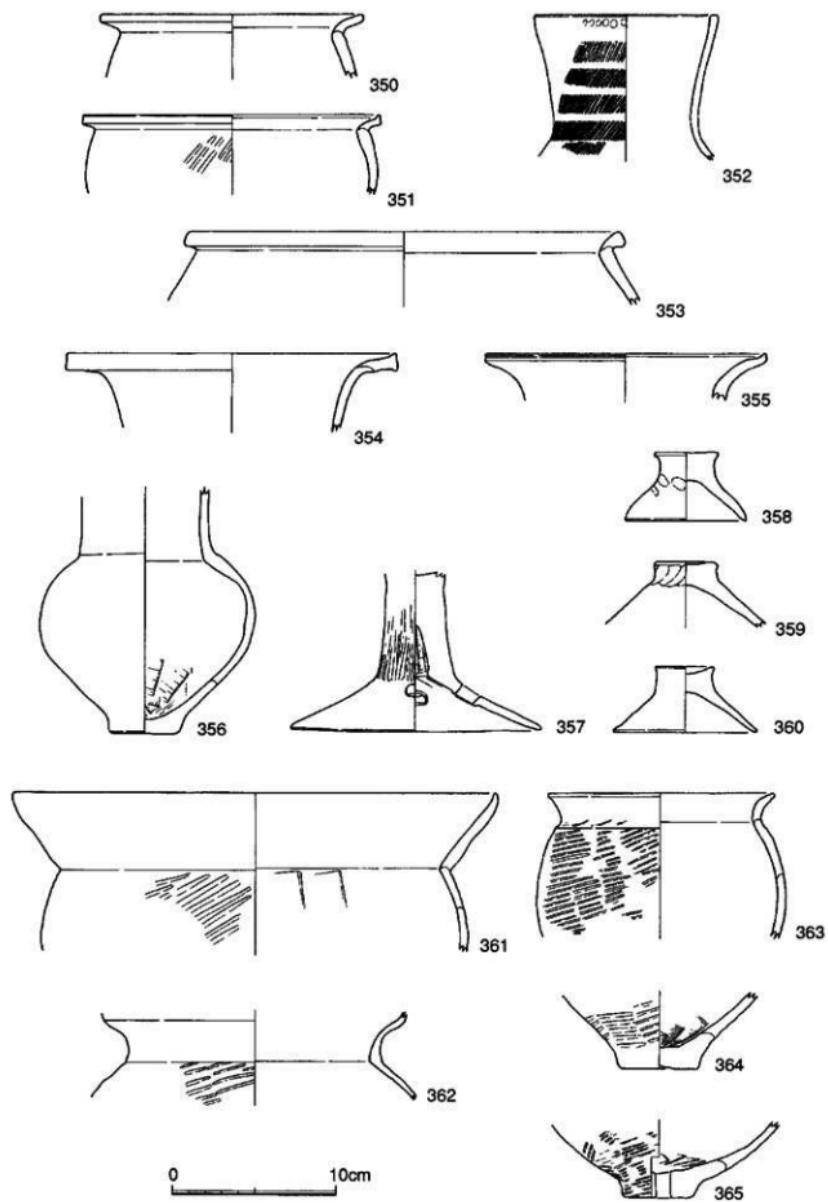
361～364 および 366・368 は V 様式系の壺である。ただし、大型品である 361 は、口縁部の開きが大きく、その端部は直立気味で、さらに胴部の張りが弱そうなことから、弥生後期とみる方がよいかもしれない。

365 は有孔鉢の底部である。弥生後期～庄内式期の内には位置付けられようが、詳細な時期の比定は難しい。

367 は庄内式系壺である。口縁部の小破片であるが、その端部の直立した形状は明瞭に捉えら



第51図 河道2出土遺物(4)



第52図 河道2出土遺物(5)

れる。内外面ともヘラナデ調整がなされている。

369は直口壺である。胴部外面にはタタキ調整のちミガキ調整がなされている。庄内式期に位置付けられよう。

370・371は高杯。前者は楕形の杯部で、内外面に丁寧なミガキ調整が施されている。布留式期に位置付けられる。後者も布留式期の高杯の低脚部とみられる。4方向に大きな透孔を設けている。外面はミガキ調整がなされている。

372・373は布留式系甕である。ともに口縁部内面端の肥厚が明瞭である。また器壁は薄い。

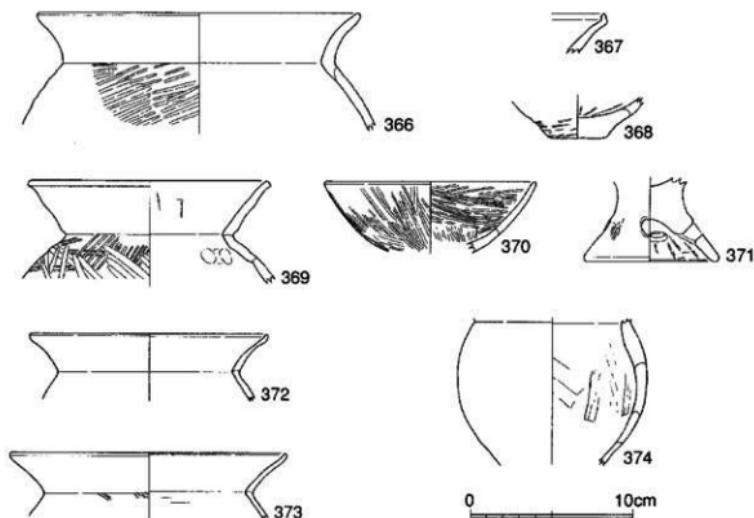
374は布留式期の直口壺の胴部資料とみられる。ただし、胴部径に対して頸部径が広めであること、胴部外面はヘラケズリにより調整がなされていること、2次焼成のため外面が赤化していることから、古墳前期後半の甕の可能性もある。

このように、60～90cmの間から出土した図示資料では、弥生後期としたものと、庄内式期～布留式期のものが合い半ばを占めている。

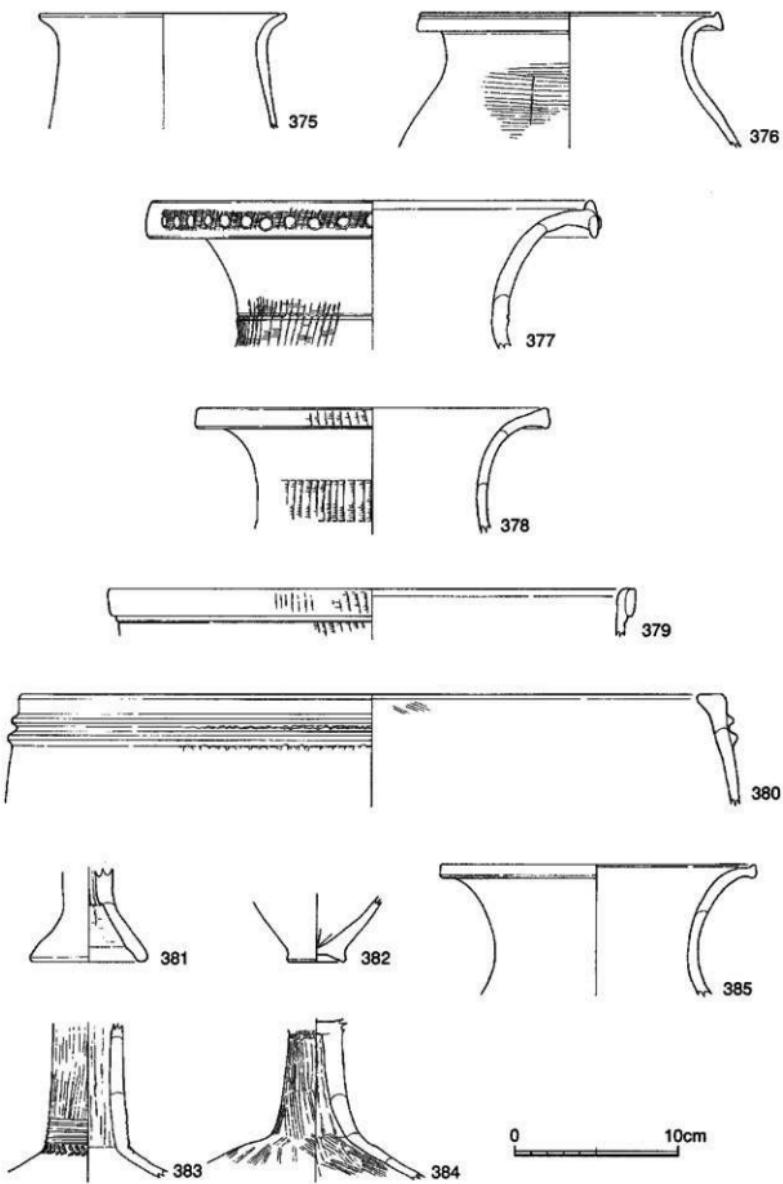
375～400は90～120cmの深さの堆積土から出土したものである。

375は弥生中期前半の甕である。胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部端は丸くおさまる。

376・377・378は弥生中期中葉～後半の甕である。376は櫛描直線文を胴部に施している。口縁部の屈曲は強く、端部は上下に張り出している。377と378は口縁部と頸部に簾状文をそれぞれ施している。377ではそれに加えて、円形浮文が貼付されている。ともに口縁部は大きく外反し、



第53図 河道2出土遺物(6)

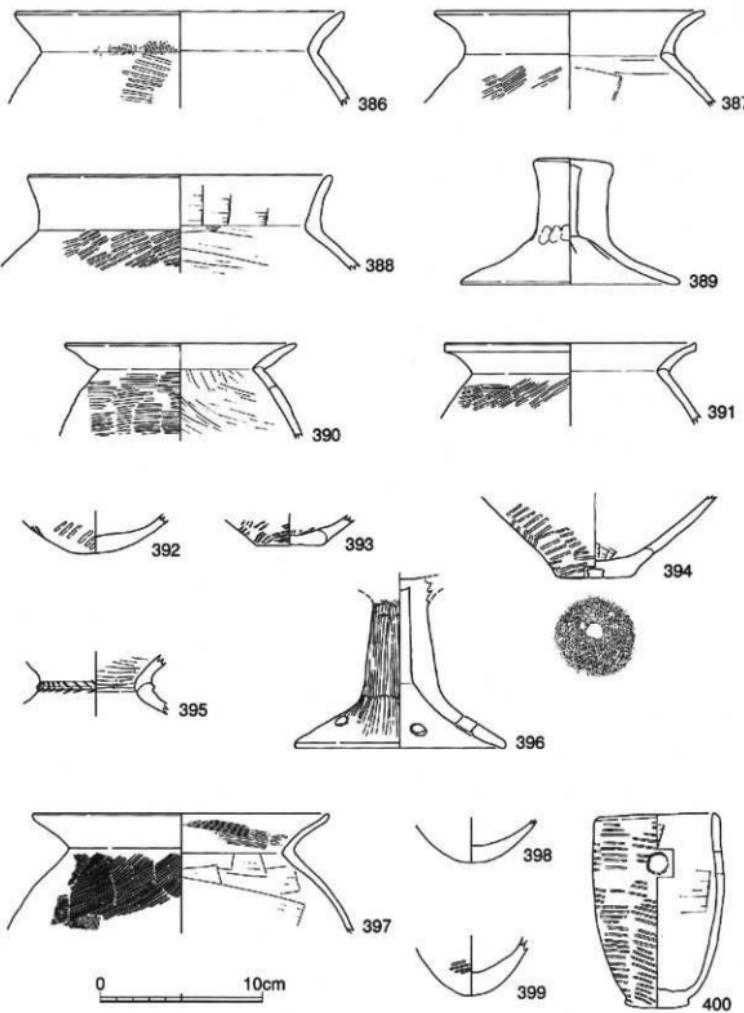


第54図 河道2出土遺物(7)

377の端部は上下に張り出し、378の端部は肥厚する。

379・380は弥生中期後半の鉢である。379は口縁部および胴部に簾状文が施されている。口縁部は粘土帯の貼り付けによる。380は口縁部にかけてやや内傾し、口縁部下に2条の凸帯を巡らせる。口縁部端は内側に肥厚する。

381は台付土器の脚部である。弥生中期後半に位置付けられよう。



第55図 河道2出土遺物(8)

382は鉢の底部である。弥生後期～庄内式期には収まるだろうが、詳細な時期比定はできない。内外面ともヘラナデ調整がなされている。

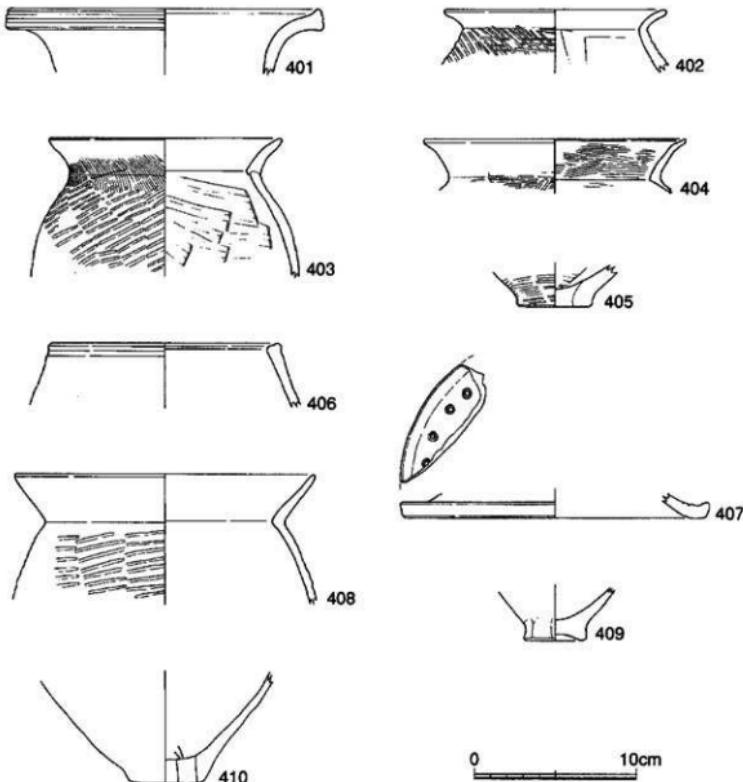
385は広口壺である。口縁部は大きく外反し、端部は直立気味である。弥生後期に位置付けられる。

383・384は高杯の脚部である。383は脚部近くに4条の凹線文と刺突矢羽状文を巡らせている。

384の脚部は、柱状ながら僅かに開き気味である。ともに弥生後期に位置付けられる。

386～388はV様式系壺である。386の胴部外面には右下がりのタタキ調整が認められる。この右下がりタタキ調整がなされたV様式系壺は、03-2区NR001でも認められたが、この河道2や次に述べる河道3においても少量ながら存在している。

389は蓋である。大きさと形状から甕用とみられる。弥生時代のものであろうが、詳細な時期については不明である。



第56図 河道2出土遺物(9)

390・391は庄内式系壺である。390の口縁部端は明瞭に直立しているが、391の端部の立上がりは現状では不明瞭である。

392・393は底部資料であり、丸底あるいは平底に近い形状を呈している。ともに庄内式系壺の底部であろう。394はV様式系壺の底部とみられる。底部中央に、直径0.8cmほどの棒状工具の刺突痕が認められるが、貫通してはいない。未貫通の有孔鉢の可能性もある。

395は、頸部に低凹帯が巡り、その上に欠羽状文が刺突されている壺である。頸部のみの資料であるので時期の詳細も得がたいが、庄内式期あるいは布留式期に位置付けられよう。

396は高杯の脚部である。脚部は柱状であるが、僅かに開き気味である。弥生後期～古墳前期には収まるだろうが、詳細な時期比定はできない。

397は布留式系壺である。口縁部内面端は僅かに肥厚する。胴部外面は細密なタタキおよびハケにより調整されている。398は布留式系壺の底部。緩やかな丸底である。

399・400は飯蛸壺である。399は丸底で、外面にタタキ調整が僅かに残存している。400は全形を捉えることができる。砲弾形を呈し、底部はほぼ平坦である。胴部外面には水平～右下がりのタタキ調整を施している。ともに詳細な時期を求めるることはできない。

このように、90～120cmの間の堆積土から出土した図示資料は弥生中期前半から布留式期まであるが、弥生中・後期としたものと庄内式期～布留式期のものが合い半ばしており、60～90cm間の出土資料に比べると弥生中期のものの比率が若干高まっている。

401～405は120～150cm下の堆積土から出土した資料である。図示できる資料は、深さ120cmを超えると激減する。

401は弥生中期後半の壺である。口縁部端内面が肥厚する。広がった口縁部端の正面に、2条の凹線を巡らせている。

402・403はV様式系壺である。402は右下がりのタタキ調整が施されていて、部分的に水平タタキが重複している。403はタタキ調整前のハケ調整が頸部に明瞭に残っている。405もV様式系壺である。底部は僅かに突出し、底面はほぼ平坦である。

404は庄内式系壺である。タタキ調整の後、頸部以下にハケ調整を加えている。口縁部端は僅かに直立気味であるが、現状では不明瞭となっている。

406～409は150～180cm下の堆積土から出土した資料である。図示した資料はさらに少なくなっている。

406は弥生中期後半の無頸壺である。口縁部の立上がりは低く、頸部に浅い凹線が1条巡っている。407は弥生中期後半の台付土器である。裾の外面に竹管文を巡らせている。胎土・色調から生駒西麓産とみられる。

408はV様式系壺である。胴部外面のタタキ調整は粗い。409は鉢の底部と考えられる。時期の詳細な比定はできない。

410は210～240cmの間の堆積土から出土した資料である。2mを超えた深さの堆積土から出土

した遺物の内、図示し得た資料はその1点だけである。庄内式期の有孔鉢である。摩滅のため外面調整は不明である。このように河道のほぼ底面上においても庄内式期の土器が出土していることから、既述したように埋没時期を庄内式期以降と予測することができる。

また、堆積土との対応関係が明らかな資料も幾つかある。411～416はベルト2出土の資料である。そのうち411～413は22層、414は24層、415・416は27層から出土したものである。したがって、いずれも河道内堆積土の中程に包含されていた資料ということになる。

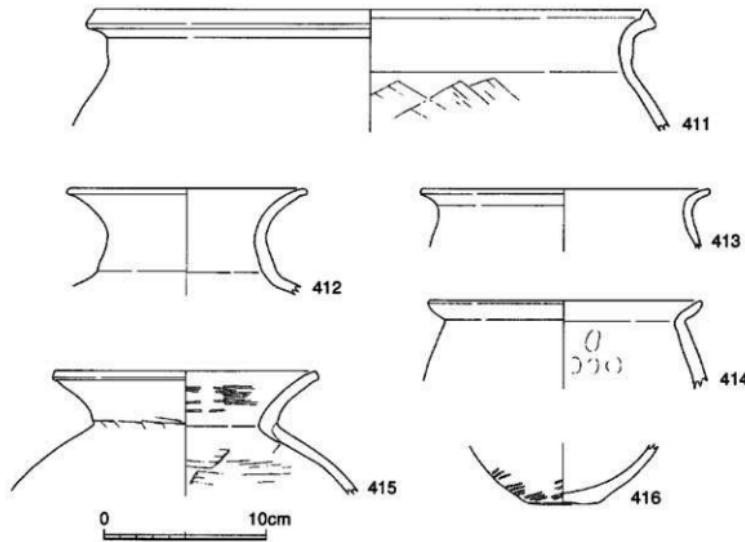
411は弥生中期後半の壺である。口縁部は短く外反し、その端は直立している。口径34.0cmを測る。412は弥生後期の広口壺である。また413は甕である。口縁部は短く、緩やかに外反する。摩滅のため外面調整は不明。布留式期に位置付けられようか。

414は甕である。口縁部は短く外反する。胴部は内外面ともヘラナデ調整がなされている。四ツ池遺跡83地区NY-10(撲口1990:328)に類例があり、弥生後期に位置付けられる。

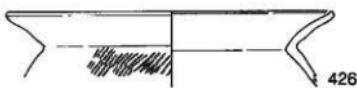
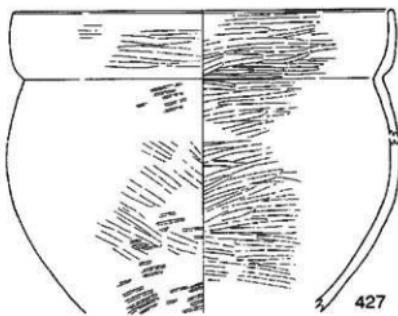
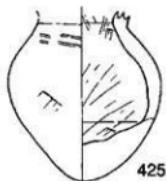
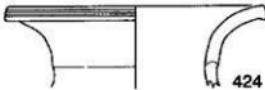
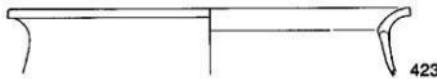
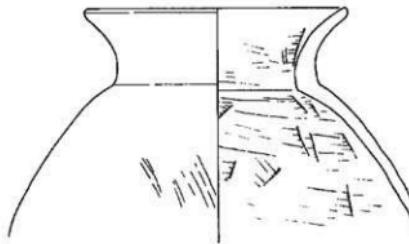
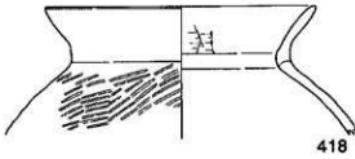
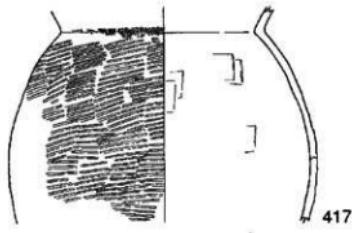
415は広口壺である。口縁部外面はヘラナデ調整、内面はミガキ調整が施されている。なお胴部外面は摩滅のため調整不明。庄内式期に位置付けられよう。416は庄内式系壺の底部である。平坦気味だが、丸底の範疇で捉えられる。外面にはタタキ・ヘラナデ調整が認められる。

以上のようにベルト2においては、堆積土の中層から弥生中期後半の土器と庄内式期の土器とが出土している。

ベルト1から出土した上器のうち図示し得たのは417～424の8点である。そのうち417は23層、418・419・423は35層、420は34層、421は31層、422は37層、そして424は38層からの出土である。



第57図 河道2出土遺物(10)



0 10cm

第58図 河道2出土遺物(11)

よって、いずれも河道内堆積土の上半に包含されていた資料ということになる。

417・418・419はV様式系壺である。417の頸部にはタタキ調整以前のハケ調整が僅かに残っている。418の胴部外面のタタキ調整は粗い。419は底部資料である。突出は僅かであり、底面はほぼ平坦である。

420は布留式系壺の口縁部である。内外面にハケ調整が残り、胴部内面には僅かながらヘラケズリ調整が認められる。

421は直口壺である。口縁部は緩やかに外反している。肩の張りも弱い。庄内式期～布留式期のものである。422は弥生後期とみられる壺の頸部資料である。頸部に凸帯を巡らせており。

423は弥生中期後半の壺である。口径24.6cmを測る広い口縁部は、短く外反する。424は弥生中期後半の壺である。口縁部正面に2条の凹線文を巡らせている。

以上のようにベルト1においては、上半の堆積土から古墳前期の土器だけでなく弥生中期後半の土器も出土している。

次に、出土位置が不明なので、河道内一括として取り上げた資料のうち、3点を図示した。425～427である。425は口縁部を欠いている。胴部の器壁が極めて厚く、作りが粗雑なためいびつになっている。外面はヘラナデ調整がなされているが、当り傷が幾つもついている。弥生後期あるいは庄内式期の壺と考えられる。427は庄内式系壺である。胴部外面のタタキ調整は細密である。口縁部端は僅かながら直立している。427は鉢である。口縁部は内湾気味に立上がるが、開きは小さい。胴部はほぼ球形である。口縁部・胴部ともに内外面いずれもミガキ調整がなされている。庄内式期に位置付けられよう。

河道2出土の土器のなかで、小破片であるため復元実測ができず、拓影で示したものもある。478・479・481・483・486・488・489・490・492・494の10点である。

478・479・481は櫛描直線文を施した壺の破片である。いずれも弥生中期前半に位置付けられよう。478は90～120cm、479は30～60cm、481は0～30cmの深さの堆積土から出土した。

483は櫛描直線文と簾状文が認められる壺の胴部破片である。ベルト2の22層から出土した。弥生中期中葉に位置付けられる。

486は波状文を施した弥生中期後半の壺であろう。90～120cmの深さの堆積土から出土した。488も弥生中期後半の壺の口縁部である。内面に波状文が描かれている。180～210cmの深さの堆積土から出土。

489は櫛描直線文・櫛描波状文・矢羽状刺突文が施された壺の破片である。外面は褐色系の色調を呈し、本遺跡出土の中では類例が少ない。東海西部との関わりが推測される土器である。庄内式期もしくは弥生後期末に位置付けられよう。30～60cmの深さの堆積土から出土。

490は弥生後期の壺の口縁部である。小さめの円形浮文を2段貼付している。河道2からの出土であるが、堆積土との関係は不明。

492・494は庄内式期に比定できる壺の口縁部である。前者は口縁部端近くに円形浮文を貼付、

後者は有段口縁部の下間に竹管文を施している。また492は30~60cm、494は120~150cmの深さの堆積土から出土。

以上が、河道2出土の土器で、実測図や拓影で示し得たものである。それらには弥生中期前半から布留式期のものまでが含まれていた。

先に述べたように、V様式系壺である408が150~180cmの深さから、庄内式期とみられる有孔鉢の410が210~240cmの深さから、そして庄内式期の壺である494が120~150cmの深さからそれぞれ出土している。つまり、下層から出土した土器が必ずしも古いものでないことを示しているといえる。先にグリッドごとの遺物組成をみたが、土器様相のわかる実測図・拓影資料からも追認できよう。

このことは、河道2の埋没が弥生中期から古墳前期までの数百年間に徐々に進行したというのではなく、おそらく庄内式期以降に、それまでの時期の土器を含む上砂が堆積したとみられる。そしてこの河道は、堆積と削り込みを数回繰り返したのち、最終埋没したことが土層断面からもわかる。よって埋没は一時期ではなく、一定の時間幅があったとみられる。つまり、庄内式期から布留式期までを堆積期と想定できよう。

さらにまた、河道内から出土した遺物は、弥生中期のものも含まれてはいるが、弥生後期から布留式期のものが大半を占めている。そのなかでも、V様式系壺を含む庄内式期の土器が最多である。このことは、弥生後期でもその後半期から庄内式期にかけて盛行した集落が、この調査区内あるいはそのごく近くに存在したことを物語っている。むろん、それは布留式期まで存続したとみられる。

#### 河道3(第44~47・59~64・81・82・88図)

04-1区南西隅に位置する自然河道である。東岸の一部を捉えたが、西岸は調査区外のため不明である。ただし、西岸側に広がる標高21.7~21.8mほどのテラス面が東岸とほぼ平行していることから、東岸に平行して西岸も延びていると推測される。

河道の幅は、現状で最大10mである。ただし上述したテラス面の存在を考慮すると、あと1~2m西で立上がりっているのではないかとみられる。

深さは1.2~1.8mであり、北西方向に下降している。また河道2に比べて浅い。底面には多少の起伏はあるが、河道2よりは比較的平坦である。

堆積土はシルト系を基調としながらも、中央付近に砂層が集中している。ベルト1をみると、灰色粘シルトを境として、シルト・粘土系が主体のそれ以上の層と、それよりも下の砂を混在した層に大別できる。さらに下の層を上下に分け、中央部分に砂層が集中する8~13・15層と、底面上に砂層が広がる14・16~20層とに2分できるかもしれない。

また下位の砂層である17・18層には礫が多包されているが、中位の砂層である8・10・11層では礫の包含は目立たない。

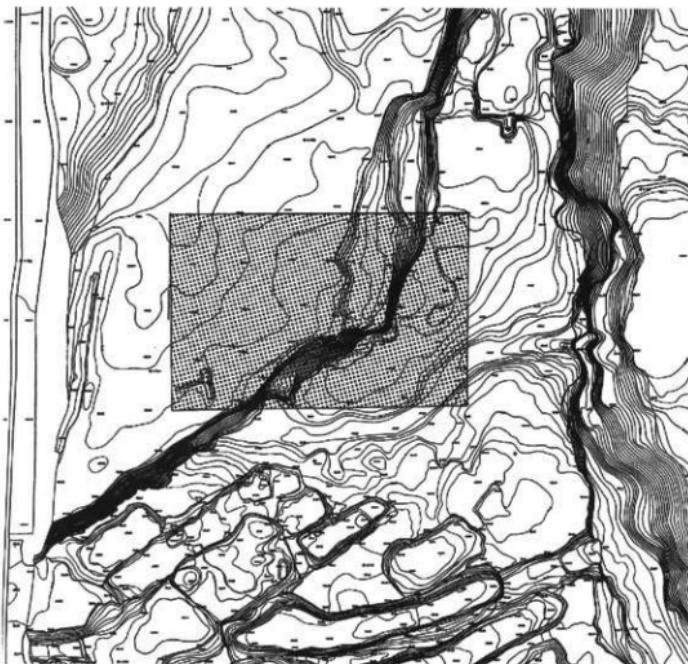
西トレンドをみると、ベルト1と同じく、堆積土の中程に砂層が認められる。この状況に基づ

くと、砂シルトからなる6・7・8・26・27、砂と砂シルトからなる8・9・10・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25、そして粘土・粘シルトが主体をなす3・4・5・11・12・13・14・15に範囲を分けることができる。なお15層は砂層である。

このようにベルト1、西トレントとも堆積土の観察からは、西岸下に広がるテラス面が早い段階で埋まつたこと、下層と中層に砂層を含むことが判明する。

ところが河道2では砾を多包した砂層が上半を覆い、NR001では上表の一部を除いて砂あるいは砾混じりの砂が全体に堆積していた。このことを考え合わせると、河道2の下半が埋没した時点で、NR001や河道3の埋没が始まり、河道3が完全に埋まつたのはNR001より遅れたとみられる。このことは、調査区内だけの状況に留まらず、周辺においても下流側および西側ほど河道内の埋没は遅れるのであろう。

ところで、検出した東岸の南端より北へ7mほどのところで、岸壁および河道底に打設された木杭を検出した。打設位置を捉えたものは15本、位置不明のもの1本の計16本を数える。杭3～7・15の6本は岸壁下縁に沿つて打たれた状態の木杭、杭1・2・8～14は河道底面に打たれたものであり、約1.5mの距離を開けてそれぞれが群をなしていた。杭1と杭2は河道東岸下縁にはば沿つて南



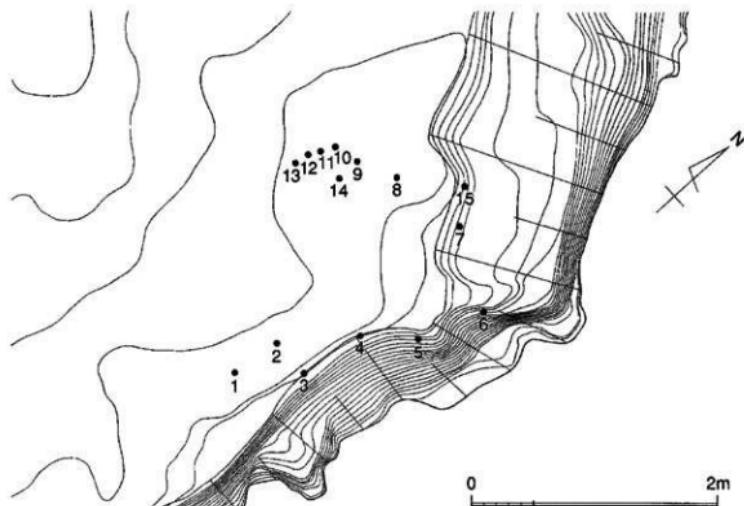
第59図 木杭検出の範囲

北に延びているのに対し、杭8～13は岸壁下縁に直交する方向で延びている。

杭は現存長でおよそ60cm近い差がある。大半を欠損して、一括で取り上げた杭16を除くと最短が杭9の27.8cm、最長は杭8の84.1cmである。ところが検出した杭の上端高をみると、杭1・2・4間では10cm、杭3～7・15間では40cm、そして杭8～14では19cmほどの標高差である。杭8を除くといずれも端部が破損しているので、検出上端の標高値も後世の影響によって低くなっているには違いないが、しかし杭1・2・4や杭8～14での近似する値をみると、杭端の高さがある程度揃えられていた可能性がある。

この杭列が検出された範囲より東方、すなわち杭3より1.1m南東の位置から、10～30cmほどの浅い溝状の落込みが、緩やかな弧状を描きながら岸上を延び、河道2へつながっていく。位置的状況からすると、杭群と有機的な関係があったことは間違いない。杭群で構成された堰によってかき上げられた水を、この溝状の落込みを通じて河道2に流し込んだのであろう。河道3の深さは1.2～1.8mほどであることから、堰による水の制御は比較的容易であったろう。

河道2と河道3は04-1区の北西辺の少し先で合流し、NR001となっているとみられる。したがってこの位置で河道3から河道2へと導水する目的を考えると、ひとつの可能性として、河道2・3の合流地点から北西方向に延びる水路が存在していて、それが周囲の生産域に供水をしていたが、河道2の埋没が進んだことによりそれが難しくなったので、河道3から本来の流路である河道2へ改めて導水することで供水を継続したとは考えられないだろうか。先述したように、堆積土の状況から河道2の埋没が河道3より先行したとみられる点とも符合する。この推測が当を得ていると



第60図 木杭検出の状況



第61図 河道2・3と溝状落込み

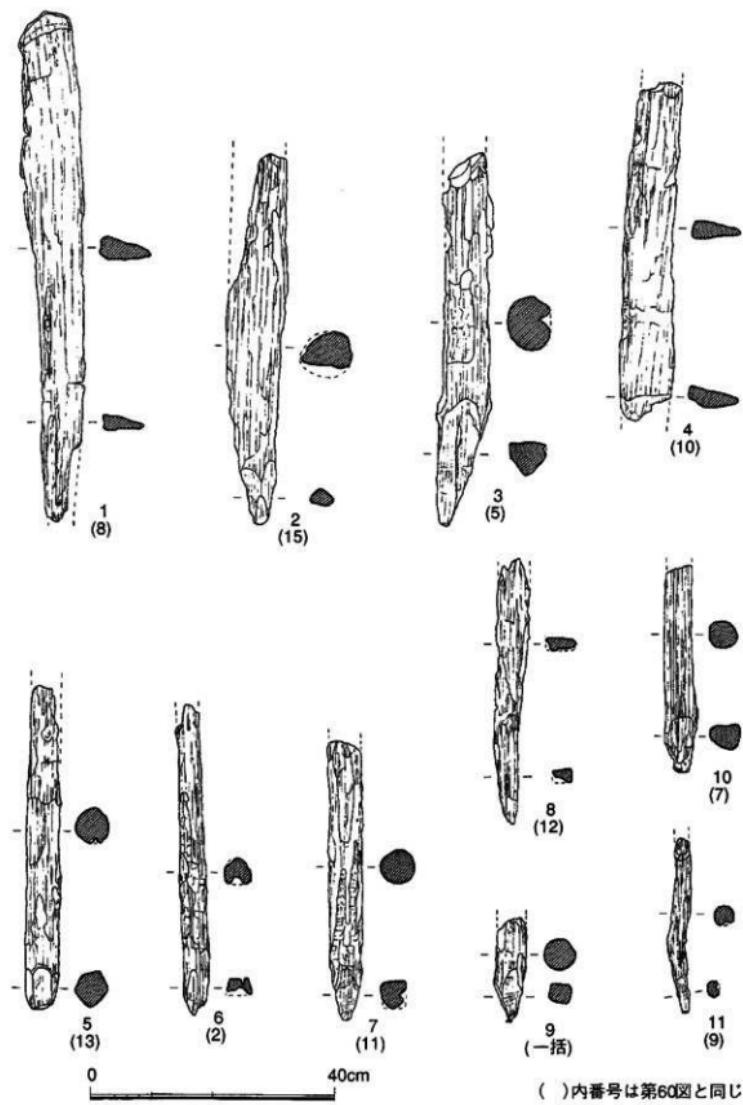
すれば、河道2およびNR001は弥生後期から古墳前期にかけてこの周辺の生産域を潤す幹線水路としての機能を果たしていたことになる。

検出された16本の杭のうち、10本を図示し得た。杭5は現長61.7cmであるが、長径は8.7cmで他の杭よりも太く、また先端の削り込みも約21cmと長い。杭8は現存長が最も長い。先端を若干欠損しているが、頭端部は遺存していて、全形がほぼ捉えられる。頭端部は緩い弧状を呈していて、敲打による潰れが認められる。または断面は長三角形を呈していて、ミカン削材を用いた杭である。同様にミカン削材を用いたものとしては杭10がある。太さのある杭5・8・10・15を主杭として、堰を構築したのであろう。

河道3から出土した遺物は660点、10240gを数える。そのうち河道2と同様に、地区割りに従つて第V区画(5m単位)のグリッドごとに、そして遺構検出面(標高約22.2m)から30cmの深さごとに取り上げた遺物は527点・8510gであり、これをもとに河道3の出土遺物の傾向と埋没時期を考えたい。

527点・8510gの遺物の全体的な状況をみると、弥生中期中葉3点・320g(0.6%・3.8%)、中期後半3点・270g(0.6%・3.2%)、後期6点・355g(1.1%・4.2%)、弥生土器一括16点・140g(3.0%・1.6%)を数え、弥生中～後期の土器は点数比で5.3%、重量比で12.8%にすぎない。

これに対して庄内式期になると出土土器は急増する。庄内式期と捉えられた土器は113点・3415g(21.4%・40.1%)を数える。さらに布留式期の土器は10点・375g(1.9%・4.4%)、庄内～布留式期のものは2点・110g(0.4%・1.3%)であり、庄内・布留式期を合わせると125点・3900g



( )内番号は第60図と同じ

第62図 河道3検出木坑

(23.7%・45.8%)となる。なお弥生～古墳時代の土器としか捉えられないものが372点・3460g(70.6%・40.73%)あるが、これを除外してみると、弥生～古墳時代の土器の中で庄内・布留式期のものが占める割合は、点数比で81.7%、重量比で78.2%となり、この河道3から出土した土器のほとんどは庄内・布留式期のものといえる。

一方、古代以降や土師器や瓦器、陶器、磁器はこの河道3では検出されていない。サヌカイト片1点・45gと土錐1点・20gが、弥生～古墳時代の土器以外のものである。

グリッドにとらわれず層位に従ってみると、弥生中期中葉の上器は、60～90cm間では認められないものの、0～120cmの間にはほぼ分散しているといえる。弥生中期後半の土器は0～60cm間に分布が留まる。そして弥生後期の土器は、0～90cm間に分布されているが、より下層には分布を示さない。

これらに対して、庄内式期の土器としたV様式系甕は150～180cm間に22点・445g包含され、また布留式系甕も同レベルから2点・40gが出土した。なおこれらの土器のうちV様式系甕1点・40gはI・IIIグリッドからであるが、残りのV様式系甕21点・405gと布留式系2点・40gはe5・IVグリッドからの出土で、まとまりがある。

こうした最下層の土器の時期や点数などからすると、この河道における底面直上の埋没時期は、河道2と同じく、庄内式期以降と予測できる。さらに、河道2では底面直上層においては布留式

	弥生 中期 前半	弥生 中期 中葉	弥生 中期 後半	弥生 一括	庄内	庄内 ～ 布留	弥生 ～ 古墳	須恵 器	古代 上部 器	灰釉 陶器	陶器	磁器	その他
0～30cm	点数	0	1	2	1	12	55	1	8	286	0	0	0
	重量	0	235	265	125	80	1945	50	325	1990	0	0	0
30～60cm	点数	0	1	1	3	3	24	1	9	45	0	0	0
	重量	0	35	5	135	50	690	60	0	785	0	0	0
60～90cm	点数	0	0	0	2	0	11	0	0	19	0	0	0
	重量	0	0	0	0	95	0	325	0	0	400	0	0
90～120cm	点数	0	1	0	0	0	1	0	0	6	0	0	0
	重量	0	30	0	0	0	10	0	0	185	0	0	0
120～150cm	点数	0	0	0	0	1	0	0	4	0	0	0	0
	重量	0	0	0	0	10	0	0	65	0	0	0	0
150～180cm	点数	0	0	0	0	22	0	2	12	0	0	0	0
	重量	0	0	0	0	445	0	40	35	0	0	0	0

	弥生後期			弥生一括			庄内 ～ 布留		布留			弥生～古墳							
	壺	高杯	有孔 鉢	壺	甕	蓋	V様 式系 甕	庄内 式系 甕	壺	鉢	布留 式系 甕	甕	器台	壺	鉢	器種 不明			
0～30cm	点数	1	0	0	0	12	0	54	1	0	1	5	3	0	1	33	1	3	248
	重量	125	0	0	0	80	0	1895	50	0	50	215	120	0	40	170	15	295	1470
30～60cm	点数	3	0	0	1	2	0	23	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	43
	重量	135	0	0	40	10	0	660	30	60	0	0	0	0	45	0	30	0	710
60～90cm	点数	0	2	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	17
	重量	0	95	0	0	0	0	325	0	0	0	0	0	0	105	5	0	0	290
90～120cm	点数	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5
	重量	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	130
120～150cm	点数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	重量	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65
150～180cm	点数	0	0	0	0	0	0	22	0	0	0	2	6	0	0	0	0	0	12
	重量	0	0	0	0	0	0	445	0	0	0	40	0	0	0	0	0	0	35

第3表 河道3出土遺物組成

期の土器が認められなかつたのに対し、この河道 3 では僅か 2 点・40g ではあるが布留式期の土器が存在している。このことからすると、河道 2 よりも埋没時期が後出する可能性が高い。

また、いずれの時期の土器にあっても、その量が多くなるのは 90 cm 以上の堆積層からであり、この 0~90 cm 間では各時期の土器が混在している状況にある。

庄内式期の上器はこのように河道の深い位置からの出土もあるが、150~180 cm 間では 38 点・690g を数え、これより上層での出土数が多い。

なお庄内式期の土器とした 113 点・3415g は、V 様式系壺(111 点・3335g)と庄内式系壺(2 点・80g)であり、胴部外面タタキ調整の V 様式系壺とした土器が河道 3 内全体に包含されているのである。また布留式期の土器には布留式系壺と壺があるが、2 器種の中では前者が点数比で 70%、重量比で 68% を占めている。

この河道 3 は、布留式期になって堆積が始まり、周辺堆積土や遺構内覆土に包含されていた弥生中期前半以降の土器を混入しながら埋没したと考えられる。

出土遺物 660 点のうち、22 点の実測図と 5 点の拓影を掲載した。

428~437 は 0~30cm の深さの堆積土から出土した。428 は弥生中期中葉の壺である。受口状口縁部をなしている。器面調整については、摩滅のため内外面とも不明である。429 は、弥生後期の長頸壺である。口縁部は外反する。口縁部下半から頸部にかけての外面にはミガキ調整が施されている。

430 は、脚部上縁の太さから、弥生中期後半の台付上器と考えられる。脚部外面にはミガキ調整が施され、裾部近くには円孔が穿たれている。

431・432・433 は V 様式系壺である。431 は、口縁部端に刻目が施されている。また外面は、摩滅しているためタタキ調整が不鮮明である。432 は脚部に比して、口縁部が短い。口縁部端下に強いユビナデ調整を施しているため、端部が肥厚しているように見える。脚部の球形化は顕著である。433 は口径 14.2 cm を測る小型壺である。口縁部外面と脚部内面にはハケ調整、脚部外面には水平方向のタタキ調整が認められる。脚部外面に煤が付着している。

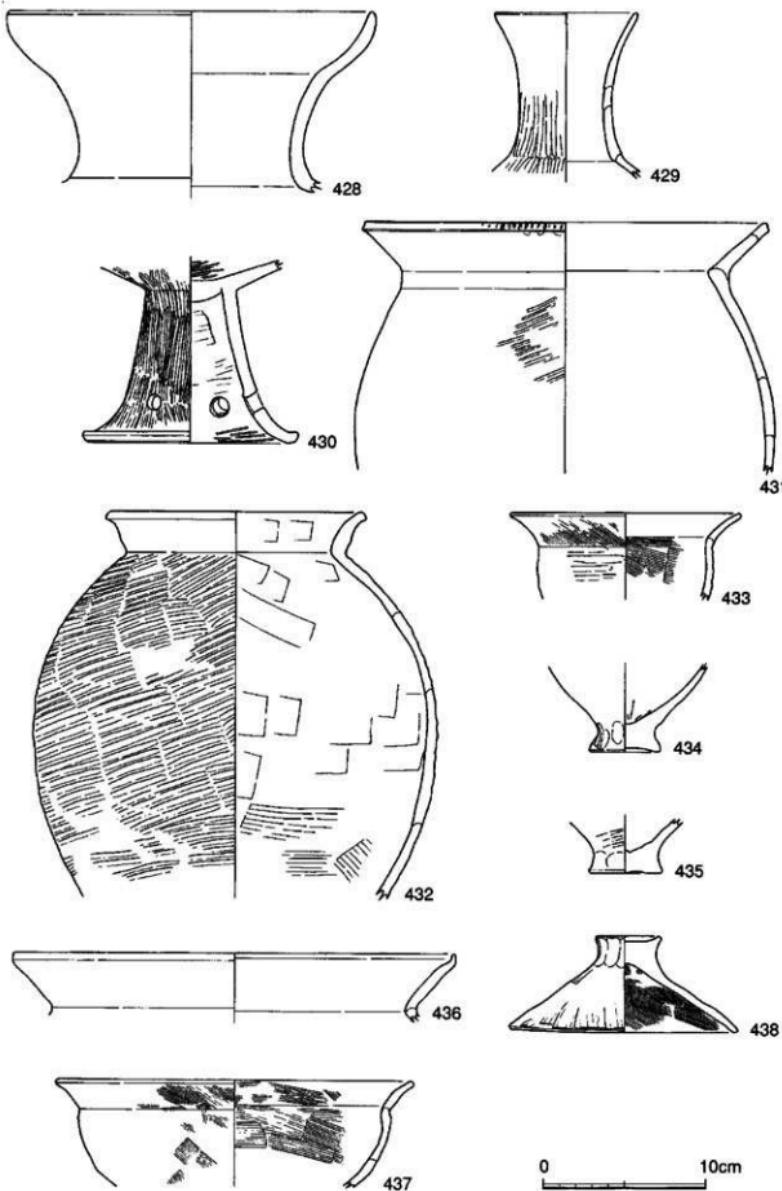
434・435 は弥生後期あるいは庄内式期の鉢の底部である。434 の外面にはヘラナデ調整が、435 ではタタキ調整が施されている。ただし、435 は弥生後期の壺の底部である可能性もある。

436 は庄内式系壺の口縁部である。内外面にヘラナデ調整がなされている。口縁部端の直立は明瞭である。

437 は鉢である。口縁部は「く」字状に屈曲し、下部に一稜をなす。口縁部および脚部の内外面ともハケ調整が施されている。布留式期に位置付けられよう。

438 は蓋である。大きさからすると、壺用であろう。弥生時代のものであろうが、詳細な時期比定はできない。

この 0~30cm の深さからは弥生中期中葉から布留式期までの土器が出上した。そのなかでも V 様式系壺の多さに対応して、庄内式期のものが多いことになる。



第63図 河道3出土遺物(1)

439～446は30～60cmの深さから出土した土器である。0～30cm間と比べると、点数が若干少なくななり、破片化も進んでいる。

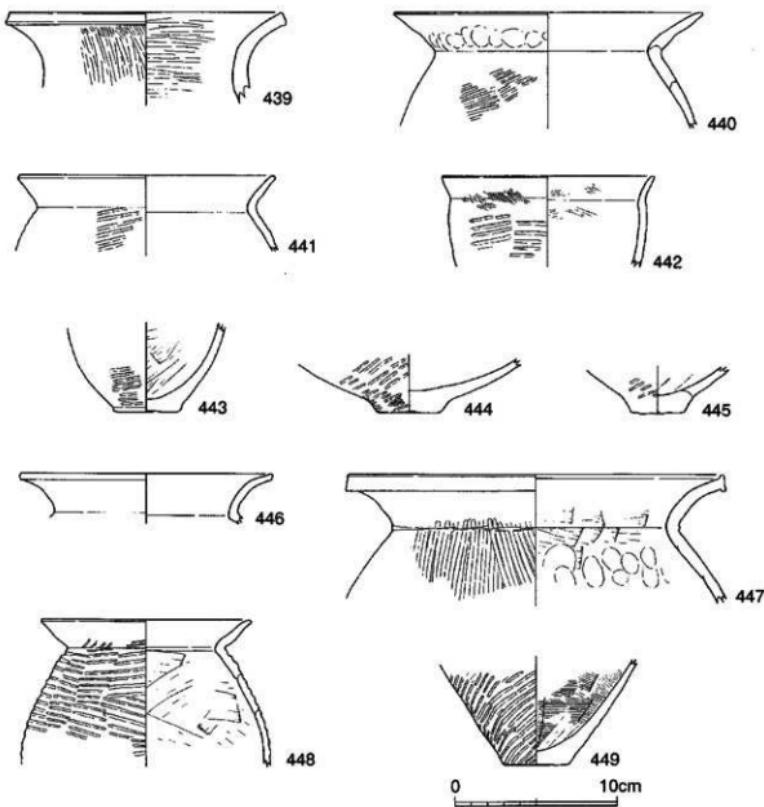
439は弥生後期の広口壺である。口縁部端は上下に僅かに張り出している。内外面ともユビナデ・ミガキ調整がなされている。

440～445はV様式系壺である。440や441の「く」字状に外反する口縁部に対して、442の口縁部の外反度は弱い。頸部にハケ調整を残している。

443は小型壺の胴部と考えられる。底径に比して胴部の張りに乏しい。

446は庄内式系壺の口縁部である。口縁部内外面ともヘラナデ調整がなされて、端部は僅かながら直立している。

このように30～60cm間から出土した土器には弥生後期～庄内式期のものがあるが、0～30cm間



第64図 河道3出土遺物(2)

と同様にV様式系壺が大半を占めているため、庄内式期のものが多いことになる。

60~90 cmの深さから出土したもののうち、図示し得た土器は447の1点だけである。弥生後期の広口壺で、「く」字状に外反する口縁部の端部は上下に張り出している。胸部外面には丁寧なミガキ調整がなされている。

448と449は堆積土の層位と出土位置の関係が明確なものである。前者は西トレンチの25層から出土したV様式系壺である。胸部中央に右下がりのタタキ調整が認められる。449はベルト1の11層から出土した、やはりV様式系壺である。底面は平坦で、底部から胸部へは直線的に外反している。

小破片のため拓本の掲載に留めたものとしては482・484・485・487・493の5点がある。482は壺の有段口縁部で、口縁部上半に波状文を施している。弥生中期中葉に位置付けられよう。484は壺の胸部とみられるが、水差の可能性もある。簾状文と櫛齒刺突文が施されている。

485は高杯の杯部である。僅かに内湾しているようである。外面に現状5条の凹線文が認められる。弥生中期後半に位置付けられよう。

487は壺の胸部であろう。櫛描直線文と波状文が認められる。弥生後期に位置付けられ、また東海西部との関係が推測される。

493は有段口縁壺の口縁部である。2段にわたって大きめの円形浮文が貼付されている。庄内式期に比定できよう。

以上みたように、図示できる土器を取り上げても、この河道3が大まかには古墳前期に埋没したことは明確である。この点は、隣接する河道2やNR001ともほぼ共通している。

#### 075 壊穴状遺構(第44・65~67・88図)

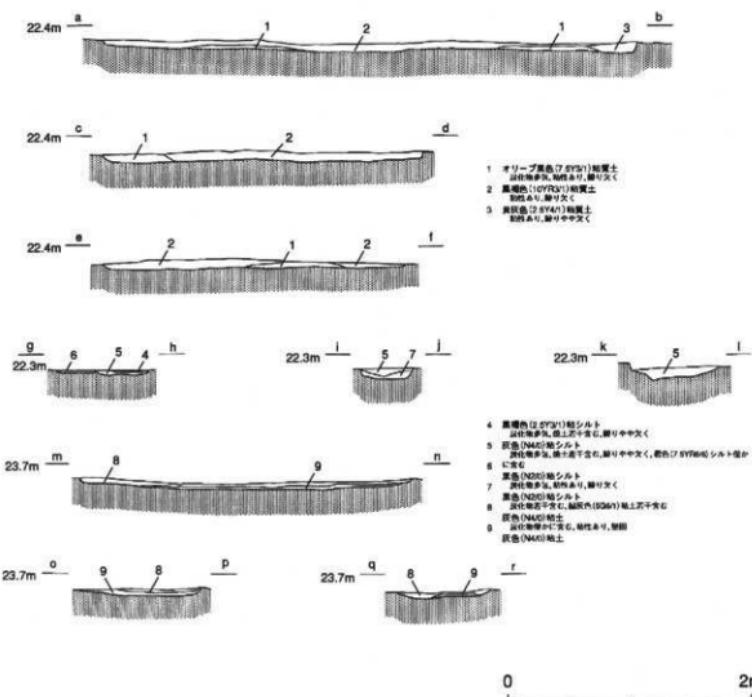
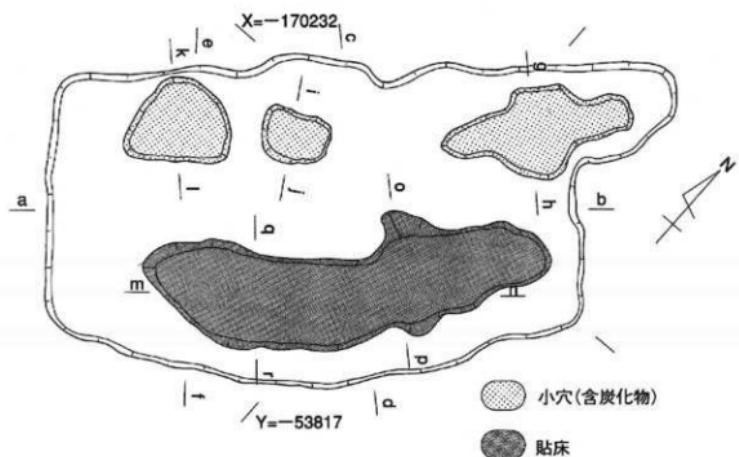
04-1区の中央やや北東寄りで検出された。この075壊穴状遺構、およびその北東に位置する030上坑が、遺構内堆積土の状況や出土遺物から、古墳前期のものとみられる。

075壊穴状遺構は長辺2.2m、短辺1.35mほどの長方形を呈し、北西隅に北東-南西40cm、北西-南東40cmほどの半円形の張り出し部分が付属している。遺構の南東辺は緩やかに弧状に張り出しているが、その他の3辺は直線的である。

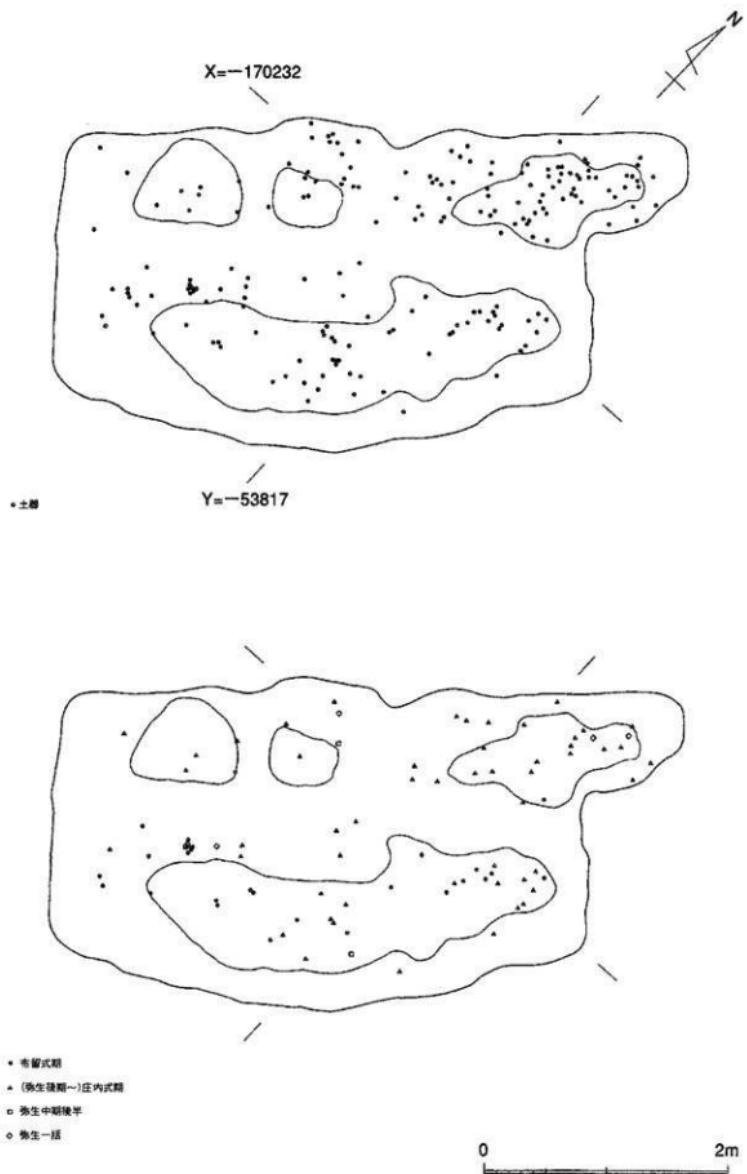
後世の削平のため、4~5cmという極めて浅い掘方しか残存していない。この掘方の北西辺に沿って3基の小穴が並列している。大きさは、北寄りのものは44×34cm、中央のものが28×20cm、南寄りのものが80×38cmで、いずれも遺構全体の主軸方向に長くなる。

この浅い小穴には、共通して炭化物を含み、北東寄りの小穴では焼土も認められる。したがってこれら3基の小穴は炉であった可能性が高い。ただし炭化物や焼土が存在するとはいえ、小穴底は赤色硬化していない。被熱していても、それほど高温ではなかったのであろう。

なお小穴と全体の掘方の堀体までの距離は、北小穴で6cm、中央小穴で18cm、南小穴が最も短くて2cmほどである。また北小穴の大きさや形状に応じて、上述したように掘方の北西隅が張り出していると見受けられ、小穴の存在が遺構全体の形状を規定したと考えられる。



第65図 075堅穴状遺構



第66図 075堅穴状遺構の遺物出土状況

一方、小穴列の南東では、長さ 160 cm、幅 40 cm ほどにわたって灰色粘土が貼られていた。この貼床のための掘方は、深さが 2 cm 程度と極めて浅い。粘性の強い粘土を用いているため、貼床部分は堅固になっている。この粘土貼り以外は、基盤層面をそのまま床面としている。

柱穴の存在は認められなかった。

出土遺物は 350 点、3090g を数える。全て土器である。点数の 3 分の 2 は弥生時代か古墳時代かの帰属時期が不明で、さらに器種もわからない小破片（1 点当たり 5.9g）である。これを除くと、胸部にタタキ調整が施された V 様式系とみられる壺の胴部破片 38 点・650g（全体の 10.9%・21.0%）、布留式系壺 37 点・335g（10.6%・10.8%）、庄内式系壺 12 点・225g（3.4%・7.3%）が高率を占めている。

弥生中期後半の土器は、4 点・95g（1.2%・3.1%）、弥生後期では 4 点・75g（1.2%・2.5%）、庄内式期では、V 様式系壺の多さを反映して、51 点・885g（14.6%・28.6%）、庄内～布留式期のものは 3 点・30g（0.9%・1.0%）、布留式期のものは 39 点・360g（11.2%・11.6%）であり、時期比定できるものの中では庄内式期と布留式期の土器が大半を占めることになる。

このうち出土状況を明示できるものは 189 点である。小破片のものが大半であり、面積で 2~12 cm<sup>2</sup>、重量では 5~15g のものが主流である。大きくても、復元実測ができた 452 の 195 cm<sup>2</sup>・135g や 450 の 120 cm<sup>2</sup>・70g が挙がる程度である。このことは、出土状況のわかる 189 点を含む 350 点の大半が、この遺構の廃絶後に 2 次的に流入したものである可能性を示している。

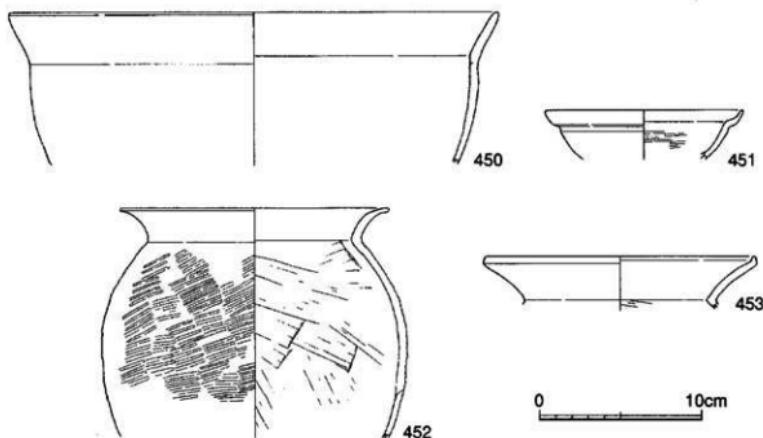
出土土器のうち時期比定をできたものは 87 点・1335g である。そのうちタタキ調整の認められる V 様式系壺の破片は 36 点・630g で時期比定できたものの中では 41.4%・47.2% を占める。次いで布留式系壺が 27 点・260g（31.0%・19.5%）、庄内式系壺が 11 点・220g（12.6%・16.5%）となる。

そして布留式期以降の土器を含まないことから、布留式期にこの 075 穫穴状遺構が廃絶したとみることができる。また、この遺構の機能時期については、直接的にそれを示す遺物はないが、遺構の継続時間を考慮し、庄内式期に求められるのではなかろうか。

なお上器の分布は、北小穴付近でやや多いものの、とくに集中する部分ではなく、遺構内全体に分散している。

	弥生中期後半			弥生後期			庄内			布留			弥生・括			弥生～古墳			
	壺	蓋	鉢	壺	蓋	高杯	V 様式系壺	庄内式系壺	壺	高杯	鉢	布留式系壺	蓋	壺	鉢	壺	高杯	器種不明	
ドット取上	点数	2	1	1	2	2	36	11	0	1	2	27	2	1	2	1	0	1	97
上げ	重量	20	5	70	45	30	630	220	0	15	15	260	25	10	85	70	0	60	995
一括取上げ	点数	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	10	0	0	0	0	11	0	136
	重量	0	0	0	0	0	20	5	10	0	0	75	0	0	0	0	40	0	385
総計	点数	2	1	1	2	2	38	12	1	1	2	37	2	1	2	1	11	1	233
	重量	20	5	70	45	30	650	225	10	15	15	335	25	10	85	70	40	60	1380

第 4 表 075 穫穴状遺構の出土遺物組成



第67図 075竪穴状遺構出土遺物

復元実測により図示できたものは4点、拓影のみ示したものは2点である。450は弥生中期後半の鉢である。口縁部は直線的に外傾し、胴部は丸味に乏しい。摩滅のため内外面の調整は不明である。451は庄内式期～布留式期の小型鉢である。口縁部は内湾して立上がる。胴部は浅めで、内面にミガキ調整がなされている。452はV様式系甕である。口縁部は外反して短く立上がる。胴部の球形度は高い。453は庄内式系甕の口縁部である。口縁部端は明瞭に直立する。

拓影で示したのは491と495である。491は有段口縁壺の口縁部で、大きい円形浮文が貼付されている。庄内式期に位置付けられよう。495は胴部外面に細密なタタキ調整が施されていて、庄内式系甕とみられる。

図示できなかったものも含め、最も遡るのは弥生中期後半の土器であるが、上述のように最も多いのは庄内式期のものである。こうした遺物の時期傾向は、先にみた河道2・3と一致する。確実に遺構にともなう遺物は明らかではないが、そうした遺物の状況から、河道3が完全には埋没していないかった頃にこの075竪穴状遺構も機能していた公算が高い。

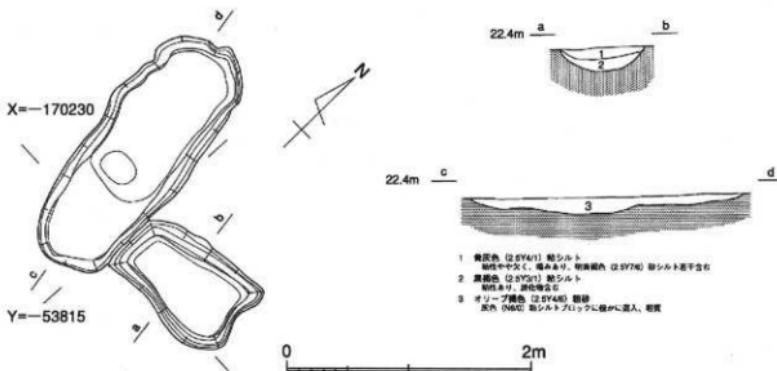
なお3基の小穴内の堆積土を水洗し、微細遺物の抽出に努めた。しかし木炭片以外は検出されなかった。この遺構の性格については後に改めて考えたい。

#### 030上坑(第44・68図)

030土坑は、075竪穴状遺構の北東約0.4mほどに位置する。主軸を南北にとる掘方と東西にとる掘方が上辺で接しているが、切合い関係はない。したがってひとつの土坑として扱った。

西方の掘方は長軸を南北にとり、長軸2.2m、短軸0.85mを測る。深さは最大14cmほどである。堆積土はオーリーブ褐色粗砂の単一層である。

東方の掘方は長軸を東西にとり、長軸1.18m、短軸0.74mを測る。深さは20cmほどである。



第68図 030土坑

堆積土は上層の黄灰色粘シルトと下層の黒褐色粘シルトからなる。下層土には炭化物が含まれ、075堅穴状遺構の堆積土と類似している。

炭化物を含む黒褐色土が遺構内堆積土の一部であることから、本遺構も075堅穴状遺構と同時期と推測されるが、西の掘方は堆積土上異なるので後出する可能性もある。

なお出土遺物は西の掘方から出土した瓦1点・240gだけである。ただし、上面からの出土であり、遺構に伴うかは不明確である。

#### 080溝(第44~46・69・70・81・82・87図)

04-1区のほぼ中央に位置する。緩やかに西方に湾曲しながら北に延びる溝である。当初は本遺構を自然流路とみていたが、既述した03-1区のSD006につながるとみられ、70m以上にわたって直線的に延びることから人工的な溝と考えた。

南端は一部が河道2に僅かに接するが、基本的には重複することなく立上がりっている。ただしこの切合い関係のないことは、河道2の埋没前にこの溝が掘削されたことを示すものではない。

幅は1~2mの間にあるが、ほぼ1.5m前後である。04-1区での検出長は16mほどで、深さは約70cmである。03-1区のSD006に比べると1m前後幅狭である。堆積土は上層の灰白色砂質土と下層の明褐色粗砂に2分される。礫の混入はほとんど認められない。

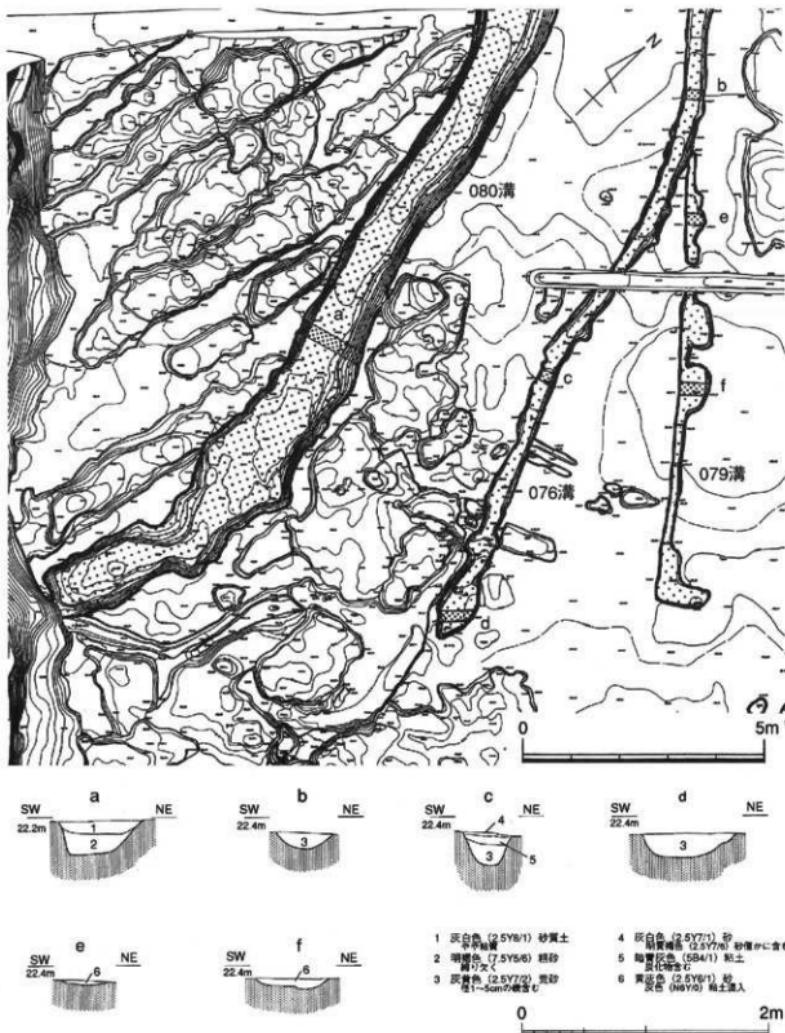
また調査区北西の西トレンチをみると、8つの土層に分かれるが、壁際の105・107層以外は砂であり、砂が堆積土の主体を占めている点はベルトaの状況と同じである。なお105・107層はともに崩落した壁体の再堆積土の可能性も考えられる。

本溝からは652点・5490g点の土器とサヌカイト1点・10gが出土した。土器1点当りの平均重量が8.4gであり、このことからわかるように大半が小破片である。

土器は弥生中期前半～布留式期のものであり、古代以降のものは含まれていなかった。その大半が弥生時代か古墳時代かの帰属が不明な土器であるが、庄内式期に比定できるものが61点・

1290g(全体の9.4%・23.5%)と割合に高い率を占めている。この庄内式期と捉えたものの中でも、V様式系壺としたものが57点・885g(庄内式期の93%・68.6%)であり、このV様式系壺とした胴部にタタキ調整の施された壺の破片の多さに影響されているといえる。

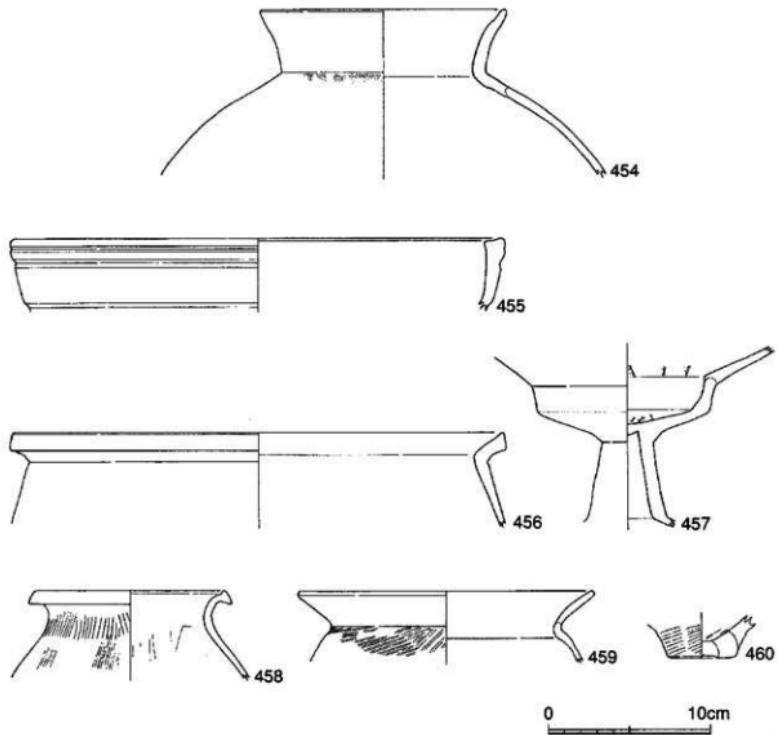
ところが後述するように、こうした土器の時期や消長傾向が、この構造の時期を決定するので



第69図 080-076-079溝

時期・系統	弥生 中期 前半	弥生中期後半				弥生 後期		弥生一括				庄内		庄内 ～ 布留	弥生 ～ 古墳			その 他の 数						
		直	卷	壺	高杯	台付 土器	水差	直	卷	壺	高杯	台付 土器	V 縦 式 巻	庄内 式 直	高杯	直	壺	高杯	器種 不明					
器種	直	卷	壺	高杯	台付 土器	水差	直	卷	壺	高杯	台付 土器	V 縦 式 巻	庄内 式 直	高杯	直	壺	高杯	器種 不明	サツ カイ ト					
0~30cm	点数	3	0	2	0	1	1	0	2	1	1	3	4	1	26	3	1	6	40	6	356			
	重量	115	0	39	9	45	25	0	20	10	80	39	200	56	965	30	376	2	9	492	1			
30~60cm	点数	0	1	4	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	15	0	0	180	90	125	196	80	1925	
	重量	0	5	110	45	0	0	35	20	9	0	0	0	0	185	0	0	0	10	2225	10	0	0	0
一括	点数	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	重量	0	0	15	9	9	0	0	75	9	0	0	0	0	195	0	0	0	0	0	0	0	0	236

第5表 080溝出土遺物組成



第70図 080溝出土遺物

はない。この 080 溝は、造構の重複関係から近代に埋没したと考えられるのである。したがって 652 点の土器片はすべて周辺の堆積土内に包含されていたものが混入したといえ、このことは土器 1 点当たりの重量の低さから推測できる上器片の小ささからも窺える。

出土した土器のうち、7 点を復元実測により図示し、1 点を拓影で示した。

454 は直口壺である。口縁部は短く、外傾度も弱い。頸部近くの胴部外面にハケ調整の痕跡を残すが、胴部全体の調整は摩滅のため不明である。布留式期のものである。455 は弥生中期後半の高杯である。杯部に凹線文を巡らせる。456 は弥生中期後半の壺である。口縁部は短く外反し、端部は僅かに肥厚する。457 は有段高杯である。摩滅のため器面調整はほとんど不明である。庄内式期に位置付けられる。458 は弥生中期後半の壺である。口縁部端が上下に張り出す。胴部は外面がハケ調整、内面がヘラナデ調整である。459・460 は、ともに小破片であるが、V 様式系壺とみられる。

拓影を示した 480 は壺の胴部である。櫛描直線文が施されている。弥生中期中葉に位置付けられよう。

以上、図示した土器は弥生中期中葉から庄内式期までのものである。古代以降の遺物を含まない点は 03-1 区の SD006 と同じである。

ところが、この溝の西に広がる長方形土坑群とは僅かながら重複部分があり、本溝がそれらを削っている。一方、東に広がる不定形土坑とは、近接するが切合い関係はない。以上のことから、SD006 を含むこの一連の溝は不定形土坑と同じく近代に埋没したと考えられる。

そしてまた、長方形土坑群と一部重複しているとはいえ、土坑群がこの溝を越えて広がる状況は認められない。この溝が、河道 2 北東岸に分布する長方形土坑群の広がりを画しているかのようである。この点からすると、長方形土坑群と同時期にこの溝が掘削され、この溝が機能を果している期間中に不定形土坑も形成されたと考えられる。後述するように長方形土坑群は近世末に、不定形土坑は近代に形成されたと考えられることから、溝は 19 世紀中頃から後半代に機能していたとみられる。

#### 076 溝(第 44・69 図)

04-1 区のはば中央、080 溝より東方へ約 3.5m 離れて検出した。北から北西方向に緩やかに湾曲して伸びていて、080 溝とはほぼ平行している。南端はやや幅の広がった鰐頭状となって終わっている。一方、北西側は調査区外に伸びていて、端部の形状は不明である。なお、03-1 区において、076 溝の延長にあたる位置には溝が存在しないことから、03-1 区に到るまでに終わっていると考えられる。

076 溝の幅は 40~50 cm ほどで、南端の広まった部分では約 80 cm である。深さは 10~25 cm と浅いが、遺存する掘方は明瞭である。

080 溝の東に密集する不定形土坑は、本溝を超えてさらに東には広がらず、この 076 溝が不定形土坑のまとまりを画しているかのようである。

溝内の堆積土は、灰黄色粗砂を基調とし、部分的に暗青灰色粘土を混在している。080 溝に類似した堆積土質である。

出土上器は、21 点・275g を数える。そのうち 4 点・90g は V 様式系甕、残りの 17 点は弥生～古墳時代にかけての帰属不明確な上器で、2 点・75g は高杯、2 点・25g は甕、13 点・85g は器種不明である。破片重量は 1 点あたり 3g にすぎず、いずれも周辺堆積土からの混入品とみられる。また図示し得る遺物はなかった。

080 溝と一体的に機能していたと考えられることから、不定形土坑の形成期にこの溝も機能していたとみられる。なお、この溝と重複関係のある遺構には、後述する 079 溝がある。この 076 溝が 079 溝を切っている。

#### 079 溝(第 44・69 図)

076 溝と一部重複する、北西～南東方向の溝である。北・南正位に対して 45 度近く傾いているが、この方位は、周辺に残る水田の地割り方向とはほぼ一致しており、条里地割りから踏襲されているとみられる。

溝は、長さ 9m にわたって検出された。途中、攪乱(埋管掘方)で寸断され、その北西で溝の掘方が 10 cm ほど途切れているが、これは溝自体の浅さと、後世の削平によるためであり、本来はひと続きの溝であったと考えられる。溝の南東端は「く」字状に屈曲して、北東方向に延びる様相を示している。途中 2 カ所で北東方向に瘤状に張り出した部分があるが、それは壁体の崩れである可能性が高い。よって、溝の幅は 20～30 cm ほどである。深さは 5～10 cm ほどと浅い。これは、上述のように、本来の浅さと上面の削平に起因する。

堆積土は、灰色粘土の混じった黄灰色砂である。砂を基調としている点で、080 溝や 076 溝と共に通している。

出土土器は 5 点・35g を数える。そのうち 1 点・10g は V 様式系甕、1 点・5g は布留式系甕、3 点・20g は時期も器種もわからないものである。破片重量の低さに示されるように、これらはいずれも周辺堆積土からの混入品とみられる。また、図示できるものはなかった。

ところで、「L」字状を呈する形状から、この溝によってその北東域が開まれていたと推測できる。そして、その範囲には 073 土坑が存在しているので、不定形土坑が形成される頃には、機能を失っていたのであろう。このことは、076 溝に切り崩されていることからも追認される。079 溝の具体的な掘削時期は不明であるが、砂を基調とする堆積土が 080 溝や 076 溝と共に通している点を考慮すると、周辺における大規模削平後に掘削され、そして埋没した可能性が高いので、長方形土坑群と同じく近世末頃と考えておきたい。

#### 長方形土坑群(第 44～46・71・72・89 図)

04-1 区では、長方形土坑群の分布は 2 カ所に分かれる。ひとつは河道 2 と河道 3 に挟まれた範囲、いまひとつは河道 2 と 080 溝に挟まれた範囲である。前者では 23 基、後者では 13 基の長方形土坑を認めることができる。

この土坑群は、幅1mほど、長さは1m以上、8m近くまでの長方形土坑を長軸(南北)方向に僅かずつ重複するよう連接させ、さらに先行する土坑の壁体を完全に崩さない位置に短軸(東西)方向にも連ねて形成したものである。個々の土坑の詳細については第6表に示した。

河道2・3間の長方形土坑について、まず規模の点からみる。現状での長・短軸の距離を求める上、調査区外に延び出るものと除いて、1004が長軸1.0m、短軸が0.7mを測り、面積0.70 m<sup>2</sup>と最小である。長軸の最長は1014の6.3mであり、その短軸は1.1mで面積は6.93 m<sup>2</sup>である。また調査区外に延び出ているにもかかわらず、長軸6.0m、短軸1.4mを測る1015は現状面積が8.40 m<sup>2</sup>であり、長軸7.6m、短軸1.1m、面積8.36 m<sup>2</sup>の1021ともどもこの周辺では最大規模である。このように面積比では10倍強の差がある。

深さについては、大部分が調査区外に延び出している1022を除くと、1001の21cmが最も浅い。深いものとしては1010の61cmや1017の62cmがある。このように深さでも3倍ほどの差が認められる。

調査番号	平面形	堆積土	上面		底面		高さ	体積	備考
			長軸	短軸	反軸	短軸			
1001	方形	灰色粘シルト	220	90	167	68	21	0.3	切合小
1002	長方形	褐色砂質土(灰色粘シルト混入)、 纏合む	460	90	350	68	35	1.1	切合大
1003	方形	オリーブ褐色砂質土(青灰色粘シルト混入)	230	150	175	114	58	1.6	切合大
1004	方形	灰色砂シルト、纏合む	100	70	76	53	40	0.2	切合大
1005	長方形	黃褐色砂質土、纏合む	200	80	152	61	44	0.6	切合中
1006	長方形		260	170	198	129	47	1.6	切合大
1007	方形		100	60	76	46	31	0.1	切合大、調査区外に延びる
1008	方形		140	130	106	99	36	0.5	切合大、調査区外に延びる
1009	方形	黃褐色砂質土(灰色粘シルト混入)、纏合む	210	110	160	84	34	0.6	切合小
1010	長方形	褐色砂質土、纏合む	560	110	441	84	61	3.1	切合大
1011	長方形		320	90	243	68	50	1.1	切合大、調査区外に延びる
1012	長方形		640	110	486	84	55	3.1	切合大、調査区外に延びる
1013	長方形		250	80	190	61	25	0.4	切合大、河道2・重複
1014	長方形	褐色砂質土(灰オリーブ色粘シルト混入)、纏合む	620	110	479	84	50	2.7	切合大
1015	長方形		600	140	456	106	44	2.9	切合大、調査区外に延びる
1016	方形		240	130	182	99	28	0.7	切合小
1017	方形		140	100	106	76	62	0.7	切合中
1018	長方形		240	110	182	84	48	1.0	切合大
1019	長方形		210	90	160	68	32	0.5	切合中
1020	長方形	黃褐色砂質土(灰オリーブ色粘シルト混入)、纏合む	540	100	410	76	36	1.5	切合大
1021	長方形	黃褐色砂シルト、纏合む	760	110	578	84	25	1.6	切合大
1022	方形	オリーブ褐色砂質土(灰色粘シルト混入)、纏合む	180	—	137	—	15	—	切合大、調査区外に延びる
1023	方形		250	—	198	—	28	—	切合小、調査区外に延びる
1024	長方形	灰白色砂質土、纏合む	300	—	228	—	34	—	切合小、調査区外に延びる
1025	長方形	灰白色砂質土、纏合む	360	80	274	61	33	0.7	切合大、河道2・重複
1026	長方形		250	—	190	—	58	—	切合大、調査区外に延びる
1027	方形	明黄褐色砂質土・暗灰黄色砂シルト、纏合む	200	150	152	114	58	1.4	切合大
1028	長方形	灰黄色砂質土、纏合む	420	90	319	68	36	1.1	切合大、河道2・重複
1029	長方形		400	90	304	68	13	0.4	切合中、O860段と重複
1030	方形	明黄褐色砂質土・灰色彩シルト、 纏合む	150	130	114	99	12	0.2	切合大
1031	方形		90	70	68	53	43	0.2	切合大
1032	長方形	黃褐色砂質土・砂シルト、纏合む	390	140	295	106	28	1.2	切合大
1033	長方形	明黄褐色砂質土・纏合む	790	110	600	84	31	2.1	切合中
1034	長方形	にぶい黄褐色砂質土(灰色粘土)、 纏合む	250	70	190	53	28	0.4	切合小
1035	方形	灰白色砂シルト、纏合む	260	80	153	61	10	0.1	切合小
1036	長方形	褐色砂質土、纏合む	660	100	563	76	25	1.6	切合中、河道2・O860段と重複

第6表 04-1区長方形土坑一覧

られる。ところが、面積と深さは必ずしも対応していない。8m<sup>2</sup>を超えた1015では深さは44cmとやや深めだが、1021では25cmであるにすぎない。

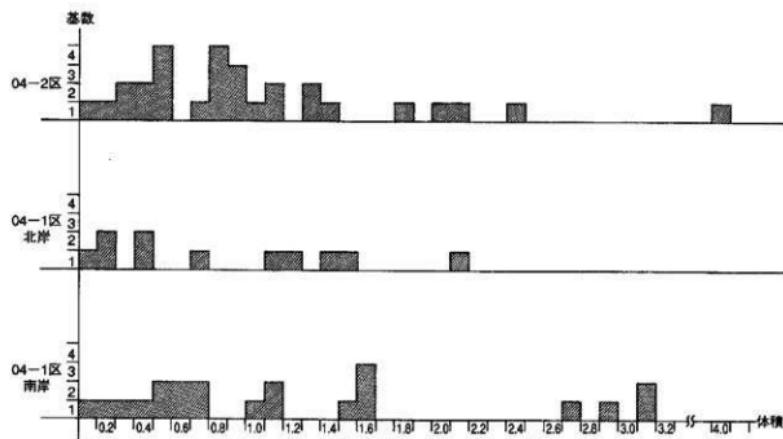
各土坑の体積を求めるとき、長軸あるいは短軸を推定でも求め得ない6基を除いて、0.3~3.1m<sup>3</sup>の範囲にある。やはり10倍ほどの差が認められるが、体積値の分布をみると0.2~0.7m<sup>3</sup>、1.0~1.6m<sup>3</sup>、2.7m<sup>3</sup>以上の3群に分かれる。ほとんど重複関係をもたない1005では0.6m<sup>3</sup>、1009でも0.6m<sup>3</sup>、1016では0.7m<sup>3</sup>であるので、これらが基本的な形態ではなかろうか。

土坑堆積についてみると、大半が褐色系砂質上で、1001と1004・1035が灰色系シルトである。ただこの灰色系シルトは1002・1009・1014・1020・1025・1030にも混在が認められる。また1001と1022を除いて礫を混入している。ひとつの土坑内では堆積土が単一あるいは上下2層に分かれ程度で、複雑な堆積状況を示すものはなかった。

河道3と080溝に挟まれた長方形土坑群についても同様にみていく。まず現状の長・短軸の長さをみると、1031が長軸0.9m、短軸0.7mで最小であるが、これは重複関係が著しいので、それに影響されているとも考えられる。長軸1.5m、短軸1.3mの1030や、長軸2.0m、短軸0.8mの1035が最小規模の部類に属そう。平面の面積をみても1031の0.63m<sup>2</sup>はおくとして、1030の1.95m<sup>2</sup>や1034の1.75m<sup>2</sup>、1035の1.60m<sup>2</sup>が最小の部類で、最大は1033の8.69m<sup>2</sup>であり、5~6倍の開きがある。

深さは、1035の10cmから1026・1027の58cmまである。そして体積についてみると、先述の河道2・3間の一群と類似した傾向が認められる。ただ、体積量の大きな一群には乏しく、2.1m<sup>3</sup>を測った1033が最大である。

体積分布から判断すると、0.4~0.7m<sup>3</sup>の掘方を基本とし、単独あるいは長軸方向に重複した長



第71図 長方形土坑の体積

方形土坑を、さらに前後左右に連接して土坑群を形成しているということができる。

土坑内堆積土をみると、褐色系の砂質土が主体をなすもの(1027・1030・1033・1032・1033・1036)と、灰色系の砂質土が主体であるもの(1024・1025・1028)、そして灰色系のシルトが主体であるもの(1035)に分かれる。ただし褐色系の砂質土が主体的なものでも、1030・1032・1033では灰色のシルト・粘土を混在している。また、各土坑の堆積土とも多少の差はあるが、礫を含んでいる。

このように04-1区の長方形土坑内堆積土についてみると、褐色系の砂質土と灰色系のシルト・砂質土を基調とし、礫を含み(多包する場合が多い)、褐色系砂質土の中に灰色系のシルトや粘土を混入する場合も多い、といえる。褐色系の砂質土や灰色系のシルトはともに、04-1区の基盤層にも認められる。しかし礫を多包した層は割合に少ない。礫を多包するのは、砂を基調とした河道内堆積上において顕著である。つまり、基盤層と河道内の礫が混ざり合われ、土坑内に埋め込まれたと考えざるを得ない状況にある。

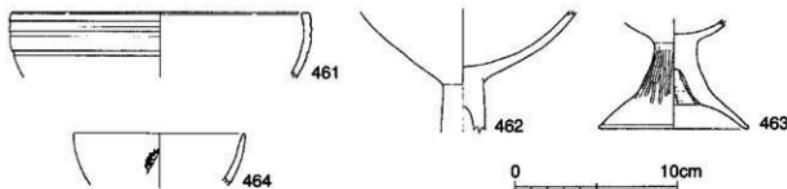
さらに、長方形土坑群の分布の特徴、すなわち、ひとつは砂を基調とする堆積土からなる河道2や河道3の上面には及んでいない点、いまひとつは080溝より東にも広がらない点、この2つの特徴もまた長方形土坑群の形成目的を考える上で重要な手掛かりである。

遺物は、2域の土坑群を合わせて619点・6080gが出土した。遺物には土器、須恵器、瓦器、磁器のほか砥石1点・115g(508)、サヌカイト片1点・5g(514)、不明鉄器破片2点・400gも含まれている。

上器には、弥生中期前半～布留式期のものが認められる。このうち庄内式期のものが16点・265gで、時期比定できるものの中では最も多い。また庄内式期の土器は、V様式系壺14点・250g、庄内式系壺2点・15gである。

		弥生 中期 前半	弥生 中期 中葉	弥生 中期 後半	弥生 後期	弥生 一括	庄内	庄内 ～ 布留	布留	弥生 ～ 古墳	須恵 器	瓦器	磁器	その 他	
1区	北岸	点数	0	1	7	2	7	10	0	5	331	2	2	1	3
	南岸	重量	0	60	145	45	200	175	0	145	2440	10	10	10	515
2区	点数	1	1	1	4	2	6	3	5	224	0	0	0	1	
	重量	10	25	10	170	50	90	90	175	1700	0	0	0	5	
		点数	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	
		重量	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	

第7表 長方形土坑群出土遺物組成



第72図 長方形土坑出土遺物

須恵器は2点・10g、瓦器も同じく2点・10g、磁器は1点・10gで、弥生～古墳時代の土器に比べると圧倒的に点数が少ないが、磁器がこの長方形土坑群の埋没時期を示すと考える。

この619点の遺物のうち、復元実測により図示し得たものは6点、拓影で示したものは1点である。

461は弥生中期後半の高杯である。杯部に3条の円線文が巡る。462も高杯で、弥生後期に位置付けられよう。柱状の脚部をもつ。全体に磨耗していて、器面の調整は不明である。463も高杯である。裾部は内湾気味である。脚部外面はミガキ・ユビナデ調整がなされている。布留式期に位置付けられよう。

464は磁器碗である。近世後期に比定できる。このほか砂岩製の砥石(508)とサスカイト剥片(514)も出土している。砥石は現長6.6cm、厚さは3.3×2.7cmで、3面に研磨痕が認められる。石質は稠密である。514は3.4×3.6cmほどの剥片である。1辺で剥離痕が連続しているが、意図的なものではないとみられ、刃器ではないと考える。

拓影で示した500は、外面ヨコハケ調整がなされた円筒埴輪片とみられる。内面調整についてには、摩滅のため不明。

以上が36基の長方形土坑から出土した遺物のうちで図化できたもの、あるいは拓影で示し得るものである。弥生中期後半～布留式期のものがほとんどであるが、近世後期の磁器も1点だが含まれていた。したがって、弥生・古墳時代の土器は土坑を埋める砂質土に混入したもので、上述したように、土坑の埋没時期を決定するのは磁器碗であると考えられる。

#### 004土坑(第44・73・74図)

04-1区の北東辺近くに位置する不定形土坑である。南北1.4m、東西2.9mを測る。底面はほぼ平坦で、深さは6cmほどと浅い。

堆積土は明黄褐色シルトの単一層で、黄灰色砂シルトを混合し、炭化物も僅かに含む。

出土土器は6点・5gである。1点当たり1g以下の小破片で、詳細な時期比定ができるものばかりであり、図示もできなかった。

#### 016土坑(第44・73・74図)

04-1区の北東辺近くにあり、上述した004土坑からは南西方向に約50cmの距離にある不定形土坑である。北西-南東方向に3.1m、北東-南西方向に2.4mを測るが、平面形はまさに不定形である。深さは5~15cmほどである。底面は緩やかに起伏している。

堆積土は灰色粘シルトの単一層で、礫の混入は認められない。

出土土器は36点・130gを数える。1点・15gはV様式系の甕、残りの35点・115gは時期や器種の比定ができない小破片である。いずれも図示できなかった。

#### 025土坑(第44・74・75・79図)

004土坑や016土坑の南東の、04-1区北東隅に位置する不定形土坑である。一部を重複させた2基の土坑であるが、検出時にひとつと判断して遺構番号を付したため、ここでもそれに従って

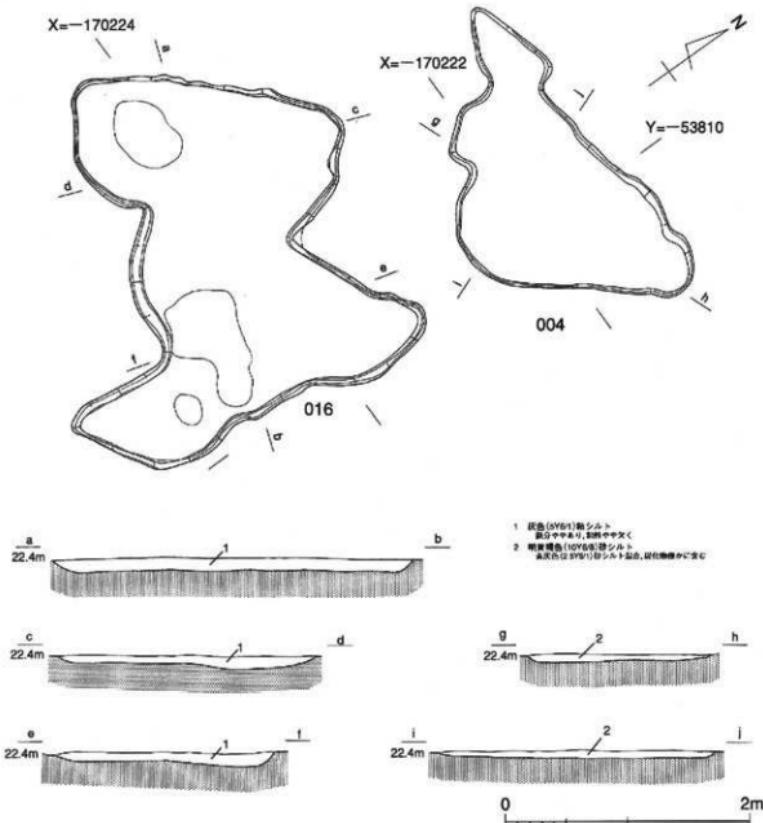
おく。

よってこの土坑は、北寄りの南北6.5m、東西4.5mの掘方と、南寄りの南北5.5m、東西2.5mの掘方からなる。

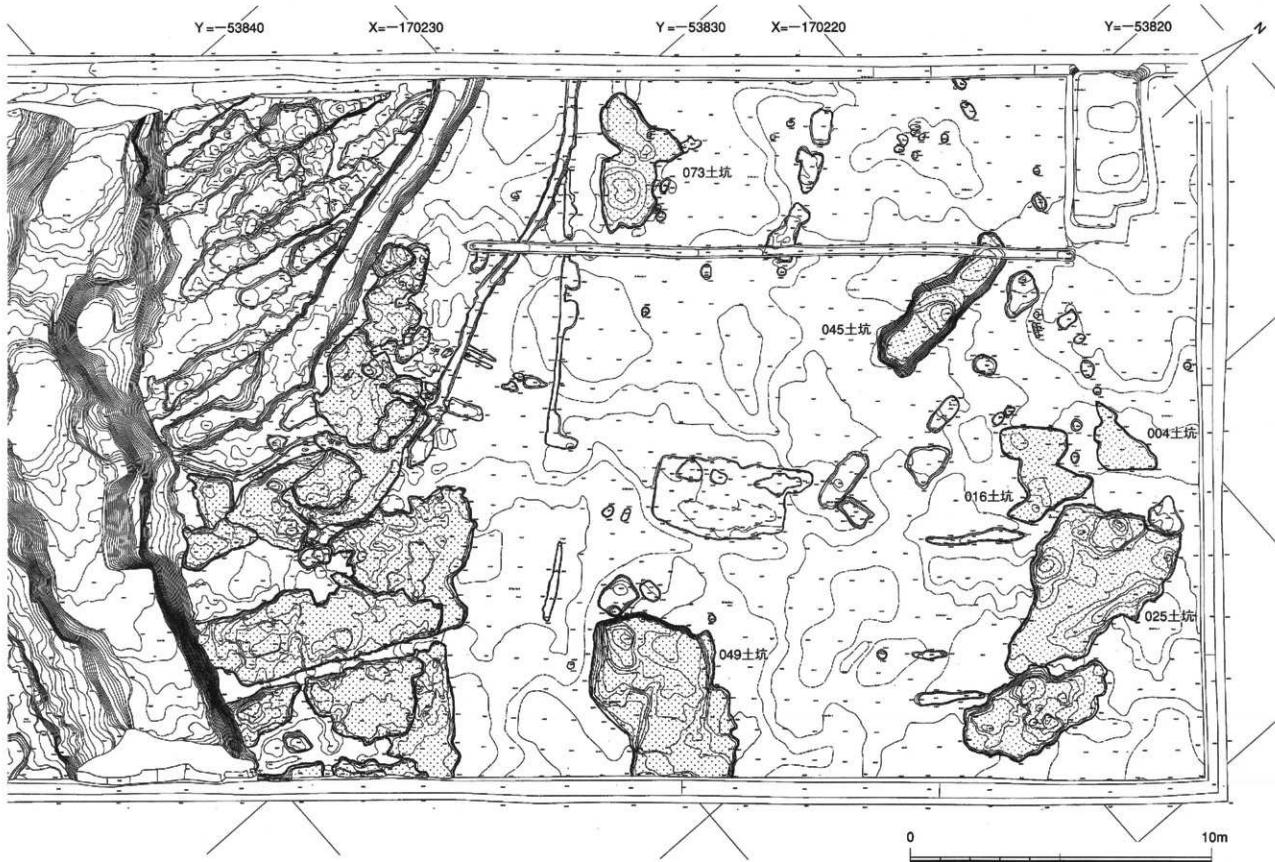
双方の掘方ともに底面には起伏があり、北寄りの掘方では最深40cm、南寄りの掘方でも40cmほどを測る。

堆積土は、北寄りは掘方底面上にぶい黄褐色砂質土が、南寄り掘方の底面上には灰色粘シルトが溜まり、その上に褐色砂シルトが土坑全体を覆うという状況にある。

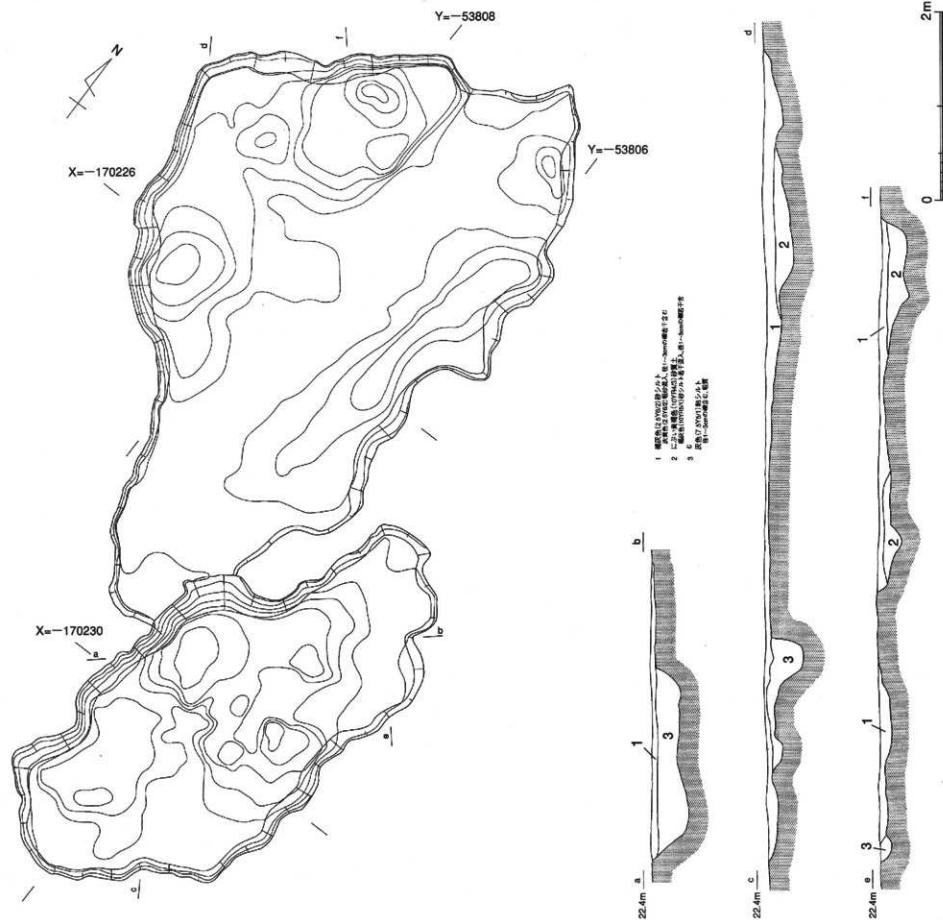
出土遺物は374点・1890gを数える。遺物は弥生中期後半～布留式期土器が大半を占めているが、須恵器1点・5g、灰釉陶器1点・5g、瓦器3点・15g、陶器1点・5g、磁器1点・5g、鉄器1点・65gも含まれている。



第73図 004-016土坑



第74図 04-1区検出の不定形土坑



第75図 025土坑

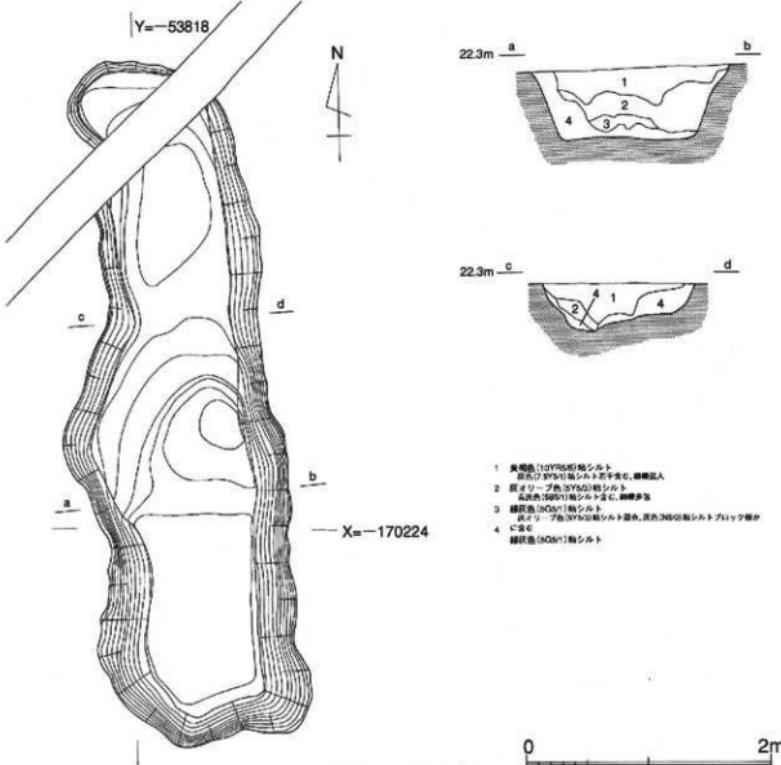
出土遺物全体のうち、307点・1190g(全体の82.1%・63.0%)は時期・器種不明の土器であり、これを除くと庄内式期の土器が26点・320g(8.5%・16.9%)と最も多い。また庄内式期の土器は、V様式系甕が25点・315g、庄内式系甕が1点・15gである。

弥生～古墳時代の土器が大半を占めているが、この遺構の埋没時期は磁器や陶器に示される年代を上限とする。

出土遺物のうち467と468の2点を図示した。467は弥生中期後半の鉢である。粘土帯の貼付により口縁部が肥厚している。胴部に簾状文を施す。468は灯明皿である。全体に施釉されている。近世代のものではあるが、時期の詳細については不明である。

#### 045土坑(第44・74・76図)

04-1区の北東部に位置する不定形土坑である。016土坑からは西方3.5mの距離である。南北5.6m、東西1.9mを測る。西辺は多少湾曲しているが、全体としては比較的整った長方形を呈している。底面は割合に平坦であるが、南方に下降している。深さは最大60cmを測る。



第76図 045土坑

